

岩手県埋文センター文化財調査報告書第84集

川口II遺跡発掘調査報告書

国道4号川口バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省岩手工事事務所

川口II遺跡発掘調査報告書

国道4号川口バイパス関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。この貴重な文化財の保護・保存もまた県民の責務であります。

現代生活を豊かにするという開発指向と文化財の保護という両者の均衡を保つことは、このような中で、大きな課題となってきました。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会事務局文化課の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査し、その記録を残す措置をとって参りました。

本報告書は、本県を縦断する一般国道4号の岩手町川口地内の交通緩和のために計画された「川口バイパス工事」に関連し、昭和58年度に発掘調査した川口II遺跡の調査結果をまとめたものであります。当遺跡では縄文時代の竪穴住居跡や土坑が発見されました。住居跡には出入口施設と思われるものがあるなど、北上川上流域における歴史解明の資料になるものと考えます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財理解の一助となることを期待しております。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にあたり、ご協力ご援助を賜りました岩手町教育委員会、建設省岩手工事事務所をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和59年9月

(財)岩手県埋蔵文化財センター
理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子彰吉	(県教育長)
副理事長	尾沢重達	(県教育次長)
常務理事	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部長)
〃	高橋健之	(県林業水産部次長)
〃	穂積昭慈	(県土木部次長)
〃	板橋源	(県立博物館長)
〃	草間俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小杉信夫	(元常務理事)
監事	佐藤公志	(県教委総務課長)
〃	小野寺英二	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷正男				
副所長	宮宮英一				
所付	吉田努				
[総務課]					
総務課長	菊池勉		専門調査員	中田村良一	
庶務係長	阿部昭夫		〃	田村壮一	
主事	戸草内幸夫		〃	岩井文行	
〃	立花多加志		〃	光川英喜	
技能員	佐藤春男		〃	玉川長喜	
[調査課]			〃	石川謙一	
調査課長	近藤宗光		〃	三浦与右衛門	
主任専門調査員	昆野光靖		〃	高橋義介	
〃	国生尚		〃	高橋清	
専門調査員	片方宗明		(資料課)	佐々木	
〃	長沼彬		資料課長	名須川溢男	
〃	原一則		専門調査員	菊池藤利和	
〃	大渡洋一		〃	工藤重幸	
〃	田鎖寿夫		〃	中川重宗	
〃	佐々木直		〃	酒井	
〃	橋沢満				
〃	平井進				

例 言

1. 本報告書は岩手県岩手郡岩手町大字子抱第17地割字岩崎地内に所在する川口II遺跡に対する発掘調査の結果を取録したものである。
2. 本遺跡に対する調査は国道4号川口バイパス建設に伴う事前緊急発掘調査である。調査は建設省岩手工事々務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 川口II遺跡の台帳番号と調査時の遺跡略号は次のとおりである。

登録台帳番号 KE-27-2321

遺跡略号 KGII83

4. 現地での発掘調査は昭和58年5月12日に開始され、同年8月8日に終了した。室内整理は昭和58年12月1日から昭和59年2月29日まで行なわれた。
5. 発掘調査と報告書の作成は当埋蔵文化財センター専門調査員高橋与右衛門・同玉川英喜が担当した。
6. 本遺跡から検出された遺構の種類と遺構数は次のとおりである。
 - 住居跡—5棟
 - 土坑類—22基
 - 溝状遺構—1条
7. 本遺跡から出土した遺物の中から、本報告書には、次の点数を掲載した。
 - 縄文土器—439点（実測図125点・拓影図314点）
 - 土製品—37点
 - 石器—76点
 - 石製品—3点
8. 本報告書の執筆分担は次のとおりであるが、文末に氏名を明記した。
 - I. 調査に至る経過 嶋 千秋（前調査課長）
 - II. 調査の法方と調査の経過 玉川英喜
 - III. 遺跡の位置と立地および環境 高橋与右衛門・酒井宗孝
 - IV. 基本層序 高橋与右衛門
 - V. 検出遺構と共伴遺物—遺構分 玉川英喜
 - 遺物分 高橋与右衛門
 - VI. 遺構外の出土遺物 高橋与右衛門
 - VII. まとめ 高橋与右衛門
 - VIII. さいごに 高橋与右衛門
9. 分析や鑑定は次のように依頼した（敬称略）
 - 放射性炭素による年代測定 学殖院大学

○石質鑑定

佐藤二郎（県立大渡農業高等学校教諭）

10. 遺跡地内の基準点成果値は建設省が測量した成果によったが、次のとおりである。
基点一1（中心杭No.124） $X=-8,268.300m$ $Y=+31,239.126m$ $H=219.021m$
基点一2（中心杭No.122） $X=-8,304.991m$ $Y=+31,223.231m$ $H=218.946m$
11. 発掘調査や室内整理では次の機関や方々から御協力を賜った。（敬称略）
岩手町教育委員会 高橋昭治（県文化財保護指導員） 渡辺 誠（名古屋大学）
12. 現地調査では岩手町川口・久保地区の方々29名、室内整理は当理文センター室内整理員3名のご協力をいただいた。
13. 本遺跡の調査結果は、現地説明会資料や昭和58年度調査略報の中で公表されているが、本報告書と食い違いのある場合は、本報告書を正しいものとする。
14. 本遺跡の調査によって得られた一切の資料（実測図・写真・全遺物）は当理文センターが保管している。
15. 本報告書の編集・レイアウト・校正は、高橋と玉川が担当した。

本文目次

序	①		
岩手県埋蔵文化財センター組織	②		
例言	③		
I. 調査に至る経過	3	1. 住居跡	27
II. 調査の方法とその経過	3	2. 土坑	49
1. 野外調査の方法	3	3. 溝状遺構	72
2. 室内整理	5	VI. 遺構外の出土遺物	74
3. 報告	6	1. 土器	74
4. 調査の経過	7	2. 土製品	97
III. 位置と立地および環境	8	3. 石器	102
1. 遺跡の位置と周囲の環境	8	4. 石製品	109
2. 地形面区分と地質	9	VII. まとめ	110
3. 歴史的環境	13	1. 遺構	110
IV. 基本層序	22	2. 遺物	116
V. 検出された遺構と伴出遺物	27	VIII. さいごに	128

図版目次

第1図 岩手県全図	1	第21図 BD 2住居跡(遺物-5)	48
第2図 川口バイパス関連遺跡の位置図	2	第22図 土坑-1(AC 1土坑)	50
第3図 遺跡周辺地形分類図	11	第23図 土坑-2 AC 2土坑-1 AC 2土坑-2 ...	52
第4図 岩手町の遺跡位置図	15	第24図 土坑-3 AN 3土坑 AN 4土坑 AN 4土坑	55
第5図 基本土層図	22	第25図 土坑-4 BA 16土坑 BB 3土坑-1 ...	57
第6図 川口II遺跡グリッド・遺構配置図	25	第26図 土坑-5(BB 16土坑)	59
第7図 AC 2住居跡-1(遺構)	28	第27図 土坑-6(BC 3土坑-1 BC 3土坑-3) ...	61
第8図 AC 2住居跡-1(遺物-1)	29	第28図 土坑-7(BC 3土坑-1)	62
第9図 AC 2住居跡-1(遺物-2)	30	第29図 土坑-8(BC 3土坑-2)	63
第10図 AC 2住居跡-2(遺構)	32	第30図 土坑-9(BC 3土坑-4 BC 4土坑-1) ...	66
第11図 BB 1住居跡(遺構)	34	第31図 土坑-10(BC 4土坑-2)	67
第12図 BB 1住居跡(遺物-1)	35	第32図 土坑-11(BD 4土坑)	68
第13図 BB 1住居跡(遺物-2)	36	第33図 土坑-12(BF 4土坑)	70
第14図 BB 3住居跡(遺構)	38	第34図 土坑-13(BI 3土坑)	72
第15図 BB 3住居跡(遺物)	39	第35図 溝状遺構	73
第16図 BD 2住居跡(遺構)	41	第36図 粗掘り時出土土器片数(グリッド別) ...	75
第17図 BD 2住居跡(遺物-1)	45	第37図 遺構外の遺物(土器-1)	78
第18図 BD 2住居跡(遺物-2)	46	第38図 遺構外の遺物(土器-2)	81
第19図 BD 2住居跡(遺物-3)	47	第39図 遺構外の遺物(土器-3)	84
第20図 BD 2住居跡(遺物-4)	47	第40図 遺構外の遺物(土器-4)	86

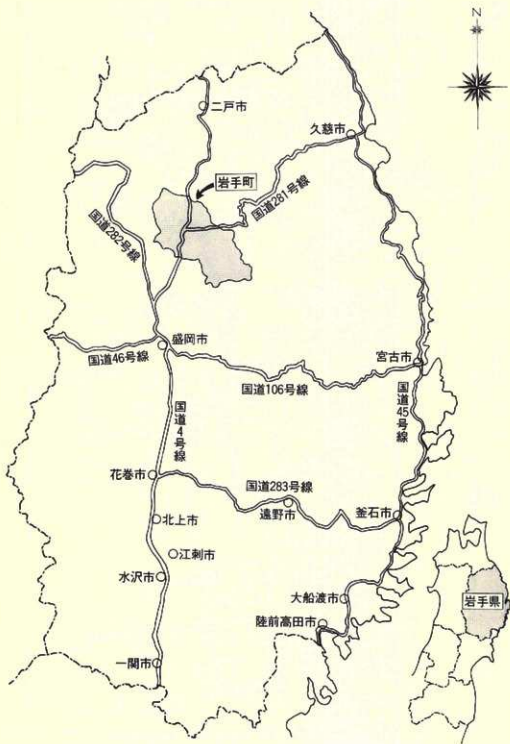
第41図	遺構外の遺物 (土器-5)	88	第50図	遺構外の遺物 (土器-14)	99
第42図	遺構外の遺物 (土器-6)	89	第51図	遺構外の遺物 (土製品-1)	100
第43図	遺構外の遺物 (土器-7)	90	第52図	遺構外の遺物 (土製品-2)	101
第44図	遺構外の遺物 (土器-8)	92	第53図	遺構外の遺物 (石器-1)	103
第45図	遺構外の遺物 (土器-9)	93	第54図	遺構外の遺物 (石器-2)	105
第46図	遺構外の遺物 (土器-10)	95	第55図	遺構外の遺物 (石器-3)	107
第47図	遺構外の遺物 (土器-11)	96	第56図	遺構外の遺物 (石器-4)	108
第48図	遺構外の遺物 (土器-12)	97	第57図	遺構外の遺物 (石製品)	109
第49図	遺構外の遺物 (土器-13)	98	第58図	土器底部嗣代痕模式図	122

表 目 次

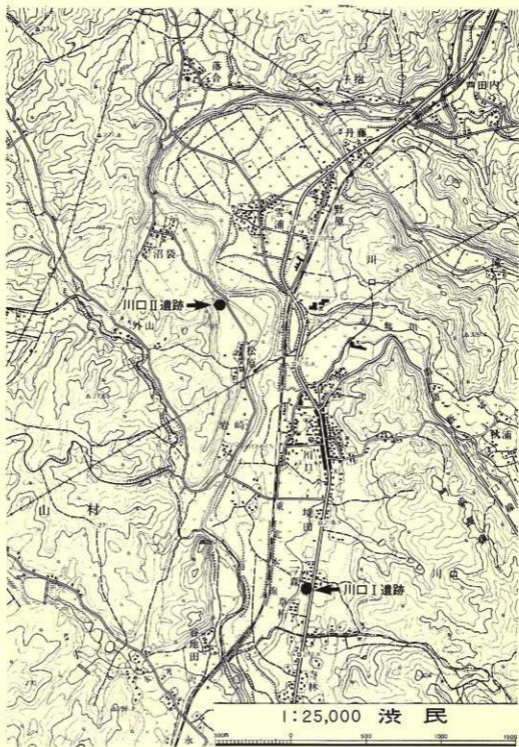
第1表	岩手町内の遺跡一覧表	14	* 第4表	嗣代痕計測表	120
第2表	時期別・性格別遺跡数	18	第5表	石器計測一覧表	125
第3表	縄文時代の時期別遺跡数	18			

写 真 図 版 目 次

PL-1	遺跡全景 (空中写真)	129	PL-21	遺構内の遺物	149
PL-2	遺跡の遠景と近景	130	PL-22	遺構内の遺物	150
PL-3	調査風景	131	PL-23	遺構内の遺物	151
PL-4	現地説明・基本順序	132	PL-24	遺構内の遺物	152
PL-5	AC 2 住居跡	133	PL-25	遺構内の遺物	152
PL-6	BB 1 住居跡	134	PL-26	遺構外の遺物	153
PL-7	BB 3 住居跡	135	PL-27	遺構外の遺物	154
PL-8	BD 2 住居跡	136	PL-28	遺構外の遺物	155
PL-9	BD 2 住居跡	137	PL-29	遺構外の遺物	156
PL-10	土 坑	138	PL-30	遺構外の遺物	157
PL-11	土 坑	139	PL-31	遺構外の遺物	158
PL-12	土 坑	140	PL-32	遺構外の遺物	159
PL-13	土 坑	141	PL-33	遺構外の遺物	160
PL-14	土 坑	142	PL-34	遺構外の遺物	161
PL-15	土 坑	143	PL-35	遺構外の遺物	162
PL-16	土 坑	144	PL-36	遺構外の遺物	163
PL-17	溝状遺構	145	PL-37	遺構外の遺物	164
PL-18	遺構内の遺物	146	PL-38	遺構外の遺物	165
PL-19	遺構内の遺物	147	PL-39	土器底部嗣代痕模式図	166
PL-20	遺構内の遺物	148			



第1図 岩手県全図



第2図 川口バイパス関連遺跡の位置図

I 調査に至る経過

岩手郡岩手町川口地内を通る一般国道4号の交通緩和を目的として計画された川口バイパス建設工事にかかわる埋蔵文化財のとり扱いについての協議は、昭和53年から県教育委員会事務局文化課と建設省岩手工事事務所の間でもたれた。当時は実施設計ルートが未確定の段階であり、とりあえず文化課では予定ルート内の分布調査を実施することにした。

分布調査は昭和54年に行われ、バイパス南側起点付近の川口Ⅰ遺跡とさらに北西1.8km地点の北上川右岸、河岸段丘上に川口Ⅱ遺跡があることを確認した。その結果にもとづき岩手工事事務所側の用地取得、工事計画等を加味し発掘調査計画の調整が重ねられた。

本報告書に関する川口Ⅱ遺跡の発掘調査は、当埋文センターが岩手工事事務所との契約の上昭和58年5月から着手することになった。同年4月には両者の現地立会を行い調査方法等の打ち合せをした。

II 調査の方法とその経過

1. 野外調査の方法

〔調査区の設定と遺構の呼称〕

本遺跡の調査範囲はバイパス本線部分と町道付け替え路線部分とからなる。本線部分は路線中心杭No124から同No122の南10mまで約50mの距離があり、路線幅は約30mである。町道部分は本線の東側と西側にある。東側は本線の調査範囲南端とL字状に接続し、長さ約30m・路線幅12m～15mである。西側は本線の約40m西方に位置する長さ約30m・路線幅約16mの範囲で、本線とほぼ並行している。以下西側部分は飛び地と呼称する。

調査区は、本線の中心杭No124とNo122を直線で結んで基線とし、基線の東西両側を4m単位で区画した。さらに、中心杭No124を基点にして南北両側に4m単位で区画した。従って、調査区の最小単位は4m×4mとなるように設定し、飛び地を含めた遺跡全面を区画した。なお、基線とした本線の中心軸を境にして東側をAブロック、西側をBブロックと大区画した。区画線の名称は本線の中心軸を1とし、その両側に順次2・3・4と付し、実際の呼称はブロック名と合わせA1・A2・B1・B2とした。南北の区画線はA・Bブロック共通とし、最北の軸線から南へA・B・Cとし、1調査区はこれらの組み合わせでAA1・AB1・BF16等と呼ぶことにした。実際の呼称に当ってはAブロックが北西の交点名、Bブロックは北東の交点名をその調査区の名称とした。

遺構名の呼称は調査区名と遺構の種類名を組み合わせ、AA1住居跡・BD2住居跡とし、土坑もこれに準じた。なお、1調査区内に同種の遺構が複数ある場合はAA1住居跡-1・AA1住居跡-2として区別した。また、同種の遺構が重複している場合も、複数ある場合の命名方法に準じたが、新遺構を1にし、旧遺構を2とした。

本遺跡の調査区は道路中心軸（AB1軸線）が磁北に対して34度30分東偏している。なお、基点の平面直角座標第X系による座標値は次のとおりである。

基点-1 X=-8,268.300m Y=+31,239.126m H=219.021m

基点-2 X=-8,304.991m Y=+31,223.231m H=218.946m

なお、基点-1は中心杭No124、基点-2は同No122を使用し、軸線上では前者が「B1」、後者が「L1」に相当する。

〔粗掘りと遺構検出〕（PL-3）

粗掘りは調査範囲の現況が畑地であることや、表土に礫の混入があってあまり厚くないという予想で人力で行なうことで計画し、実際的には次のようにした。各調査区の四辺50cmを畦畔として残し、3m四方を市松掛けで掘り進み、次いで残りの3m四方、最後に通路とした畦畔と表土を除去したが、若干の畦畔は土層観察用として遺構検出が終了するまで残した。粗掘りで除去した土は表土に限定するように心掛けたが、表土が15cm位と比較的薄く、さらに表土の起源となったII層の黒色土も5cm～10cmと薄いため、最終的には表土と黒色土を区別することができず、同時に除去する結果となった。

遺構検出はIII層とした黒褐色土の上面で行なった。ほとんどの遺構はこの面で確認されており、これらの遺構を精査後さらに15cm掘り下げて二回目の遺構検出を行なった。その結果、新たに住居跡2棟、土坑6基が検出された。

以上の状況はAブロック・Bブロックとも基本的に同じであるが、飛び地の表土・黒色土・黒褐色が他地域より相当厚いために、遺構検出に若干手間取った。

〔遺構精査と遺物の取り上げ方〕

遺構は、住居跡が4分法、土坑と柱穴状小土坑は2分法を原則に、溝状遺構は適宜畦畔を残して精査した。実際の精査では層位ごとに掘り進めたが、土層の不明瞭な場合は5cmごとに1面・2面として掘り下げた。

粗掘り中に出土した遺物は各調査区ごとに層位を確認の上収納した。一部の調査区はI層（表土）とII層（黒色土）と区別ができず、両層を一括した。その中で完形となり得る土器は写真撮影の後取り上げた。

遺構内からの出土遺物は層位と地点が明確になるように取り上げ、床面直上から出土した遺物は図面に記入し、写真撮影の後収納した。ただし、土坑の場合は出土量が少ないために、埋土一括で取り上げた場合が多かった。

〔記録〕

遺構の実測は簡易造り方測量で行なった。平面図は調査区區画線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線として実測した。この方法は各遺構とも共通している。土層断面図は水平水糸を張って、それを測量基線とした。

実測図の縮尺率は平面図・土層断面図とも1/20を原則としたが、細部の実測では1/10で行なった場合もある。遺構配置図は縮尺1/20の平面図を1/100に縮小して作成した。

土層名は、基本層序は上位からローマ数字でⅠ層・Ⅱ層とし、さらに細分される場合はアルファベットの小文字を付し、Ⅰa層・Ⅰb層とした。遺構の埋土も基本的には同じで、上位からアラビア数字で1層・2層とし、細分される場合は基本層序のそれに準じた。

写真は6cm×7cm版1台（モノクロ）、35mm版2台（モノクロ・カラーリバーサル）を一組にして撮影した。実際の撮影は埋土土層・遺物の出土状況・完掘後全景・細部拡大等であるが、その他必要と認めた時は随時行なった。撮影の記録は撮影カードを作成し、「いつ」「なにを」撮影したかが常に判るようにした。

2. 室内整理

現地調査終了後の室内整理は、昭和58年12月1日～翌59年2月29日の期間である。実際の作業は遺構関係・遺物関係・写真関係に大別されるので、次にそれぞれについて述べる。

〔遺構関係〕

現地で作成した遺構関係の実測図は、現地で点検は終了していたが、再度点検の上報告書用トレースを行った。トレース用原図は原則として縮尺1/10か1/20を使用した。溝状遺構は1/80に縮小して原図とした。遺構配置図は既述の縮尺1/100を1/200に縮小してトレース原図とした。

〔遺物関係〕

出土遺物の水洗・記名と一部の復元は現地で終了していたので、種類別に仕分けした後、遺構別・調査区別・層位別に細分した。その次に、復元可能な個体と実測可能な個体を選別して復元作業や実測作業を進めた。残った破片類は、土器では出土点数を計算し、拓影図を作成し

て報告書に掲載する破片の選別を行なった。実測図や拓影図を作成した遺物は台帳に登録した。実測図や拓影図は土器・石器ともに実物大で実測し、トレースした。実際に実測した土器は、底部破片も含めて125点になり、拓影図作成は314点、その他土製品は実測・拓影図含めて37点である。石器・石製品は79点実測した。

本報告書には、実測図や拓影図を作成した個体は全て掲載した。

[写真関係]

現地で撮影した写真は、ネガアルバムやスライドファイルに入れて整理し、撮影カードと1組にした。ネガフィルムはベタ焼きも同時に貼り付け、引き伸しの際に目安とした。

遺物の写真は、実測図や拓影図を作成したものと、特殊遺物は全て撮影し、本報告書にもそれを使用した。

3. 報告

以上の既述した作業を経て本報告書が作成された。

本報告書の全体的な構成は以下のとおりである。

[遺構関係]

住居跡は縮尺1/40・土坑1/30・溝状遺構1/200・遺構配置図1/400・基本土層図1/30の縮尺率で掲載されているが、各図版ごとに縮尺率を明記した。

また、図版中で使用した略号やスクリーントーンは以下のことを表わしている。

凡例—1

S—際

Po—土器

P₁・P₂……P_n—柱穴と柱穴状小土坑



焼土



貼床



炭化物



重複新遺構



重複旧遺構



地山



調査区域外



未調査

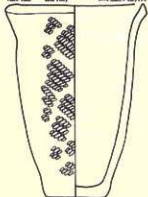
〔遺物関係〕

縮尺率は、土器実測図1/3・1/4、土器片拓影図1/3、土製品2/3・1/2、剥片石器2/3・1/2、礫器1/3、磨製石斧1/2、石製品2/3で掲載したが、各図版にその旨明記した。

また、土器の実測図には出土地点・層位・分量は凡例2のようにし、石器については凡例3のように示した。

凡例-2

口径・底径・器高 出土地点・層位



分量で（ ）内の値は推定値又は残存値

〔写真関係〕

遺構関係の縮尺は不定である。

遺物は統一するよう心掛け、以下のようにした。しかし、実測図と違っておおよその縮尺率であることをお断りしておく。

○土器——1/3を原則とし大型は1/6、土器片1/3 ○土製品——2/3・1/2

○石器——石鏃と石錐は実物大、その他の剥片石器1/2、磨製石斧1/2、礫器1/3 ○石製品——2/3

〔原稿執筆〕

現地調査を担当した高橋と玉川が中心になって執筆した。内訳は巻頭例言のとおりである。なお、「放射性炭素による年代測定」は、分析者である学習院大学からの報告書の主要部分を掲載した。

4. 調査の経過

野外調査は5月12日の現場設営から開始され、当日午後から調査範囲内の雑物撤去をして調査区設定の準備を行なった。翌13日に地区割りや調査区の設定をし、順次粗掘りに着手した。最初是本線部分の粗掘りを進め、東側町道付け替え分も含めて6月1日でほぼ終了し、引き続

凡例-3



きこの部分の遺構検出作業に入った。飛び地分の粗掘りは6月3日から開始したが、黒色土が深く、検土杖で確認の結果80cm～90cmの層厚に達する所もあり、とりあえず約30cm掘り下げ遺構検出を行なった。その結果、Ⅲ層とした黒褐色土上面で、本線・飛び地合わせて住居跡3棟、土坑類14基が検出された。6月14日からは本格的な遺構精査に入り、7月10日頃には既述した遺構の精査を終了し、7月14日には約55名の参観者のもとに現地説明会が開催された。

Ⅲ層には中位～下位まで遺物が包含されていることが判明したため、7月7日から本線分は約10cm、飛び地分約20cm掘り下げ、再度遺構検出した結果、本線分で住居跡2棟、土坑類6基が、そして飛び地分で土坑類2基が新たに検出された。第二次遺構検出で検出された遺構の精査は7月19日から着手し、検出された遺構の精査は8月1日で一切終了した。その後、8月4日まで駄目おしの検出作業を続けた。その結果、Ⅲ層下位から縄文時代早期中葉の土器片が3点出土したが、他に遺物や遺構が発見されないことから、基本層序の土層図を作成して、調査に伴う一切の作業を終了した。その後、器材の洗浄、整備、一部の埋め戻しを行なって8月7日に現地を撤収した。

Ⅲ 位置と立地および環境

1. 遺跡の位置と周囲の環境

1) 位置 (第2図)

本遺跡は岩手県岩手郡岩手町大字子抱第17地割字岩崎167を中心とする場所に所在し、国鉄東北本線岩手川口駅の北々西1.0kmに位置する。岩手郡岩手町は沼宮内町・川口村・一方井村・御堂村の一町三ヶ村が合併して生まれた町で、「子抱」地区は旧御堂村に属している。当町は岩手郡内では最も北に位置し、北は二戸郡一戸町、東は岩手郡葛巻町、南は同郡玉山村、西は同郡西根町と接している。盛岡市の中心部からは約30km北方に位置し、国道四号と国鉄東北本線が縦貫している。

「大字子抱」地区は北上川の右岸南端部を占め、東方は北上川を挟んで当町川口地区と接し、南は岩手郡玉山村、西は当町一方井地区とも接している。

遺跡は、国道4号を北上し、川口集落南端の交通信号機の在るT字路で左折し、東北本線の「路切」と「北上川」に架かる橋を渡った所で右折し、そのまま1km強北進した所の、道路西側の沖積古期段丘の段丘崖縁に在る。

2) 立地と周囲の環境 (PL-1, 2)

北上川は御堂にある御堂観音(北上山新通法寺正覚院)の境内地に湧く「弓弭の泉」を源流として流れをおこし、北から朽木川・小山沢・横沢川・笈の口川・江刈内川・芦田内川・丹藤川・一方井川・古館川等(以上岩手町内の各支流)その他多くの流れを合わせて南流し、宮城県石巻市で太平洋に注いでいる。遺跡はその北上川の右岸段丘崖沿いに立地し、現在の河床とは約8mの比高があり、遺跡地内の標高はほぼ219mである。北上川は芦田内川との合流点近くで流れを大きく西へ転じ、沼袋地区で円を描くようにさらに東方に流れを変えており、本遺跡付近では北方約50m、東方で約350mの所を流れている。比較的蛇行の強い流路を形成し、その兩岸には低位から沖積古期段丘、洪積低位段丘の段丘群が発達している。しかし、北上川が形成した流路幅は500m～1kmと狭く、東側は北上山地、西側は一方井地区の丘陵地が迫っている。洪積中段段丘やその上位の段丘発達は悪く、松内段丘と呼ばれる山地裾部の緩傾斜地があるのみである。確認されている段丘も両岸に細長く続き、全体的に小規模である。本遺跡は、その中でも氾濫原を除くと最も低位の段丘面(沖積古期段丘面)に立地し、対岸に在る川口I遺跡の立地面(洪積低位段丘面)より低い面である。

遺跡の周囲に限定してその環境をみると、西側には標高260m位の丘陵があり、その東側に本遺跡の載る地形面が取り付いている。北側の段丘崖直下は氾濫原であり、東と南には同位の段丘面が続いている。遺跡の立地する段丘は、西の丘陵地際が南北に長い窪地状を示し、その東側には窪地に並行する微高地がみられることから、窪地部は北上川の旧河道で微高地はそれに伴う自然堤防と理解することができるであろう。このような窪地と微高地の関係は数ヶ所で観察される。本遺跡はその中でも微高地部に立地している。

2. 地形面区分と地質 (第3図)

岩手県は、その面積の大部分が山地・丘陵に占められており、平野は僅か1割に満たない。東側は、県の面積の3分の2にあたる北上山地が南北に走り、西側には東北地方の脊梁をなす奥羽山脈が帯状に延びている。そして、これらの山地の間を縦断するように南下する北上川と、北流する馬淵川が狭い低地帯を作り出している。

北上山地と奥羽山脈とはその地質構造を大きく異にする。古生層・中生層とこれを貫く花崗岩類から成り、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原となった北上山地に対し、奥羽山脈は新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地で、山塊も険しく、これに那須火山帯が併走するため現在活動している火山も多い。

北上山地北部に源を発し、宮城県石巻湾に注ぐ北上川は、本流延長249km、流域面積10,250km²

に及ぶ東北地方最大の河川である。北上川によって形成された北上川低地帯は、県の平野部の約70%を占めている。川の西岸と東岸では、前述した山地の構造の違いをうけて、その地形も対照的である。西岸は、奥羽山脈から流れ出す支流によって形成された大小の扇状地がみられ、この扇状地を刻む形で段丘もよく発達している。東岸では、北上山地に続く丘陵部縁辺に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。なお、流域は盛岡以北を上流、盛岡～前沢間を中流、前沢以南を下流の3区域に区分される。

川口Ⅰ・Ⅱ遺跡の所在する岩手町川口は、北上川上流域に含まれる。この区域では、北上川は川幅が狭く、西岸の小さな沢を合流しながら北上山地の西縁を曲流する。この後、玉山村好摩付近で八幡平から流下する赤川・松川を合せ、その水量・川幅とも増して盛岡へ下る。これらの川の流域では数段の段丘が形成され、2つの遺跡はこの段丘の縁辺部に立地している。遺跡の西方は、火山地帯特有の地形を呈する。北上川西岸には低起伏の丘陵や山地が広がり、丘陵から突出する形で、送仙山(472.4m)白屋山(428.2m)、円谷山(397.3m)などの孤立山体がみられる。また、南西には、「岩鷲山」・「南部富士」とも呼ばれる岩手県最高峰岩手山(2040.5m)が大きくそびえている。東岸では、北上山地に続く標高300～500mの山が迫っている。南西には、雄大で男性的な岩手山に対し、その形状から女性に例えられる姫神山(1,123.8m)が優美なシルエットを写しだしている。

当地域における第四系と地形の研究は盛んである。中川⁸(1963)は、北上川上流域に発達する段丘を泷民段丘(中位段丘)と盛岡段丘(低位段丘)に区分するとともに、火山噴出物を古期のものから大石渡火山角礫岩、泷民火山灰、分火山灰、一本木火山礫に大別した。この後、磯(1976)は泷民火山灰の再定義を行い、下位のものを外山火山灰とした。さらに大上・土井(1978)は、外山火山灰下位をこれと区別し一ノ渡火山灰とした。また、橋(1973・1978)は、赤川・松川沿岸の火山泥流と地形について調査し、赤川沿岸の松尾泥流と大更付近一帯の五百森泥流を明らかにした。大上・畑村・土井(1980)は、五百森泥流について再定義するとともに、この地域における段丘を上位より松内段丘、泷民段丘、好摩段丘、門前寺段丘の4段に細分した。井上(1982)は、従来岩手山の噴山物であると考えられていた分火山灰が、秋田駒ヶ岳起源のものであることをつきとめ、これの上位に載る一本木火山礫を2分した。また最近の研究では、岩手山麓や五百森泥流の¹⁴C年代を測定した土井・川上・大石(1983)の報告がある。

第3図は、周辺の地形分類図である¹⁰⁾。以下、これらについて若干の概説をする。

A面 緩傾斜地形を一括した。北上川左岸では、下位の段丘面に連続し、明瞭な境は認められない。岩手山東麓に広がるものは、厚い火山噴出物に覆われ台地状を呈している。大上⁸は、この面を松内段丘としている。

B面 西根町大更一帯に広がる泥流地形で、橋の五百森泥流にあたる。大更付近には、かな



第3图 遺跡周辺地形分類図

り多くの「流れ山」地形がみられる。なお、図示した部分は段丘地形の観点からはC面に相当するものと考えられる。

C面 中川Ⅲの盛岡段丘、大上Ⅲの好摩段丘にあたる。当地域で最も良く発達する段丘で、低位段丘に相当する¹⁰⁾。北上川をはじめ松川・赤川沿岸に広く分布しており、新鮮な面を残し開析は進んでいない。浜民部落、好摩部落、川口部落などを載せ、現在では水田や畑地、果樹園として利用されている。川口I遺跡は当段丘面に立地している。分火山灰および一本木火山礫を載せる。遺跡での観察によれば、表土下4m前後で10cm内外の円礫や砂から成る段丘構成礫層が確認された。下位の段丘面との比高は4～5mである。

D面 沖積段丘の古期面である。当面における旧河道、自然堤防なども一括した。後の氾濫によって島状に取り残されている部分もみられる。川口II遺跡は当段丘面に立地している。一本木火山礫を載せるが、遺跡内ではその堆積は認められず、流失したものと考えられる。シルト層の下に小礫と砂による構成礫層が観察された。現在では、その大部分が水田として利用されている。

E面 沖積新期面である。小規模な段丘や氾濫原、旧河道や自然堤防、沢による開析地を一括した。

〈註記〉

- (1) 地形分類図の作成にあたっては、2万5千分の1の地形図の検討と空中写真の判読を主体とし、若干の現地調査も行った。なお、不明な部分については、岩手県発行の土地分類図によった。
- (2) 当地域における中位段丘(浜民段丘、中川Ⅲ 1963)は、図示した区域内では認められない。

〈引用・参考文献〉

- (1) 中川久夫・石田琢二・佐藤二郎・松山 力・七崎 修(1963):「北上川上流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻、第811号。
- (2) ——— (1981):「第四系、北上川流域地質図説明書」長谷地質調査研究所。
- (3) 徳永 徹(1974):「地形分類」『北上山系開発地域土地分類基本調査(沼宮内)』岩手県。
- (4) 磯 望(1974):「岩手山東麓の火山灰層」『日本地理学会予稿集No11』
- (5) 大上和良・土井直夫(1978):「北部北上低地帯の鮮新-更新両統の層序について」『岩手大学工学部研究報告』第31巻。
- (6) ——— 畑村政行・土井直夫(1980):「北部北上低地帯の鮮新-更新両統の層序について(その2)」『岩手大学工学部研究報告』第33集。
- (7) 橋 行一(1973):「東八幡平・柏台東部の丘陵地の火山泥流」『岩手大学教育学部研究年報』第30集。
- (8) ——— (1978):「『岩手森』・『五百森』の多くの流れ山を生じた岩手火山の縄文期の噴火活動について」『岩手大学教育学部研究年報』第38集。

- (9) 高橋信雄(1980):「地形・地質、松尾村長者屋敷遺跡(1)」「岩手県埋文センター文化財調査報告書」第12集。
- 00 土井宜夫、川上雄司・大石雅之(1983):「岩手山麓、柳沢浮石・五百森泥流の¹⁴C年代-岩手火山噴出物とそれに関連する堆積物の¹⁴C年代(その1)」「岩手県立博物館研究報告」第1号。
- 01 井上克弘(1982):「東北地方北部の火山灰」「考古風土記」第7号。

3. 歴史的環境 (第4図)

岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳に記載されている。岩手町内の遺跡数は170遺跡であり、その状況は第1表に示した。さらに、第1表をもとにして時代別・性格別に分類して集計したのが第2表であるし、縄文時代の遺跡については時期別に分けて第3表に記した。なお第2表・第3表の総遺跡数が第1表の集計数より多いのは、1時代1遺跡・1時期1遺跡として集計したことによる。この方法で分類した延遺跡数は210遺跡となり、その差40遺跡は時代や時期の重複する所謂重複遺跡ということができる。重複の状況を見ると、縄文時代で時期がまたがっている例が最も多く、次いで、縄文時代と弥生時代の重複する例が多い。

それでは、次に時代や性格ごとにその状況を記することにする。

第2表でみると、全体の87.62%に相当する184遺跡が集落遺跡や遺物散布地で、その中には縄文時代147遺跡(70%)、弥生時代16遺跡(7.62%)、古代20遺跡(9.58%)が含まれている。それ以外の遺跡では古墳・寺院跡・祭祀遺跡が各1遺跡(各0.48%)あり、これらはいずれも時代的には古代に属する。中世の城館跡は9遺跡で、全体の4.28%に相当する。さらに時代や性格の明らかにされていない遺跡が14遺跡の6.66%ある。以上が台帳に記載されている遺跡の構成であるが、次に、各時代や性格別に、調査例をも含めてもう少し詳しくみることにする。縄文時代に属する遺跡は147であるが、これは早期3・前期10・中期14・後期32・晩期37に細分され、時期が新しくなるに従って遺跡数が増えることを示している(第3表を参照)。この状況は二戸市のそれと同じで、m、一般に中期の遺跡が多いと言われることは異なる。しかし、全遺跡が台帳に記載されているとは限らないので一概に断定することはできない。また、遺跡立地の問題について、北上川上流地域では標高300m以上が縄文文化生活圏であるとの試論を高橋昭治氏が呈示しており、m、大規模な遺跡の立地はこの説に沿う様相を示していることは注目すべきであろう。早期は3遺跡と少ないが、白浜式や寺の沢式に近似した土器が出土している。前期は10遺跡であるが、苗代沢遺跡や尾呂部遺跡からは初頭の丸底や尖底の土器、丹藤遺跡と細沢遺跡からは大木系の土器が出土しているが、円筒式土器系のものは出土していないらしい。中期としては14遺跡知られるが、そのほとんどからは大木8式が出土し、黒内開拓遺跡からは

第1表 岩手町内の遺跡一覧表

(昭和59年1月31日現在の早稲文化学講座資料編による)

整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考	
1	JE-77-1066	式部	跡	布	地	大子一古墳	
2	JE-87-0384	式部	跡	布	地	大子一古墳	
3	JE-87-2297	式部	跡	布	地	大子一古墳	
4	JE-87-2297	式部	跡	布	地	大子一古墳	
5	JE-88-0097	式部	跡	布	地	大子一古墳	
6	JE-88-2092	式部	跡	布	地	大子一古墳	
7	JE-96-1323	式部	跡	布	地	大子一古墳	
8	JE-96-2130	式部	跡	布	地	大子一古墳	
9	JE-96-2259	式部	跡	布	地	大子一古墳	
10	JE-96-2365	式部	跡	布	地	大子一古墳	
11	JE-96-2361	式部	跡	布	地	大子一古墳	
12	JE-96-2391	式部	跡	布	地	大子一古墳	
13	JE-97-0052	式部	跡	布	地	大子一古墳	
14	JE-97-0129	式部	跡	布	地	大子一古墳	
15	JE-97-0191	式部	跡	布	地	大子一古墳	
16	JE-97-0272	式部	跡	布	地	大子一古墳	
17	JE-97-1149	式部	跡	布	地	大子一古墳	
18	JE-97-1193	式部	跡	布	地	大子一古墳	
19	JE-97-1311	式部	跡	布	地	大子一古墳	
20	JE-97-2191	式部	跡	布	地	大子一古墳	
21	JE-97-2374	式部	跡	布	地	大子一古墳	
22	JE-98-1363	式部	跡	布	地	大子一古墳	
23	JE-98-2231	式部	跡	布	地	大子一古墳	
24	JE-98-2381	式部	跡	布	地	大子一古墳	
25	JE-98-2382	式部	跡	布	地	大子一古墳	
26	JE-99-2183	式部	跡	布	地	大子一古墳	
27	KE-06-0197	式部	跡	布	地	大子一古墳	
28	KE-06-0308	式部	跡	布	地	大子一古墳	
29	KE-06-0214	式部	跡	布	地	大子一古墳	
30	KE-06-0215	式部	跡	布	地	大子一古墳	
31	KE-06-0217	式部	跡	布	地	大子一古墳	
32	KE-06-0219	式部	跡	布	地	大子一古墳	
33	KE-06-0222	式部	跡	布	地	大子一古墳	
34	KE-06-0245	式部	跡	布	地	大子一古墳	
35	KE-06-0262	式部	跡	布	地	大子一古墳	
36	KE-06-0301	式部	跡	布	地	大子一古墳	
37	KE-06-0311	式部	跡	布	地	大子一古墳	
38	KE-06-0320	式部	跡	布	地	大子一古墳	
39	KE-06-0349	式部	跡	布	地	大子一古墳	
40	KE-06-0362	式部	跡	布	地	大子一古墳	
41	KE-06-0368	式部	跡	布	地	大子一古墳	
42	KE-06-0371	式部	跡	布	地	大子一古墳	
43	KE-06-0398	式部	跡	布	地	大子一古墳	
44	KE-06-1118	式部	跡	布	地	大子一古墳	
45	KE-06-1204	式部	跡	布	地	大子一古墳	
46	KE-06-1238	式部	跡	布	地	大子一古墳	
47	KE-06-1266	式部	跡	布	地	大子一古墳	
48	KE-06-1289	式部	跡	布	地	大子一古墳	
49	KE-06-1307	式部	跡	布	地	大子一古墳	
50	KE-06-1315	式部	跡	布	地	大子一古墳	
51	KE-06-1316	式部	跡	布	地	大子一古墳	
52	KE-06-1329	式部	跡	布	地	大子一古墳	
53	KE-06-1342	式部	跡	布	地	大子一古墳	
54	KE-06-1344	式部	跡	布	地	大子一古墳	
55	KE-06-1347	式部	跡	布	地	大子一古墳	
56	KE-06-2215	式部	跡	布	地	大子一古墳	
57	KE-06-2258	式部	跡	布	地	大子一古墳	
58	KE-06-2332	式部	跡	布	地	大子一古墳	
59	KE-06-2361	式部	跡	布	地	大子一古墳	
60	KE-07-0000	式部	跡	布	地	大子一古墳	
61	KE-07-0034	式部	跡	布	地	大子一古墳	
62	KE-07-0037	式部	跡	布	地	大子一古墳	
63	KE-07-0080	式部	跡	布	地	大子一古墳	
64	KE-07-0088	式部	跡	布	地	大子一古墳	
65	KE-07-0111	式部	跡	布	地	大子一古墳	
66	KE-07-0183	式部	跡	布	地	大子一古墳	
67	KE-07-0308	式部	跡	布	地	大子一古墳	
68	KE-07-1001	式部	跡	布	地	大子一古墳	
69	KE-07-1002	式部	跡	布	地	大子一古墳	
70	KE-07-1010	式部	跡	布	地	大子一古墳	
71	KE-07-1018	式部	跡	布	地	大子一古墳	
72	KE-07-1023	式部	跡	布	地	大子一古墳	
73	KE-07-1044	式部	跡	布	地	大子一古墳	
74	KE-07-1055	式部	跡	布	地	大子一古墳	
75	KE-07-1065	式部	跡	布	地	大子一古墳	
76	KE-07-1076	式部	跡	布	地	大子一古墳	
77	KE-07-1079	式部	跡	布	地	大子一古墳	
78	KE-07-1088	式部	跡	布	地	大子一古墳	
79	KE-07-1095	式部	跡	布	地	大子一古墳	
80	KE-07-1146	式部	跡	布	地	大子一古墳	
81	KE-07-1193	式部	跡	布	地	大子一古墳	
82	KE-07-2044	式部	跡	布	地	大子一古墳	
83	KE-07-2109	式部	跡	布	地	大子一古墳	
84	KE-07-2113	式部	跡	布	地	大子一古墳	
85	KE-07-2165	式部	跡	布	地	大子一古墳	



第4図 岩手町の遺跡位置図

整理番号	通称登録番号	通称名	種別	所在地	通称・遺物	備考
86	KE-07-2227	大	IV	右	大学一方第16校第2大森(現金型)	織文土器
87	KE-07-2368	川	教	地	大学方第第4地第1寺河原	織文土器、土師器
88	KE-07-0275	風	教	地	大学五方第10地第1	織文土器
89	KE-08-1184	五	教	地	大学五方第5日市	織文土器
90	KE-08-1192	土	教	地	大学五方第2地第1寺小幡	織文土器
91	KE-08-2053	河	教	地	大学五方第4地第1寺小幡	織文土器、土師器、鏡片
92	KE-08-2112	上	教	地	大学五方第7地第1寺上	織文土器
93	KE-08-2141	京	教	地	大学五方第9地第1寺手	織文土器
94	KE-08-2155	大	教	地	大学五方第7地第1寺大深	織文土器
95	KE-08-2272	宮	教	地	大学五方第10地第1寺中	織文土器、土師器、石器
96	KE-08-2293	山	教	地	大学五方第10地第1寺中	織文土器
97	KE-09-0158	上	教	地	大学五方第10地第1寺中	土器、織文土器、陶器
98	KE-16-0319	中	教	地	大学一方第10地第1寺(竹記)	土器
99	KE-16-0322	同	教	地	大学一方第10地第1寺本	土師器
100	KE-16-0362	同	教	地	大学一方第10地第1寺本	土師器
101	KE-16-2267	同	教	地	大学一方第10地第1寺本	土師器
102	KE-17-0026	輪	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器、遺物
103	KE-17-0029	方	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器、遺物
104	KE-17-0031	打	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器、遺物
105	KE-17-0047	向	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
106	KE-17-0100	ア	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
107	KE-17-0175	ギ	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
108	KE-17-1010	ク	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
109	KE-17-1010	明	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
110	KE-17-1148	大	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
111	KE-17-1248	大	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
112	KE-17-2018	鴨	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
113	KE-17-2214	久	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
114	KE-17-2363	の	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
115	KE-18-0152	石	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
116	KE-18-0170	神	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
117	KE-18-0185	石	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
118	KE-18-0202	宮	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
119	KE-18-0206	大	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
120	KE-18-0320	大	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
121	KE-18-0332	大	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
122	KE-18-0346	大	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
123	KE-18-1009	石	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
124	KE-18-1045	江	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、古式土器
125	KE-18-1126	江	教	地	大学一方第10地第1寺	古式土器、織文土器、織文土器、土器、古式土器
126	KE-18-1147	江	教	地	大学一方第10地第1寺	古式土器
127	KE-18-1159	江	教	地	大学一方第10地第1寺	古式土器
128	KE-18-2019	江	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、後期土器
129	KE-18-2059	江	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
130	KE-18-2122	江	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
131	KE-18-2144	江	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
132	KE-18-2164	江	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器
133	KE-26-0372	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	古式土器、土師器、古式土器
134	KE-27-0018	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
135	KE-27-0049	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器(早期、古式土器)
136	KE-27-0185	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、古式土器
137	KE-27-1111	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
138	KE-27-1152	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器
139	KE-27-2321	浮	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器
140	KE-28-0073	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
141	KE-28-0082	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
142	KE-28-0250	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、石器、石器、石片、フレー
143	KE-28-1009	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土師器
144	KE-28-1120	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
145	KE-28-1123	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
146	KE-28-1125	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
147	KE-28-1136	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
148	KE-28-1168	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
149	KE-28-1250	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、古式土器
150	KE-28-2009	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、古式土器
151	KE-29-1234	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、古式土器
152	KE-27-1317	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
153	KE-27-1337	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、土師器、フレー
154	KE-27-1346	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器
155	KE-27-0837	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、石器、土師器
156	KE-28-0039	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
157	KE-28-0112	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
158	KE-28-0126	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、古式土器
159	KE-28-0131	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文(土)土器、土師器、古式土器
160	KE-28-1041	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器
161	KE-29-1105	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、石器
162	KE-29-2218	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、石器
163	KF-29-1116	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
164	KF-21-2168	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
165	KF-30-1201	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
166	KF-30-2011	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器、土師器、石器
167	KF-30-2059	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、土師器、石器、石片、石片
168	KF-30-2099	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器
169	KF-40-1382	子	教	地	大学一方第10地第1寺	土器、織文土器、フレー
170	KF-41-2298	子	教	地	大学一方第10地第1寺	織文土器

★A
昭和27.7.19
昭和27.7.19

★B
昭和27.7.19
昭和27.7.19

★C
昭和27.7.19
昭和27.7.19

第2表 時代別・性別遺跡数

時代や性別 項目	集落・遺物散布地			古墳	寺院	祭祀	縄文	城館	不明	合計
	縄文	弥生	古代							
遺跡数	147	16	20	1	1	1	1	9	14	210
比率	70%	7.62%	9.58%	0.48%	0.48%	0.48%	0.48%	4.28%	6.66%	100%

第3表 縄文時代の時期別遺跡数とその構成比率

時期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	合計
遺跡数	3	10	14	32	37	51	147
比率	2.03%	6.8%	9.52%	21.76%	25.17%	34.69%	99.98%

円筒上層a式が出土している。後期と晩期は遺跡数も多いため、該期全体に属する土器が出土しているものの、両時期とも前葉に属する土器の出土が多いようである。遺跡数は後期32・晩期37と、時期の特定できる96遺跡の約70%を占めている。後・晩期の遺跡として豊岡遺跡やどじの沢遺跡が著名である。豊岡遺跡は昭和30年に草間俊一氏等によって発掘調査され⁽³⁾、その際に非常に多くの晩期の土器や石器と土偶等を出土し、この遺跡が晩期に属することを明らかにした。また、この遺跡は広い面積を有しているため、耕作時にも多くの遺物を出土し、それらが地元研究者の手によって収集され⁽⁴⁾、展示に供されている。どじの沢遺跡は昭和35年に同氏によって発掘調査されており⁽⁵⁾、検出された4棟の竪穴住居跡は大洞BC式土器を共伴する晩期に属する住居跡として県内での初例であるばかりでなく、竪穴住居跡の検出例としても貴重な資料となった。また、昭和58年には高梨遺跡が東北大学によって発掘調査されているが⁽⁶⁾、報告書が未刊のため詳細は不明であるものの、住居跡が検出されている。しかし、この遺跡は昭和31年に晩期の完形土器が8点出土するなど、後・晩期の土器や石器を出土することで著名である⁽⁷⁾。当町川口の秋浦地区には秋浦貝塚⁽⁸⁾と呼ばれる内陸性貝塚があり、中期や後期の土器とともに淡水産貝類の貝殻や獣骨の出土することが知られており、山間地の小河川沿いに立地する小貝塚の例として今後に示唆するものが大である。

弥生時代の土器が出土する遺跡は16ヶ所で、全体の7.62%に相当する。また、弥生時代に並行すると言われる北海道を中心とする後北式土器の出土例も1遺跡(0.48%)記載されている。

所謂北海道系土器の出土は、実際にはもっと多くの例が知られ、高橋昭治・武田良夫両氏の論文によれば⁽⁹⁾、岩手町内で6遺跡から出土しており、盛岡市を含む岩手郡内では18遺跡報告されている。両氏の論文では岩手県内の出土例として30遺跡を紹介しているが、その中の50%強は岩手郡内に在り、丹念に分布調査をすると今後も出土例が増加する傾向を示している。芦田内遺跡や乙茂内遺跡は、当時の良好な資料が出土したことで著名である。

古代の土師器や須恵器が出土した遺跡として20ヶ所9.52%知られているが、奈良時代であるか平安時代かは定かでない。しかし、高橋昭治氏⁽¹¹⁾⁽¹²⁾や草間俊一氏の報告によれば⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾、奈良時代の生産と目されるロクロ未使用成形の土師器を出土する遺跡や、ロクロ成形の土師器や須恵器を共伴する遺跡も存在することを記述しており、20遺跡には両時代が含まれていることは確実であろう。また、古代の遺跡として注目すべきは、埋没しきらない多くの堅穴住居跡が一方井地区を中心に存在することであろう。このことは、最初小田島祿郎氏によって注目され、その概要が大正13年に発表されている⁽¹⁰⁾。氏の論文によると、一方井地区の宮澤・葉木田・十二夜・輪台・今松・鴨沢・新田・浮島・土川、御堂地区の仙波堤・久保等10ヶ所に合計151の堅穴住居跡があるとされている。氏はそれらの中の何棟かずつを調査した結果、土師器や須恵器を出土し、中にはロクロ使用成形土師器を含むことを上げ、これらの住居跡が奈良時代や平安時代に属することを明らかにした。以上のような小田島氏の調査成果をもとにして、仙波堤・今松岡堅穴群は大正15年2月に仮指定史跡となり、さらに、昭和32年に県の史跡指定を受け現在に至っている。この遺跡はその後、昭和43年には草間俊一氏によって発掘調査を含む精細な調査が行われ、その結果が報告書として刊行されている⁽¹⁰⁾。このような一方井地区の堅穴住居跡群は、隣接する玉山村の釜崎や谷地田⁽¹⁷⁾、西根町谷助平等を含む大きな広がりをもって分布しており、これらがいずれも近接した時期の集落であることが明らかにされている。特に、次の古墳立地とも関連するであろうことが推定される。その他では澤口遺跡が、昭和33年に奈良時代の堅穴住居跡2棟が発掘調査され、その結果が翌34年に報告されている⁽¹⁸⁾。

古墳は浮島古墳のみが知られている。当地域では、他に玉山村の永井沢古墳⁽¹⁹⁾、西根町の谷助平古墳があり⁽²⁰⁾、これらは先の古代の堅穴住居跡群を囲むような位置関係を示し、集落跡を残した先人の墳墓と考えることができよう。この古墳に最初に注目したのは小田島祿郎氏である⁽²¹⁾。氏はその報告書の中で、大正12年7月に時の内務省史蹟名勝天然記念物調査会審査官であった柴田常恵氏が実地踏査したことや、同年9月にはその時京都大学の考古学教室に教務嘱託で勤務していた梅原末治氏が発掘調査したこと等を記している。柴田常恵氏の踏査記録は定かでないが、梅原末治氏はその時の状況を大正13年に『歴史と地理』誌上に発表している⁽²²⁾。小田島・梅原両氏の論文では個別番号に若干異同はあるが、本古墳群には14基の古墳が存在することを述べ、さらにその中の1基が既に盗掘されていたことや、両氏が一号墳とした墳丘を

発掘し、その状況を詳しく報告している。詳細は両氏の報告にゆずるとして、葬法が火葬であることや出土した刀子の様式から平安時代初頭に属する古墳であるとの結論に達している。その後、昭和32年に草間俊一氏が4基を発掘調査し、昭和34年に報告書を発刊している⁽²³⁾。それによると、氏は梅原氏とは異なる見解を示し、梅原氏の火葬と平安時代説を否定し、奈良時代の古墳であるとした。また、両説を詳細に検討した石川長喜氏は、火葬墓であったとの見解を呈示した⁽²⁴⁾。いずれにしても、本古墳群は北上川流域では最北に位置することは誰しも認めており、集落との関係からみても重要な遺跡と言えよう。

寺院跡と言われているのは一方井大森に在る「黄金堂遺跡」である。この遺跡についての詳細は不明であるが、同地の研究者田中定一氏によって礎石列の検出や鉄器の出土が発表されて後⁽²⁵⁾、古代寺院跡の存在が推定されていた。それが、昭和58年の発掘調査⁽²⁶⁾によって、平安時代の集落跡と寺跡と推定される掘立柱建物跡が検出されたことから、寺院跡としての可能性が益々強くなった。今後、この付近一帯の詳細な実地踏査を行なうことによってより確実となろう。祭祀遺跡とされているのは一方井大森どじの沢で発見された「小堂跡」である。この遺跡は草間俊一氏によって昭和35年に発掘調査され、緩傾斜地では縄文晩期の住居跡、小高い丘の頂上部で3間×3間の掘立柱建物跡を検出した。遺物としては須恵器破片、青銅鏡（瑞花双鸞八稜鏡）、小罌口が出土したことから、この建物跡は平安時代の小規模な堂社跡であろうとした⁽²⁷⁾。

中世城館跡は9ヶ所登載されているが、日本城郭大系には15ヶ所存在すると記載されている⁽²⁸⁾。この中には一方井刑部が住し南部信直が出生した城といわれる一方井城（輪台城ともいう）や沼宮内民部が城主といわれる沼宮内城、川口氏の川口城等が含まれている。当地の北上川沿いは、室町時代には紫波郡の河東を本拠とする川村氏の勢力範囲であったと推定され、沼宮内氏や川口氏は本姓が川村氏であると伝えている。また、一方井氏は安部氏の末葉という秋田安藤氏の一族とされている⁽²⁹⁾。しかし、発掘調査が行われていないので、詳細は不明である。

時代・時期・性格とも不明な遺跡が14ヶ所ある。これらは分布調査の際に何んらかの遺物を表採したことで、遺跡として登載されたと思うが、詳細は定かでない。

以上、当町内に所在し、台帳に登載されている170遺跡を時代別・性格別に分類し、それらの構成比率と著名な遺跡、そして発掘調査の状況について記したが、遺跡数もさることながら発掘調査された遺跡が多く存在することが判る。また、地元の研究者によって多くの遺物が表面採集され、それらが全て地元保存され、その状況が報告書として刊行されている。たとえば、本遺跡もかつて遺物が採集され、その様子が報告されている。それによると、遺跡名が「川口松原遺跡」で、縄文後・晩期、弥生時代の土器や古代の土師器等が表採されたとしている。

引用文献

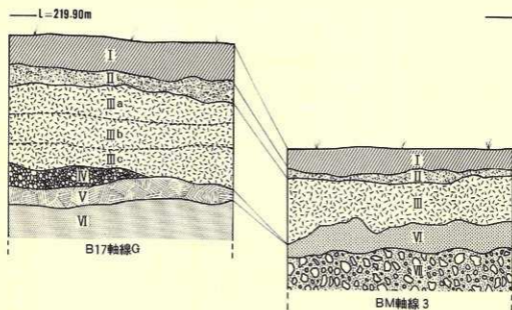
- (1) 高橋 与右エ門 『二戸市の遺跡』、『上里遺跡発掘調査報告書』岩塚報55集 08岩手県埋蔵文化財センター 昭和58年
- (2) 高橋 昭治 『北上川上流地域の考古学資料』北進考古学資料室 1975年
- (3) 草間 俊一 『岩手県岩手町豊岡遺跡』、『岩手大学文学部研究年報第17巻』岩手大学 1960年
- (4) 高橋 昭治 『豊岡遺跡』、『岩手町遺物出土表』高橋昭治 1965年
- (5) 草間 俊一 『岩手町大森どじの沢遺跡』、『岩手大学教育報告No.1』岩手大学 1966年
- (6) 春・秋の二度に亘って発掘調査され、筆者も現地を見学した。
- (7) 前掲(4)と同じ
- (8) 〃
- (9) 高橋 昭治 夫 『岩手県における後北式文化』、『北奥古代文化』北奥古代文化研究会 昭和57年
- 00 前掲(4)と同じ
- 01 高橋 昭治 『5瀬田などによる岩手町及び西根町出土の土師器』、『北上川上流地域の考古学資料』北進考古学資料室 1975年
- 02 高橋 昭治 『(3)北上川上流地域に於ける須恵器の文化』、『北上川上流地域の考古学資料』北進考古学資料室 1970年
- 03 草間 俊一 『仙波堤・今松遺跡』岩手町教育委員会
- 04 草間 俊一 『浮島古墳・沢口遺跡』岩手町教育委員会、岩手町郷土史研究会 昭和34年
- 05 小田島 祿郎 『墓下に於ける墓穴及び「チャシ」に関するもの其一』、『史蹟名勝天然記念物調査報告4』岩手県 大正13年
- 06 前掲00と同じ
- 07 草間 俊一 『谷地田遺跡』、『日本考古学年報26』日本考古学協会 昭和50年
- 08 前掲00と同じ
- 09 草間 俊一 『永井沢古墳』、『日本考古学年報26』日本考古学協会 昭和50年
- 10 草間 俊一 『岩手県西根村谷助平古墳』、『岩手大学文学部研究年報第18巻』岩手大学 昭和36年
- 11 小田島 祿郎 『県北における古墳の2・3』、『史蹟名勝天然記念物調査報告6』岩手県 大正14年
- 12 梅原 末治 『陸中一方井村古墳群の調査』、『歴史と地理第13巻5号』史学地理同好会 大正13年
- 13 前掲00と同じ
- 14 石川 長喜 『発掘調査された墳墓について』、『紀要Ⅲ』08岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- 15 田中 定一 『大森の寺院跡と考えられる遺跡について』、『岩手県北郷土史研究会第1回大会発表要旨』昭和47年
- 16 『黄金堂遺跡』、『岩手県埋蔵文化財センター調査略報昭和58年度』08岩手県埋蔵文化財センター 昭和59年
- 17 草間 俊一 『岩手町一方井大森どじの沢小堂跡』、『岩手史学研究No.35』岩手史学会 昭和35年
- 18 本堂 寿一編 『岩手県分』、『日本城郭大系2』新人物往來社 昭和55年
- 19 草間 俊一 『第三章鎌倉・室町時代』、『岩手町史』岩手町史刊行会 昭和51年
- 00 地元の研究者高橋昭治氏によって、多くの遺跡から多数の遺物が採集され、それが展示公開とともに、遺跡や遺物の状況が報告書として発刊されており、その成果に負う所が大である。本稿の執筆でも氏の論文を参考にし、多くの遺物を見させていただいた。心から謝意を表する。
- なお、全体的なことについては『岩手町史』の中に詳記されており、併せて、参照されることを希望する。

IV 基本層序

(第5図、PL-4)

本遺跡付近は、かつては松林で約40年前に畑として開墾された所といわれ、調査時にも畑として利用されていた。調査によっても木根跡と推定される土層変化部分が30数ヶ所検出され、かつて松林であったことを裏づけている。表土は耕作土であるため攪乱を受けているが、それほど下位には達していなかった。また、本遺跡の土層は、本線分と飛び地分では差がある。具体的なことは後述するが、飛び地分のⅢ層は厚く細分可能なことと、同地分のⅣ層・Ⅴ層が本線分には堆積していないことである。以上の相違点を考慮して、遺跡全体を共通する土層名となるよう統一し、文章上で詳述することにしたい。基本層序として掲載した土層図は、Aが飛び地分の「B17軸線G」、Bは本線分の「BM軸線3」で作成した。

土層名は上位層からⅠ層・Ⅱ層とし、細分される場合はⅠ層・Ⅰ_a層としたことは既述のとおりであり、色調は新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修）に従った。



第5図 基本土層図

第Ⅰ層 黒色(7.5YR2/1)シルト、本線分・飛び地分とも観察され、若干砂礫を含む。耕作土であるため有機質(草根が主)の混入が多く、全体的にフカフカして軟弱であり、層厚は飛び地分が厚く約30cm、本線分が15cm~25cmである。遺物の包含は比較的多いが、細片が中心で復元されたものはない。時期的にみると、縄文時代後期中葉(第Ⅳ

群土器)が主体である。

第II層 黒色(7.5YR1.7/1)シルト、I層の起源となった土で、所謂黒ボク土である。遺跡全面を覆っているが、層厚は飛び地分10cm~20cm、本線分が5cm~15cmと差がある。若干の草根が混入するものの、鏝の混入は全くない。本層も比較的軟弱で、バサバサした粘性のない土である。遺物の包蔵も多いが、北端の段丘崖沿いに集中する傾向があり、中には復元や実測可能な個体もある。時期は縄文時代後期中葉が多く、前葉も含む。

第III層 本層は、飛び地分では60cm~70cmの層厚があり、色調によって3層に細分されるが、本線分のそれは20cm~55cmと薄く単層であり、全体で見ると、本線分の北や東に寄るほど薄くなり、西の丘陵裾部は厚い。細分に従って記述する。

- a 飛び地は黒色(7.5YR2/1)、本線は黒褐色(7.5YR2/2)と差があるが、層としては対応する土層であろう。土性はいずれもシルトであるが、本線分は砂質で軟かく、飛び地分は若干粘性があり、本線分よりは硬い。飛び地分で約25cmの層厚があり、草根の貫入がみられる。遺物は比較的多く包含されるが、土器の所属時期をみると、本線分では上層部から縄文時代後期中葉と若干の前葉、中位層は同前葉で、飛び地分は全て同中葉の土器である。
- b 黒色(7.5YR2/1)であるがa層より若干黒味が強く、やや粘性があつて締りのあるシルトであり、飛び地分だけで観察される。上面に西側丘陵地の基盤である灰白色の凝灰岩塊が混入し、層厚は約25cmである。縄文時代後期中葉の遺物が若干含まれる。
- c 黒色(7.5YR2/1)でa層とほとんど同様であるが、本層の方が粘性が強く、締りはb層よりもある。土性はシルトである。層厚は約20cmで、凝灰岩塊を若干混入するが、他の河川礫や遺物は含まれていない。

第IV層 極暗褐色(7.5YR2/3)砂礫混じりの粘土質シルト、飛び地分のみで観察される土層で、良く締っている。遺物は包含しない。層厚は20cmである。

第V層 黒褐色(7.5YR3/2)砂礫混じりの粘土質シルト、IV層と近似しているが若干黒味が強く、飛び地分でみられる。良く締っていて硬い。無遺物層で層厚は15cmである。

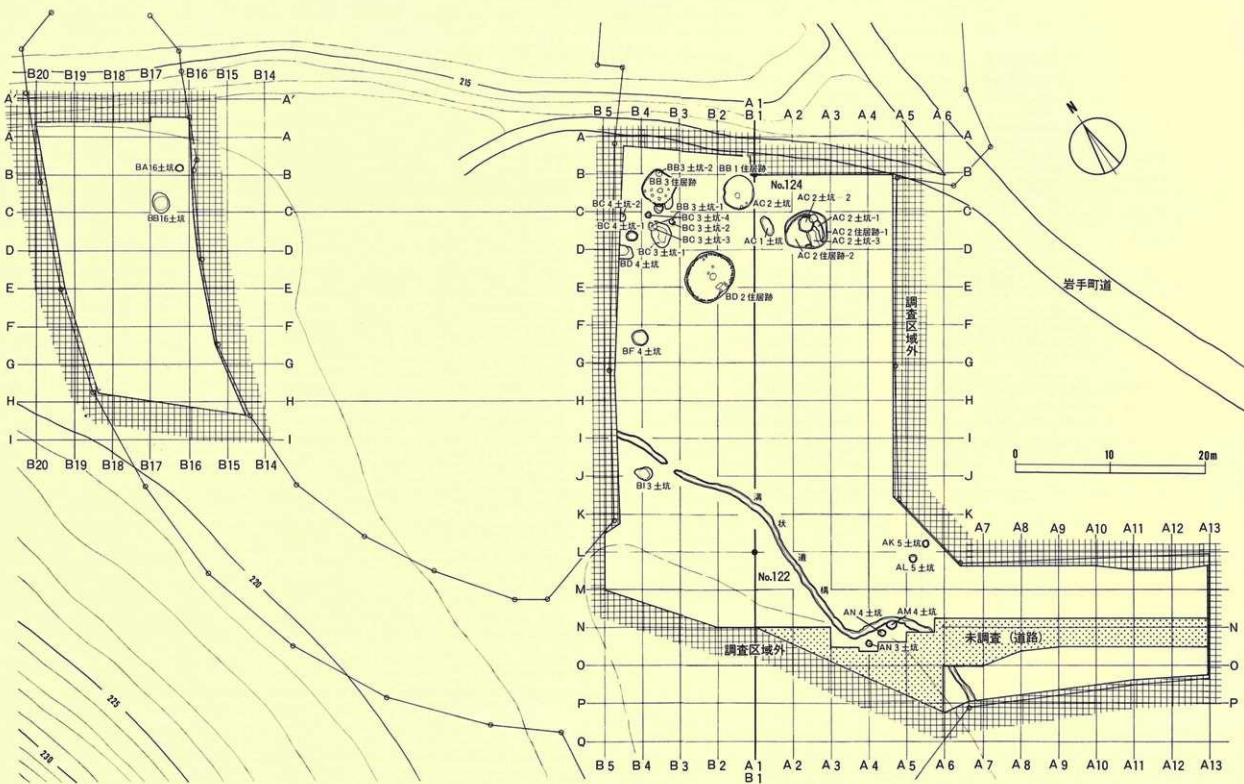
第VI層 褐色(7.5YR4/6)シルト混じりの砂層、金雲母や粗砂が混入し、全体的に軟かい。両地区とも共通する土層である。層厚は本線分が5cm~25cm、飛び地分が不明であり、本線分の上面には起伏がみられる。無遺物層である。

第VII層 暗褐色(7.5YR3/4)段丘礫層、両地域とも共通し、新鮮な河川礫の堆積層で、粒径は1cm~20cmと比較的小さく、粗砂を多量に混入している。非常に硬く締っている。無遺物層である。

以上、本遺跡地内に堆積する土を層位ごとにその概略を記述したが、遺構や遺物との関係は以下のとおりである。

本遺跡では第Ⅰ層から第Ⅲ層までの間の土層から遺物が出土している。時間的な関係を見ると、第Ⅱ層はほとんどが縄文時代後期中葉で若干の前葉を含み、この様相は第Ⅲ層上部も同じで、同層中位からは同前葉の遺物のみが出土している。住居跡の検出面をみると、同中葉に属するそれが第Ⅲ層上面で検出され、第Ⅱ層類似が堆積する2棟（AC2住・BD2住）と同層中位面で検出され同Ⅲ層上部層類似が堆積する2棟（BB1住・BB3住）の2型がある。共伴した遺物では両者間に時期差が認められないことから、時間的に近接した住居跡であろう。この状況は土坑でも観察される。

これらのことから、第Ⅱ層・第Ⅲ層上位の土層は縄文時代後期前葉～中葉に深い関係があると考えることができる。検出された土坑の埋土を観察すると、洪水による土砂の流入を推察できる状況を示す例が数例あり、同後期中葉かそれ以後に、北上川が氾濫し本遺跡が冠水した可能性を示している。なお、縄文時代中期や早期の土器も出土しているが、量は少なく、本遺跡の特徴を示すものとは考えられない。



第6図 川口Ⅱ遺跡グリッド・遺構配置図

V 検出された遺構と共伴遺物

(第6図)

本遺跡に対する発掘調査によって、以下のような遺構が検出されている。

1、住居跡——5棟 2、土坑類——22基 3、溝状遺構——1条

上記の遺構は主に縄文時代に属するが、土坑の一部や溝状遺構はそれよりも新しい時代に位置づけられる可能性を示している。ただし、本項では遺構の種類別に分けて記述することにする。なお、各遺構に共伴した遺物は、それぞれの遺構の中で説明を加え、併せて、遺構の所属時期について簡単に触れておく。

1. 住居跡

1) AC2住居跡-1

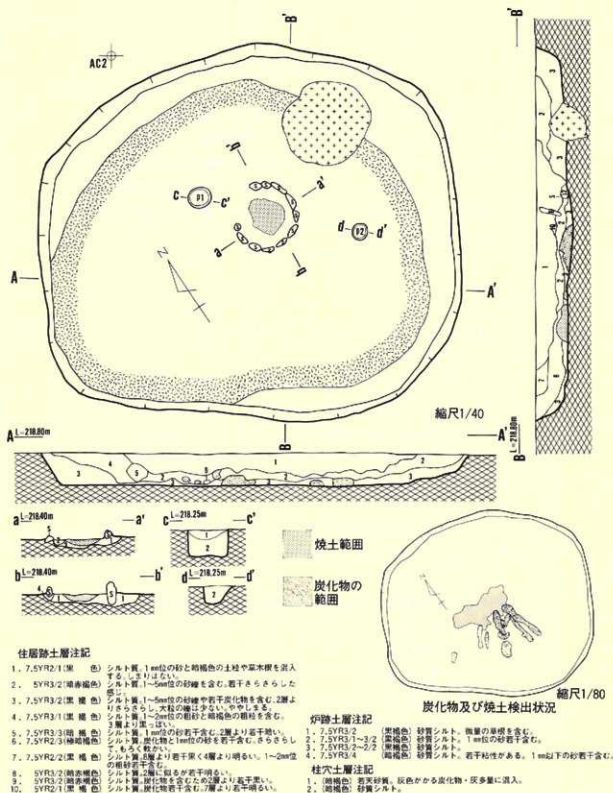
〔遺 構〕 (第7図、PL-5)

本住居跡はAC2グリッドを中心に、AC1グリッドに跨がって位置し、AC2住居跡-2やAC2土坑-1~3と重複している。重複遺構との新旧関係は、古い方から順にAC2土坑-3・AC2土坑-2・AC2住居跡-2・AC2住居跡-1・AC2土坑-1である。

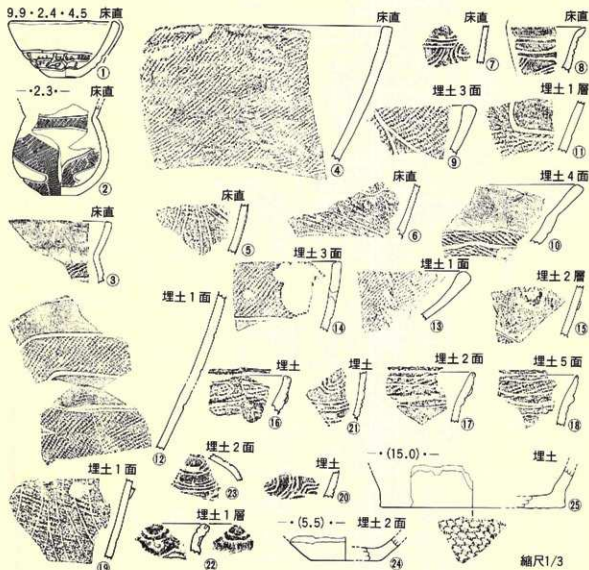
規模は長辺約4.5m・短辺約4.0mで、平面形は不整な隅丸長方形気味を示す。壁高は18cm~37cmの範囲で、西側が35cm前後と高く、東側のそれは20cm~25cmとやや低い。壁は東側がなだらかな立ち上がりをしているが、他は弯曲して立ち上がり、床面と120度位の角度で外傾している。床面は壁沿いが地山の明褐色砂質シルト、AC2住居跡-2との重複部分は暗褐色砂質シルトの貼床等で構築され、大きな起伏もなくほぼ水平に近い状態を示す。壁溝は検出されていない。

埋土は黒色・黒褐色・極暗褐色・暗褐色・暗赤褐色等を示すシルト質の土で構成され、10層に細分されているが、4層は団塊状に混入した間層である。細分は色調や土性・混入物等によったが、いずれも近以した様相を示すことから、基本的には1層・2層・3層・炭化材と焼土層の4層に大別される。埋土内や床面直上からは多量の炭化材と焼土が検出されている。炭化材は南北方向に長さ35cm~100cmのもの5列と団塊状のもの数ヶ所である。また、焼土は炭化材の北側に約130cm×60cmの不整長円形に広がっており、その下位床面からは炉跡が検出されている。堆積状況の観察では、自然堆積によって埋没したものと推定される。

床面上からはP₁(径20cm・深さ15cm)・P₂(径15cm・深さ10cm)の柱穴状小土坑が検出されている。P₁が北西・P₂が南東に在り、炉跡を挟んで1.75cmの距離で対峙している。埋土は暗

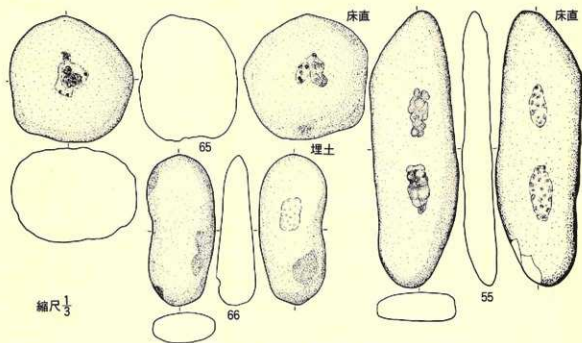
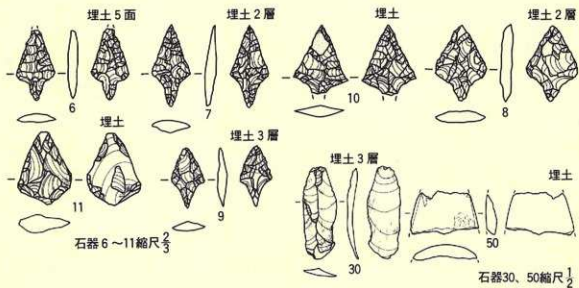


第7図 AC2住居跡-1(遺構)



第8図 AC2住居跡(遺物-1)

褐色を示す砂質シルトで、混入物によって2層に細分されている。このような土坑が他に検出されないことや位置から考えて、本住居跡に伴う柱穴と推定される。炉跡は床面ほぼ中央に位置する。構造は11個の石を北西部が開く径約70cmの「C」字形に配列した石囲い炉である。石の大きさは、最小が長さ8cm×幅6cm、最大が長さ20cm×幅5cmで、量的には長さ13cm～18cmのものが最も多い。これらの石は、深さは不定であるが、下端を床に埋め込み、上面の高さを揃えている。燃烧部の焼土は40cm×30cmの分布範囲をもち、層厚は最大7cmである。焼土の下層はシルト質の黒褐色や暗褐色の土で、4層に細分されるが、この土は炉を構築する際に必要範囲の床面を掘り窪め、埋め戻しながら構築したためのものと理解される。



第9図 AC 2 住居跡 (遺物-2)

〔遺物〕

土器23点と石器11点を掲載している。床面直上からは土器8点、石器2点が出土したのみで、他は埋土内からの出土である。

土器 (第8図①~⑮、PL-18)

①～⑧が床面出土であるが、施文技法によって①～③・⑤～⑧・④に大別される。①～③は沈線区画と磨消縄文を特徴とし、この様相は埋土内出土の⑨～⑫も同様である。しかし、区画帯には何種類かの型がありそうである(例①と②と⑫の違い)。なお、①の場合は体部に横走する並行沈線と縦に蛇行する沈線を付し、口縁部を無文帯としている。口縁部を無文帯とするものは他に②・③・⑩がある。器種は小型鉢・小型壺・浅鉢・深鉢等がある。⑤～⑧は2条か3条の並行沈線を付す土器であるが、⑤・⑥には地文が付され、⑦・⑧は無文である。この様相は埋土内出土の土器も同じで、⑮～⑲は前者に、そして⑳～㉓は後者に該当する。また、⑮と⑲には粘土紐貼り付けによる隆起帯が付されている。器種には深鉢・鉢・壺がありそうである。④は縄文のみが付された粗製土器で、この一点のみである。㉔・㉕は底部破片であるが、㉕の底面にはA型*の網代痕がある。(※まとめ参照)

以上の特徴から、①は第IV群2類、②・③・⑨～⑭は第IV群3類、⑤・⑥・⑮～⑲は第III群4類、⑦・⑧・㉑～㉓は第III群10類に相当するであろう。

石器 (第9図、PL-18)

石鏃6点、磨製石斧1点、縦長刮片1点、凹み石1点、磨り石2点の11点が出土している。石鏃(6～11)には有茎型5点と無茎凸基型1点があり、6は先端部、10は基部を欠損している。11は成形・調整ともに他より粗雑であり、剥離も表面が主体で裏面へは少ない。6～10は側縁が両面に入念な剥離が行なわれており、ほぼ左右対称となる形に仕上げられている。大きさには大小がある。30は側縁に使用痕をもつ縦長刮片であるが、特に加工は施されていない。50は磨製石斧の欠損した小破片である。55は平面縦長で断面扁平な石の両面に凹みをもつ凹み石である。65・66は磨り石であるが、凹み石としても使用している。磨り面は僅かにその痕跡を残している。

以上の中で床面直上から出土したのは55・65の2点のみで、他はいずれも埋土内から出土している。

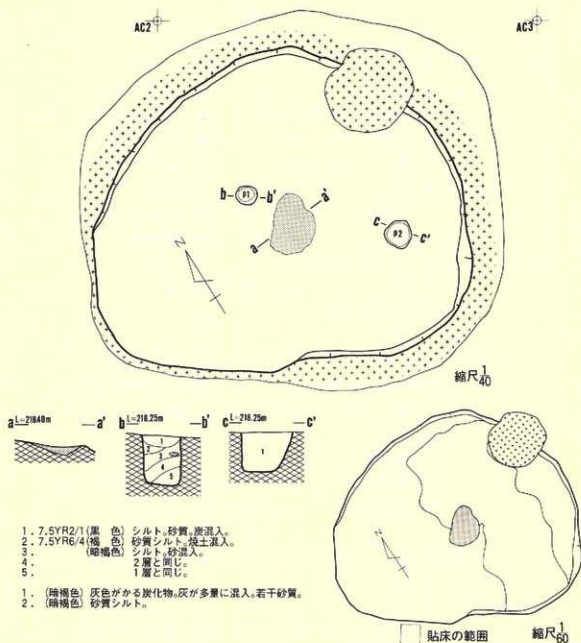
【遺構の時期】

床面直上から出土した土器には、第III群と第IV群に該当するものが混在するが、完形で出土した①・②の存在から第IV群土器が使用された時期の住居跡であろう。このことから、縄文時代後期中葉に位置づけられるものと推定される。

2) AC2住居跡-2

【遺構】 (第10図、PL-5)

本住居跡はAC2住居跡-1と全体が重複して検出され、それより一回り小規模である。重複遺構との新旧関係は既述のとおりである。



第10図 AC2住居跡-2 (遺構)

この住居跡は、埋土からは上位のAC2住居跡-1と明確な区別はできなかったが、西側を除く床面に7~8cmの高低差があることや、石囲い炉の下部から位置を異にする新たな炉跡が検出されたことから、別の住居跡と断定した。この2棟は、平面形や柱穴配置が非常に良く類似していることから推定すると、大きな時間的な隔たりがないと理解するのが妥当であろう。

規模は南東—北西約4.0m×北東—南西約3.5mで、平面形は西壁に一部掘りすぎがあるので定かでないが、やや歪んだ楕円形と推定される。壁は既述した部分を検出したのみであり、壁高も先に記したとおりである。東部の床面下にはAC2土坑-2・3があり、この両土坑を壊して本住居跡の床が構築され、暗褐色のシルトで貼床している。床面は比較的軟らかく、強い踏みしめは観察されない。壁溝は検出されていない。

埋土は前記の理由により定かでないが、AC2住居跡-1の床となった暗褐色砂質シルトがそれである可能性が高い。そうとすれば、本住居跡の埋土最下層は暗褐色砂質シルトであったと推定される。

床面からは北西にP₁(径40cm・深さ50cm)と南東にP₂(径55cm・深さ45cm)の柱穴状土坑が検出され、炉を挟んで約1.7mの距離で対峙している。埋土はP₁が黒色・暗褐色・褐色のシルトや砂質シルトで構成され、5層に細分されるが、2層と4層・3層と5層はほぼ同じ様相を示す。P₁とP₂は規模や位置関係から考えて本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

炉跡は配石や埋設土器等をもたない地床炉で、床面ほぼ中央に位置している。燃燒部の焼土は、AC2住居跡-1の石囲い炉が北東端で重複する在り方を示し、範囲は約64cm×約44cmで分布し、平面形は不整楕円形を示し、層厚は最大10cm弱である。構築する際の掘り込み地業はなく、床面を直接使用している。

〔遺物〕

本住居跡に直接共伴する状況で出土した遺物は既述の理由により全くない。強いて言えば、AC2住居跡-1で説明した第9図⑤～⑥が共伴する可能性があるものの、重複する土坑との関係もあり明示できない。したがって、ここでは出土していないとしておく。

〔遺構の時期〕

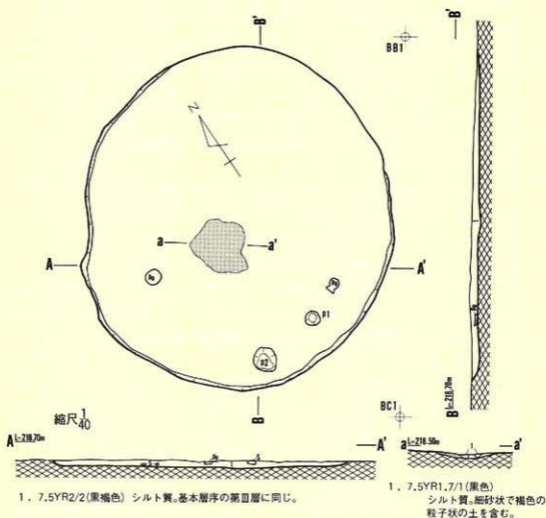
以上のことから明確な所属時期は不明である。しかし、先に記したAC2住居跡-1との重複関係や形状・柱穴の類似性等から考えると、AC2住居跡-1とは直接的な新旧関係を示すものと推定されることから、本住居跡もまた縄文時代後期中葉に位置づけられる可能性が高い。

3) BB1住居跡

〔遺構〕 (第11図、PL-6)

本住居跡はBB1グリッドに位置し、他遺構と重複することなく単独で検出された。検出面が先述したAC2住居跡-1のそれより10cm程下位である。

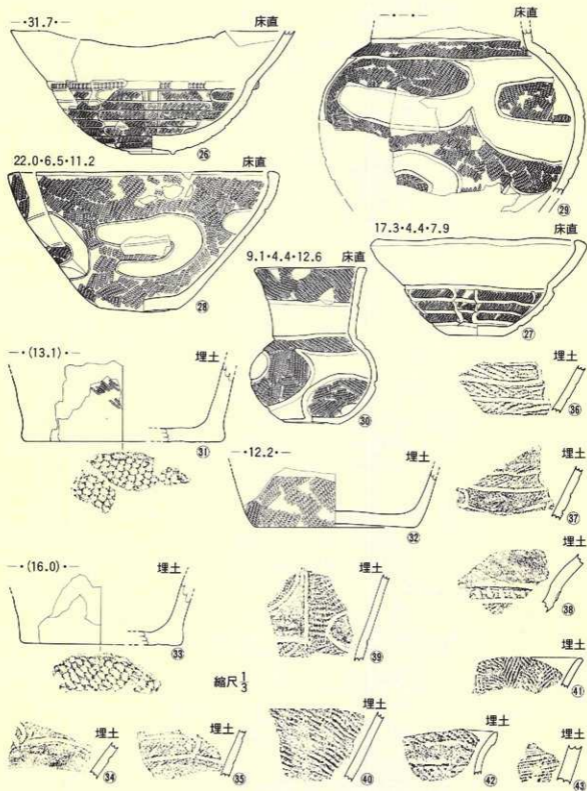
規模は長径約3.6m・短径約3.2mで、平面形は楕円形を示し、北東—南西方向に長軸をもつ。壁は北から東にかけての約1/4が検出されず、僅かな痕跡から復元した。これは、自然地形が北側の段丘崖に向かって緩やかに傾斜していることに起因する。検出された部分の壁高も3cm～7



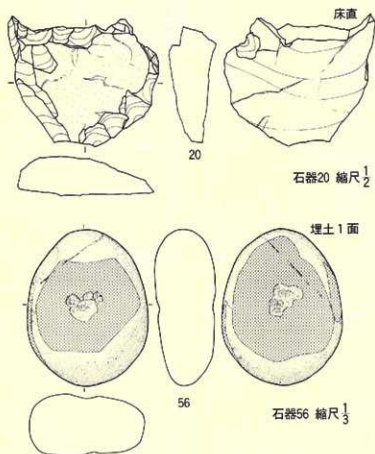
第11図 BB1住居跡(遺構)

cmの範囲で、AC2住居跡の床面の標高に比べて15cmも床面が高くもともと掘り込みの浅い住居跡であったことを示している。床は明褐色を示す地山の砂質シルトで構築され、貼り床はない。床面には大きな起伏もなくほぼ水平状態に近いが、あまり強い踏みしめはなく、やや軟らかい。壁溝は検出されていない。

埋土はシルト質の黒褐色土単層で、基本層序Ⅲ層の土性に酷似している。基本層序Ⅲ層の土性は既述のとおりであるが、本住居跡の部分は他の部分より黒色が濃く、暗褐色土中に黒褐色土の埋土が、南西部の周壁が円弧を描くような状態で検出された。層厚は10cm以下で、炉跡付近には炭化物が斑状に混入している。自然堆積によって埋没した状況を示している。



第12図 BB1住居跡(遺物-1)



第13図 BB1住居跡(遺物-2)

床面からはP₁(径約16cm・深さ約6cm)・P₂(径約25cm・深さ約15cm)の柱穴状小土坑が、約70cmの距離をおいて南壁に並ぶ状態で検出された。

この土坑は、位置関係からみると主柱穴を構成するとは考えられず、南壁沿いであることやP₁・P₂が対を成すらしいことから考えると、出入口施設に関連する柱穴状小土坑と考えるのが妥当であろう。主柱穴は検出されていない。床面中央やや南西寄りでは炉跡と思われる焼土が検出された。構造は石囲いや埋設土器をもたない地床炉である。燃焼部の焼土は南

北60cm・東西54cmの不整形円の範囲に分布し、層厚は4cm位と薄い。構築する際の掘り込み地業はなく、床面を直接使用している。

〔遺物〕

土器と石器が出土し、その中から土器18点と石器2点を掲載した。床面直上からは実測可能土器が出土している。

土器 (第12図②③~④, PL-19)

埋土の層厚が10cm位と薄いことは先述したが、床面直上から②③~④の5点が出土した。この5点の特徴は沈線区画と磨消縄文にあり、この様相は埋土内から出土した⑤⑥~⑦にも認めることができる。さらに詳しくみると、②③は体部に縄文を付した後、蛇行する並行沈線を入れ、体部と口縁部は縦位の刻目を付す隆起帯で限り、口縁部は無文帯とする。この文様は④~⑤と頸部の隆起帯に違いがあるものの⑦にもみられる。②③~④では沈線による区画の形に差が見られ

るが、基本的には共通する方法であり、この特徴は㉔についてもいえる。㉔は0段多条の原体LR縦回転による単節斜行縄文の付された粗製土器である。㉕・㉖は小型土器の口縁部破片で、㉖は頭部の縄文を磨消した波状縁を示し、㉕は外反する平縁である。体部の縄文は、原体RLR横回転による複節斜行縄文(㉗)と、0段多条によるRL縦横回転による羽状縄文(㉘)である。㉙～㉛は底部破片で、㉙・㉚にはA型の網代痕があり㉛は無文である。

以上の諸特徴から、㉔・㉕・㉖・㉗～㉘は第IV群1類、㉙～㉚・㉛は第IV群3類、㉔～㉖は第V群に該当する土器である。

石器 (第13図、PL-19)

床面直上から播器1点と埋土内から凹み石1点が出土している。播器(20)は表面に自然面を残す大型の一次剥片を使用し、打縮部を除去した後、周縁部を裏面から表面への剥離によって刃部を調整している。大きさは最長6.03cm幅7.55cm・厚み2.46cm・重さ125gあり、石材は玉髄を使用している。凹み石(56)は両面に凹をもつとともに磨り面をもつ。楕円形で扁平な石を使用したもので、大きさは全長12.52cm・幅9.67cm・厚み5.06cm・重さ905gである。石質は北上山地古生界産の硬砂岩である。

〔遺構の時期〕

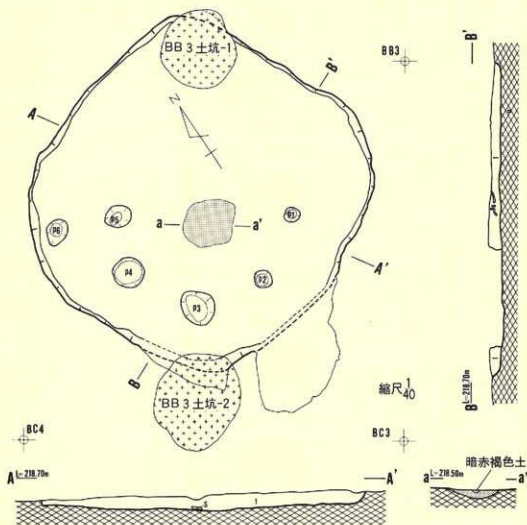
床面直上から出土した土器には第IV群1類と3類が混在するが、いずれも縄文時代後期中葉の特徴を表わしている。このことは、本住居跡が縄文時代後期中葉に位置づけられることを示している。

4) BB3住居跡〔遺構〕 (第14図、PL-7)

本住居跡はBB3グリッドを中心にして、BA3に若干跨がって位置し、BB1住居跡と同位面で検出された。南西壁でBB3土坑-1、北東壁でBB3土坑-2とそれぞれ重複しており、新旧関係は両土坑の方が新しい。

規模は四辺とも約3.2mで、平面形は若干重んだ隅丸方形である。壁高は1cm～10cmの範囲で、北東部が低い。これは地山面が北東部の段丘崖に向けて緩傾斜することに起因する。またBB1住居跡同様掘り込みが浅く、BD2住居跡の床面標高より本住居跡のそれが約10cm高いことは、このことを端的に表わしている。なお、南壁と西壁の一部が木根跡や耕作によって攪乱を受けており、明確にできなかった。床面には軽い凹凸がみられるものの、ほぼ平坦で水平状態に近い。床は明褐色を示す地山の砂質シルトで構築され、貼床はみられない。踏みしめによる強い締りはなく、比較的軟かい。壁溝は検出されていない。

埋土はシルト質の黒褐色土単層であるが、住居跡の中心部は黒味が強く、壁に寄るほど明色である。褐色土粒や砂粒が斑状に混入し、基本層序Ⅲ層の土性に酷似している。また、石の



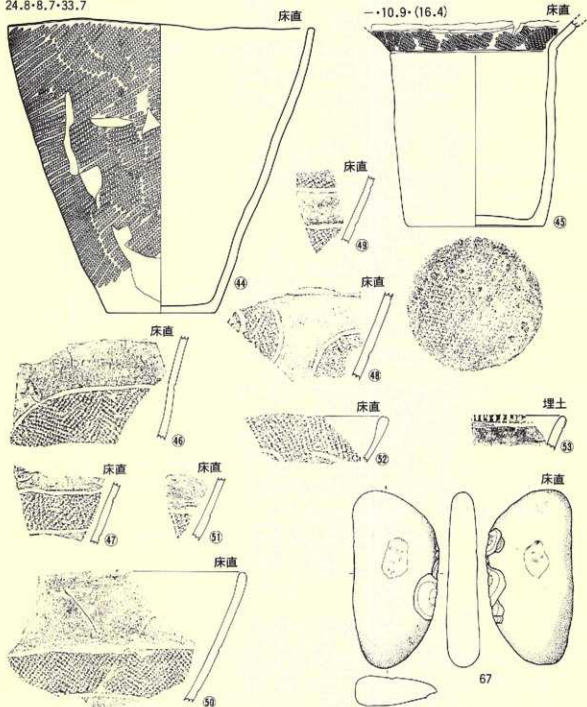
1. 7.5YR3/1 (黒褐色) シルト。若干粘性あり、微細な炭化物混入、砂礫・礫も混入するため、斑状を呈する。

第14図 BB3住居跡(遺構)

混入もみられ、その多くは床面に接している。自然堆積で埋没した住居跡と推定される。

床面からは、P₁ (径約15cm・深さ約10cm)、P₂ (径約20cm・深さ約9cm)、P₃ (径約37cm・深さ約18cm)、P₄ (径約35cm・深さ約10cm)、P₅ (径約30cm・深さ約10cm) の柱穴状小土坑が検出されている。これらの埋土は住居跡のそれとほとんど差はないが、若干明色となるものが多い。全体的にみると、平面規模は比較的揃っているが、いずれも浅いという特徴をもっている。位置関係では北側で検出されず、必ずしも配列関係を示しているとは考えられない。しかし、埋土の状況は最近の攪乱とする積極的な根拠は示しておらず、これらのP₁~P₅は本住居跡に関

24.8・8.7・33.7



縮尺 $\frac{1}{3}$

第15図 BB 3 住居跡 (遺物)

連する柱穴状土坑として大過ないであろう。もし、それが妥当ならば、P₁-P₃-P₅-北東部(未検出)という柱穴配置が想定される。炉跡は床面中央やや南西寄りで検出され、構造的には地床炉で石囲いとかが埋設土器はない。燃焼部の焼土は約50cm×55cmの範囲に分布し、隅丸方形気味の広がりを示している。厚厚は10cm位で、炉を構築する際の掘り込み地業はなく、床面をそのまま使用している。

〔遺物〕

土器と石器が出土しており、その中から土器10点と石器1点を掲載した。土器1点(㉔)と石器以外はいずれも床面直上からの出土である。

土器 (第15図㉔~㉙、PL-20)

㉔は体部に原体LR横回転による単節斜行縄文の付された粗製土器であり、床面から出土した。その他の土器㉕~㉙は沈線区画と磨消縄文をその特徴としている。埋土から出土した㉕は口縁端部に沈線で区画された刻目帯をもち、その下位は無文帯としている。体部の縄文は原体RL縦横回転による羽状縄文(㉕)とLR縦横回転による羽状縄文(㉖~㉗)や原体RL横回転による単節斜行縄文(㉘)がある。

以上の特徴から、㉕~㉙は第IV群3類に相当すると思われるが、羽状縄文を多用することは同群4類にも共通する。㉕は第IV群4類であろう。㉔は第V群に入る。

石器 (第15図、PL-20)

床上3cmとほぼ床面に等しい埋土内から磨り石(67)が1点出土している。磨り石としたが磨り面は両面に僅かに観察され、他に両面に凹みをもっている。大きさは全長14.17cm・幅6.85cm・厚み2.53cm・重さ397gで、石質は北上山地古生界産の凝灰質硬砂岩である。

〔遺構の時期〕

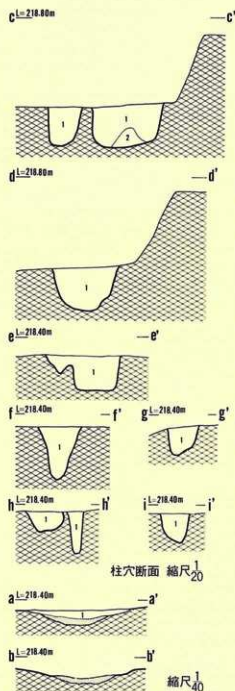
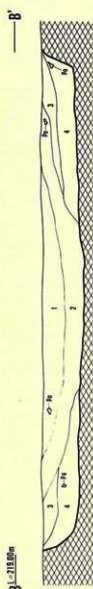
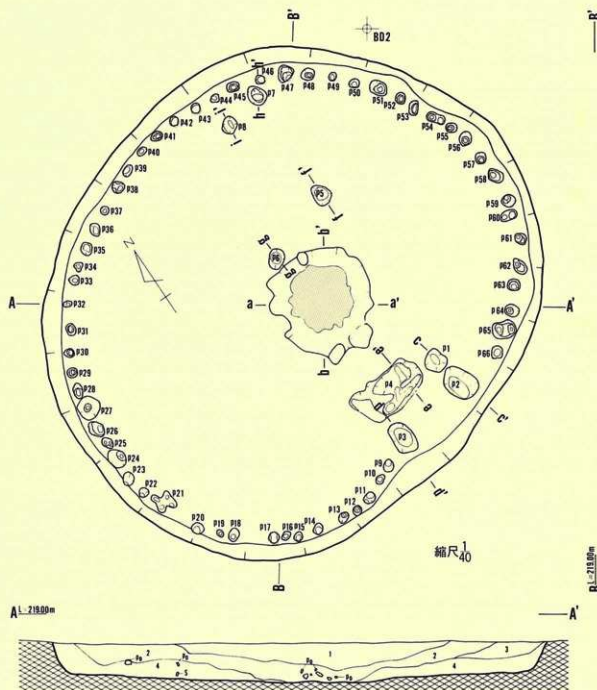
床面から出土した土器は全て第IV群3類か4類に相当し、縄文時代後期中葉の特徴を良く表わしている。このことは、本住居跡が縄文時代後期中葉に位置づけられることを示している。

5) BD2住居跡

〔遺構〕 (第16図、PL-8・9)

本住居跡はBD2グリッドを中心にBD1・BE1・BE2に跨って位置し、本遺跡内では最大規模の住居跡である。重複遺構はなく、単独で検出された。

規模は長径約5.6m・短径約4.8mで、平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形を示す。壁高は34cm~39cmの範囲にあるが、概ね35cmである。壁は床面に対して120度前後で外傾している。床面は中心に向かって軽く傾斜し、壁際と中心部の床面では約10cmの比高がある。床面には凹凸がほとんどなく、平坦である。床は明褐色を示す地山の砂質シルトで構築され、貼り床はみられ



1. 7.5YR2/1 (黒色) シルト質、相対的硬さ心、形状で粘土粘性もある。
 2. 7.5YR2/2-3/2 (黒褐色) シルト質、相対的硬さ心、形状で粘土粘性もある。
 3. 7.5YR3/3 (黒色) シルト質、相対的硬さ心、形状で粘土粘性もある。
 4. 7.5YR2/2 (黒褐色) シルト質、相対的硬さ心、形状で粘土粘性もある。
 5. 7.5YR2/1 (黒色) シルト質、相対的硬さ心、形状で粘土粘性もある。

第16図 BD2住居跡(遺構)

ない。床面は良く締って硬く、強い踏みしめを受けたことが窺われる。壁溝は検出されていない。

埋土は黒色・暗褐色・黒褐色を示すシルト質の土で構成され、色調や土性によって4層に細分されている。全体的に締りがなく軟かで、2・3・4層には黄褐色のシルトが斑状に混入しているし、1層には草木根の細片を含んでいる。どの層にも多少の砂粒が混入し、1・3層は他の層よりも混入量が多い。またP₄の北側床面からは炭化材が検出されるとともに、この付近の埋土内には多量の炭化物粒が混入していた。この状況は全体で観察されていないが、本住居跡が焼失した可能性を示唆している。以上の状況は自然堆積による埋没を示している。

床面からP₁~P₆₆の柱穴状小土坑が検出されているが、P₁~P₈とP₉~P₆₆では規模や位置に差があり、別々に記述することにする。P₁~P₈の規模は、P₁(径約23cm×20cm・深さ23cm)、P₂(径約40cm×30cm・深さ27cm)、P₃(径約35cm×23cm・深さ26cm)、P₄(径約75cm×45cm・深さ20cm)、P₅(径約25cm×20cm・深さ20cm)、P₆(径約22cm×20cm・深さ21cm)、P₇(径約25cm×20cm・深さ21cm)、P₈(径約20cm×15cm・深さ16cm)である。P₁~P₄は南壁沿いに位置し、壁沿いに開口部をもつ「コ」状に配置されている。P₅は炉跡の北東約1mに、P₆は炉跡の北側に接するように、そしてP₇・P₈は北壁中央東寄りの壁際に、それぞれ位置する。各土坑間の距離は、P₁~P₂が約40cm、P₂~P₃が約80cm、P₃~P₆が約230cm、P₂~P₅が約250cm、P₅~P₆が約130cm、P₆~P₈が約150cm、P₅~P₇が約120cm、P₇~P₈が約45cm、をそれぞれ測る。深さや形状から見ると、P₅~P₈は柱穴として矛盾はないが、位置が若干ずれており、所謂主柱穴とするには問題を残している。しかし、主柱穴と成り得る柱穴状小土坑が全く検出されていないことから、P₅~P₈は本住居跡の上屋に深い関わりをもつ柱穴状小土坑といえるだろう。P₁~P₈は壁際に在り、「コ」状の配置を示すことは既述のとおりである。また、P₂・P₃は長軸が南壁に直交する長楕円形を示し、P₁・P₂とP₃・P₄西端が相対することから、意図的な配列を看取することができる。おそらく、出入口施設に関連する柱穴状小土坑であろう。P₉~P₆₆は、P₂とP₃の間を除いて壁際に全周する杭穴状の小土坑である。平面形は円形・楕円形等一様ではないが、規模は径7cm~25cmまでみられ、その内訳は径10cm未満-14、径10cm~15cm-16、径16cm~20cm-18、径21cm以上-10である。深さもそれぞれによって異なるが、15cm~25cmの範囲である。これらの柱穴状小土坑は一般に壁柱穴と呼ばれるが、ほぼ垂直に掘られていることをみれば、壁体が壁の崩落防止施設に関連する性格を有するであろう。

炉跡は床面中央やや南東寄りに位置し、構造的には石囲いや埋設土器をもたない地床炉である。全体が径1.1mの円形に、約10cm掘り窪められているが、これは掘り込み地盤による結果ではなく、床面が低くなっているという表現が妥当であろう。燃焼部の焼土は径約70cmの範囲に分布し、不整形の広がりを見せており、層厚は約10cmである。なお、炉跡周辺部の北に1ヶ

所、南に2ヶ所の土坑状の浅い窪みがあるが、囲い石の抜き取り痕等ではない。

本住居跡で特記すべきことは、石器の素材とおもわれる剥片が床面から10個まとまって出土したことで、アスファルト状の固形物が埋土最下部から出土したことである。

〔遺物〕

土器・土製品・石器が出土しており、土製品と石器は全て掲載したが、土器は完形と口縁部破片・底部に限定し、破片は代表的なものに止めた。

土 器 (第17・18図⑤⑥～⑳、PL21・22)

床面から出土した土器は⑤⑥～⑳と比較的少なく、それ以外は全て埋土内からの出土であるが、⑳・㉑・㉒・㉓は検出面から30cm以上下位で出土した。床面出土の⑤⑥は沈線区画と磨消縄文を最大の特徴としており、この様相は埋土出土の㉔～㉖にも共通している。㉗～㉘は波状口縁で端部に刻目帯を付す土器であるが、波状には丸いものと三角形に尖るものがあり、刻目帯を頸部にもつものもある。㉙は沈線区画と磨消縄文をもち、さらに縄文施文部に沈線と並行する列点文を付す。㉚～㉛は縄文施文部に多条並行沈線を付す土器である。㉜・㉝は無文の器面に沈線のみによって文様を付す。㉞は口縁端部に口唇と並行する列点文を付し、無文の器面に沈線のみによって文様を付す。無文の器面に多条並行沈線による文様をもつ。㉟～㊱は縄文のみが付された粗製土器である。㊲は器面に文様をもたない無文土器である。㊳～㊴は体部下位～底部を残存する土器である。なお、⑤⑥・㉕・㉖の底面には網代痕、そして㉗には木葉痕をもつ。

以上の諸特徴から、㉔～㉖は第III群4類、㉜・㉝は第III群5類、㉞は第III群10類、⑤⑥～㉔は第IV群3類、㉕～㉖は第IV群5類、㉗は第IV群6類、㉘～㉙は第V群、㉚・㉛は第IV群に相当する。

石 器 (第20・21図、PL-22・23)

石鏃5点、石錐1点、削器1点、使用痕をもつ剥片1点、磨製石斧1点、凹み石3点の石器と、その他に剥片10点が出土している。石鏃(1～5)には有茎型(1～3・5)と無茎凸基型(4)があり、1・5は先端部を、2・3は茎部を欠失している。1～5ともに全体が左右対称となるように調整され、両面に入念な剝離が観察される。石錐(19)は刃部から抓み部まで両面に規則的な剝離が行なわれ、刃部の断面が菱形となるように仕上げられている。削器(29)は小型剥片の側縁部に裏面からの簡単な剝離によって刃部を作りだしたものである。使用痕をもつ剥片(25)は不定形剥片の周縁部に使用時のものと推定される刃敷れをもつ。剥片(39～48)は既述した床面からまとまって出土したものである。全て同一の原石から剥ぎ取られた剥片で、40・45・46・47の周縁部には粗雑な二次的剝離痕をもっている。おそらく、石器製作の素材として貯蔵された剥片であろう。磨製石斧(51)は全体の約2/3を欠失した頭部の破片であ

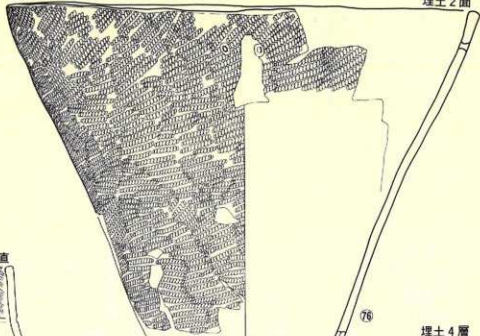
25.5・11.4・18.8

床直

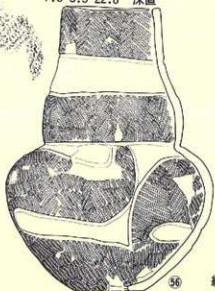


38.2・—

埋土 2 面



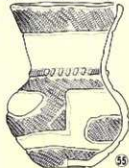
7.8・5.3・22.8 床直



埋土 4 層

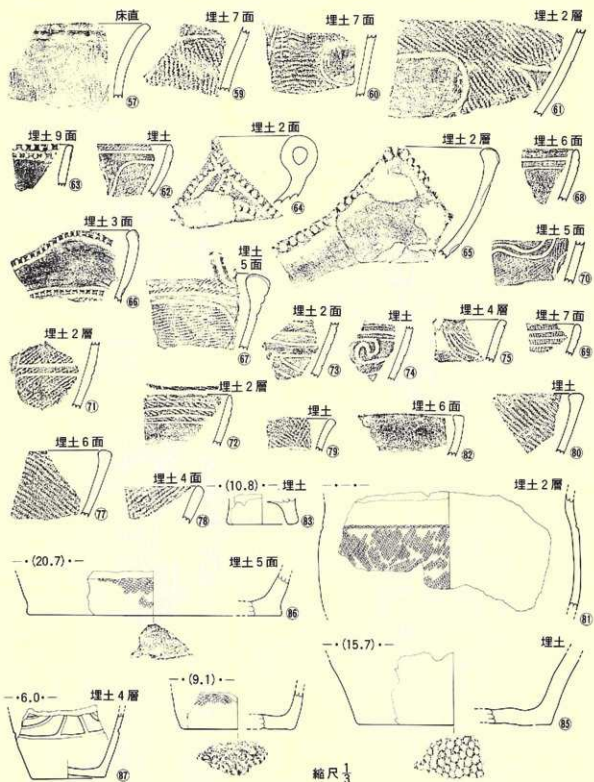


9.2・3.8・13.2 床直

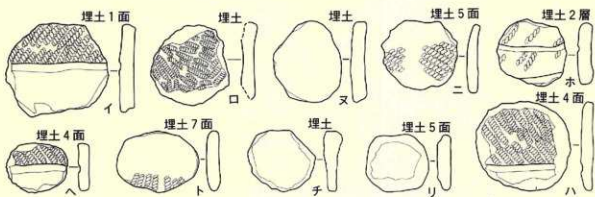


縮尺 $\frac{1}{3}$

第17図 BD 2 住居跡 (遺物-1)

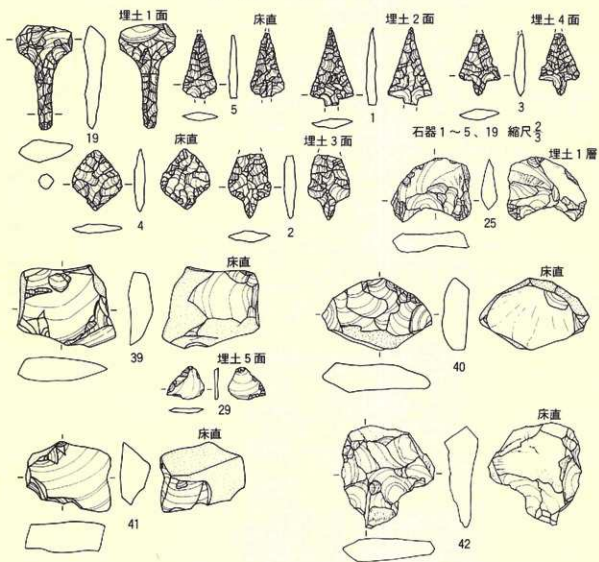


第18圖 BD 2 住居跡 (遺物-2)

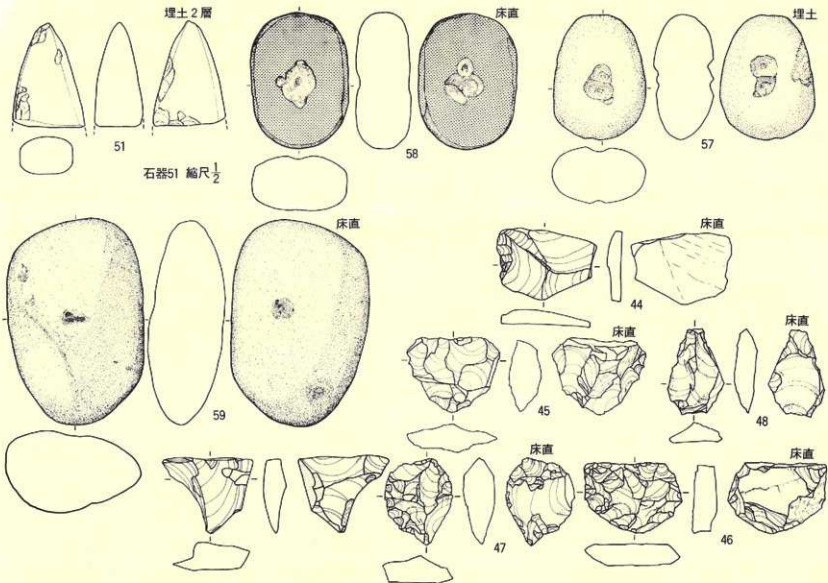


第19図 BD 2住居跡 (遺物-3)

縮尺 $\frac{1}{2}$



第20図 BD 2住居跡 (遺物-4)



第21図 BD 2 住居跡 (遺物-5)

る。凹み石(57～59)はいずれも両面に凹みをもち、58ではさらに磨り石として使用している。

土製品 (第19図イ～ヌ、PL-22)

土器の破片を利用した円盤が10点出土している。形には円形・楕円形・隅丸方形気味等があり、大きさは最小径3.0cm～最大径5.5cmまであり、その内訳は3cm台-4点、4cm台-5点、5cm台-1点になる。ニ・ト・チは口縁部の破片であるが、他は体部破片を使用している。表面には沈線や磨消縄文部をもつもの(イ・ハ・ホ・ヘ)や縄文だけのもの(ロ・ニ・ト)、無文(ヌ・チ・リ)のものがある。破片の弯曲程度をみると、大型土器の破片を使用しているらしい。

その他 (PL-20)

埋土最下部からアスファルト状の固形物が2点出土している。大きさは3.6cm×3.1cm(a)と2.0cm×2.8cm(b)で、重量はそれぞれ10.30gと2.40gである。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した㊟～㊿の土器は第IV群3類に相当し、縄文時代後期中葉の特徴とされている。このことは、本住居跡が縄文時代後期中葉に属することを示している。

2. 土 坑

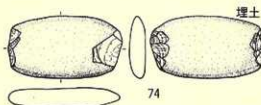
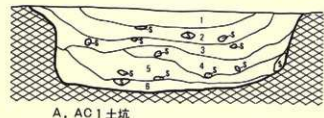
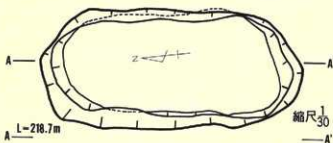
検出された土坑は22基で、そのほとんどは北側の段丘崖沿いに位置するが、5基は調査範囲南端寄りに在る。形態的には、平面形が円形か楕円形-19基、長楕円形-2基、不整形-1基、断面形はフラスコ形-10基、ピーカー形-4基、浅血形-7基、摺鉢形1基の各種類がある。土器や石器の遺物を出土した土坑は13基と少ない。また、遺物の出土はないが、埋土の堆積状況が明らかに縄文時代と判断される土坑と、それとは全く異なる様相を示す土坑があり、これらは時期的に新しいと推定されたが、ここでは時期別に分けずに記述する。

1) AC1土坑

〔遺 構〕 (第22図、PL-10)

AC1グリッドに位置し、重複遺構はない。

規模は、開口部長径約210cm・短径約96cm、底部長径約170cm・短径約76cm、深さ約60cmである。平面形は長軸を南-北にもつ長楕円形で、断面形は北壁上位と南壁は外傾するものの、ほぼ直立する部分が多く、本来はピーカー形を示すであろう。壁の上位は明褐色の地山シルトであるが、壁下位から底部は砂礫層であるため、全体的にみると壁・底部ともに若干凹凸がある。叩きしめ等による締りはない。



縮尺 $\frac{1}{3}$

AGI 土坑

1. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト質。小礫を含む砂質で軟かい。
2. 7.5YR2/2~3/2 黒褐色 シルト質。炭化物、草根薄片、中礫を含み軟かく黒い。
3. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト質。細砂を含み、多少粘性がある。
4. 7.5YR4/3 褐色 シルト質。粒子が細かく多少粘性がある。砂を含む。
5. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト質。3層より粗い砂を含み、多少粘性がある。
6. 7.5YR4/4 褐色 シルト質。大少の礫を含む砂質。



第22図 土坑-1 AC1土坑 (遺構・遺物)

埋土はシルト質の黒褐色・暗褐色・褐色を示す土で構成され、6層に細分される。いずれの層にも砂礫の混入が多く、2層には径1cm未満の炭化物も混入している。堆積の状況は自然埋没の様相を示している。

本土坑から特殊遺物として炭化したくるみが1点出土している。

〔遺物〕

土器片14点と石器1点が出土しているが、全て埋土内からの出土である。

土器 (第22図㊸~㊿、PL-23)

出土した11点の中には口縁部1点・体部9点・底部1点を含むが、小破片が多く完形や実測し得るものはない。㊸~㊿ともに器面に縄文のみを付す粗製土器で、㊸の内外面と㊿の外面には煤の付着がある。縄文は0段多条による原体RL横回転(㊸)やLR縦回転による単節斜行縄文と、原体L縦回転による無節斜行縄文である。㊸・㊿は大型の鉢か深鉢、㊿は中小型の鉢か深鉢と推定される。

これらは、本遺跡の分類では第V群に相当する。

石器 (第26図、PL-23)

石鐘が1点出土している。扁平で長楕円形を示す円縁の長軸両端を、敲打刻離によって凹みをつけ紐掛かりとしたものである。大きさは長さ9.03cm・幅5.03cm・厚み1.39cm・重さ99gである。石材は北上山地古生界産の凝灰質硬砂岩である。

〔遺構の時期〕

決定資料を欠くが、土器片㊸・㊹の器表に付された縄文が0段多条による単節斜行縄文である。このような縄文は第IV群4類に多用されることから類推すると、縄文時代後期中葉に属する可能性を示唆している。

2) AC2土坑-1

〔遺構〕 (第23図A、PL-10)

AC2グリッドに位置し、AC2住居跡-1・2の埋土や床に掘り込まれている。

規模は開口部径80cm×70cm、底部径95cm×70cm、深さ約50cmである。平面形は円形で、断面形はフラスコ形に近い形状を示す。壁の一部には崩落があったりやや不整であるが、底面は凹凸がなく平坦である。

埋土はシルト質の黒色土と黒褐色土で構成され、2層に細分される。両層とも褐色シルトの細粒を含み、2層は1層より明色で小礫を混入している。締りはあまりない。堆積状況を観察すると、平面的な堆積を示しており、必ずしも自然堆積の埋没とは言いつれない面もある。

〔遺物〕

埋土内から土器片4点が出土した。

土器 (第23図D㊸～㊹、PL-23)

㊸は頸部に刻目帯を付して、体部を沈線で図画し、縄文を磨消した土器である。㊹～㊺は縄文の付された器面に沈線で施文する土器である。器種は㊸が浅鉢、㊹～㊺は深鉢と推定される。

以上の特徴から、㊹～㊺は第III群4類、㊸は第IV群4類に相当する。

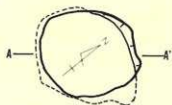
〔遺構の時期〕

㊸の土器片は㊹～㊺より新しいことは明らかである。㊸の属性は既述のとおりであり、このことから本土坑の時期は縄文時代後期中葉に属すると考えられる。

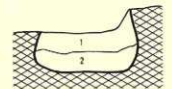
3) AC2土坑-2

〔遺構〕 (第23図B、PL-10)

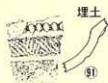
AC2グリッドに位置し、AC2住居跡-1・2の床下から検出され、本土坑が住居跡より古



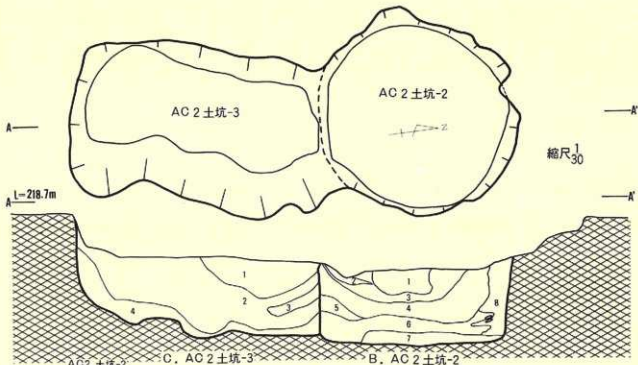
L=218.7m



A. AC2 土坑-1



D. AC2 土坑-1 出土遺物



AC2 土坑-2

C. AC2 土坑-3

B. AC2 土坑-2

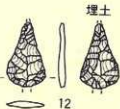
- | | | |
|-----------------|-----|-----------------------------|
| 1. 7.5YR2/1~3/1 | 黒色 | シルト質、炭化物を多く含み、きめの細かい砂質。 |
| 2. 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、炭化物を含み3層よりきめ細かい。 |
| 3. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト質、炭化物を若干含み、4層よりきめ細かい。 |
| 4. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト質、さらさらしたきめ細かい土でよくしまっている。 |
| 5. 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、粘性がありきめ細かく、6層よりしまっている。 |
| 6. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト質、多少粘性があり、比較的軟かい土。 |
| 7. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト質、多少粘性があり、硬くしまっている。 |
| 8. 7.5YR3/4 | 暗褐色 | 砂質シルト、きめの粗い砂のような土。 |

AC2 土坑-1

- | | | |
|-------------|-----|-----------------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト質、きめ細かく軟か、細粒、褐色土を含む。 |
| 2. 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、1層より粗く黄色、小礫と細粒、褐色土を含む。 |

AC2 土坑-3

- | | | |
|-----------------|-----|--------------------------|
| 1. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト質、砂質で軟かい。 |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト質、砂質で粘性があり、褐色状の粒子を含む。 |
| 3. 7.5YR3/3~3/4 | 暗褐色 | シルト質、多少粘性がある。 |
| 4. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト質(砂状)、細礫を含み、しまっている。 |



石器12 縮尺 $\frac{2}{3}$

E. AC2 土坑 2

い遺構であることは既述したとおりである。

規模は、開口部径約155cm×155cm、底部径約144cm×140cm、深さはAC2住居跡の床面から約65cmである。平面形は円形で、断面形はピーカー形である。底部や壁は地山の明褐色砂質シルトから成っており、底部は平坦でほぼ水平状態を示し、壁には若干凹凸がある。

埋土はシルト質の黒色土・黒褐色土・暗褐色土等で構成され、8層に細分されている。1層～3層には炭化物を含む。4層～7層は良く締り、多少粘性をもつ。8層は粗砂の混入した砂質シルトである。土層図で堆積状況を観察すると、ほぼレンズ状堆積と理解されることから、自然堆積で埋没した土坑といえよう。

〔遺物〕

石器が1点出土したのみである。

石器 (第23図、PL-23)

茎部と先端部を若干欠失した石鏃(12)が1点出土している。両面にアスファルト状固形物が付着し、側縁が両面に剝離調整され、左右対称形に仕上げられている。石質は雫石町西部新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩である。

〔遺構の時期〕

明確にする資料はないが、重複関係でAC2住居跡-2より古い遺構であることは明らかであり、このことから推定すると、縄文時代後期中葉から前葉に属するものと思われる。

4)AC2土坑-3

〔遺構〕 (第23図、PL-11)

AC2グリッドに位置し、AC2住居跡-2の床下からAC2土坑-2と重複する状態で検出された。新旧関係は、重複する遺構群の中では最も古い。

規模は、開口部長辺約200cm・短辺120cm、底部長辺約180cm・短辺65cm、深さは最深部約65cmである。平面形は南-北に長軸をもつ不整の長方形で、断面形はピーカー形である。底部や壁は明褐色の地山砂質シルトから成っており、南側の底面には一部凹凸がみられる。東・西の壁はほぼ直立状態であるが、南壁は軽く外傾し、北壁は重複するAC2土坑-2に削られているため未検出である。

埋土は褐色・暗褐色・黒褐色・黒色等を示す砂質シルトで構成され、4層に細分されている。1層は軟かく、2層には褐色状の小粒が混入する。2層と3層は粘性がある。土層はほぼレンズ状の堆積を示しており、自然堆積で埋没した土坑といえよう。

〔遺物〕

全く出土していない。

〔遺構の時期〕

明確な決定資料を欠くが、重複関係では先のAC2土坑-2よりも古い土坑であることは明らかである。このことは本土坑が縄文時代後期前葉に属することを示唆している。

(5)AK 5 土坑

〔遺 構〕 (第24図、PL-11)

AK 5 グリッドに位置し、重複関係を示す遺構はない。

規模は、開口部径約77cm×72cm、底部径約58cm×57cm、深さは最深部で約20cmである。平面形はほぼ円形で、断面形は壁が底面に対して軽く外傾する皿状を示す。底部と壁は基本層序Ⅲ層を掘り込み、底面には若干凹凸があるが、壁は平坦である。

埋土はシルト質の黒褐色土単層で、基本層序Ⅱ層に類似し、基本層序Ⅲ層より黒味が強い。締りが全くなく、フカフカした感がある。埋土が単層で混入物もほとんどなく、自然堆積とは言えない面もある。

〔遺 物〕

全く出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土や他遺構との重複がないことから不明である。

(6)AL 5 土坑

〔遺 構〕 (第24図、PL-11)

AL 5 グリッドに位置し、重複遺構はない。

規模は開口部径約90cm、底部径約65cm、深さは最深部で約32cmである。平面形はほぼ円形で、断面形は壁が底面に対して約110度外傾する皿形である。底部と壁は基本層序Ⅲ層を掘り込み、底面には軽い凹凸があるもののほぼ平坦である。

埋土はシルト質の黒褐色土単層で、締りがなく軟かい。基本層序Ⅱ層に類似する。

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

決定資料を欠くので定かでないが、埋土の状況は縄文時代より新しい様相を示している。

(7)AM 4 土坑

〔遺 構〕 (第24図、PL-12)

AM 4・AN 4 グリッドに跨がって位置し、溝状遺構と重複している。新旧関係は本土坑の方

が新しい。

規模は開口部径約110cm×90cm、底部径約90cm×75cm、深さは最深部で約20cmである。平面形は円形で、断面形は壁が底面に対して約120度外傾する浅皿形である。底面には若干の凹凸が見られる。

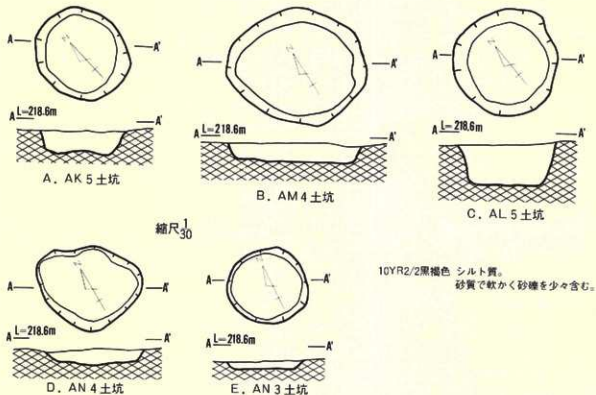
埋土はシル質の黒褐色土単層で、全く縮りが無い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物がないので定かでないが、埋土の状況は縄文時代よりも新しい様相を示している。



第24図 土坑-3

(B) AN 3 土坑

〔遺構〕 (第24図、PL-12)

AN 3・AN 4 グリッドに跨って位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約65cm×61cm、底部径約56cm×53cm、深さは最深部で8cm位である。平面形は円形で、断面形は壁が底面に対して約135度外傾する浅皿形である。底面には凹凸がなく平坦で、壁は外弯気味に立ち上がる。

埋土はシルト質の黒褐色土単層で、締りがなくフカフカしている。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、埋土の状況は縄文時代より新しい状況を示す。

9)AN4土坑

〔遺構〕 (第24図、PL-12)

AN4グリッドに位置し、重複遺構はない。

規模は開口部径約85cm×65cm、底部径約80cm×60cm、深さは最深部で13cm位である。平面形は不整な楕円形で、断面形は壁が底面に対して約150度外傾する浅皿形である。壁と底面は基本層序Ⅲ層を掘り込んでいる。底面には凹凸があり、北側部分が特に著しい。北壁は基本層序Ⅲ層との区別に難点があるが、他の部分は若干内弯気味に立ち上がる。

埋土はシルト質の黒褐色土単層で、フカフカして締りがない。人為的な埋戻しの可能性がある。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物がないので定かでないが、埋土の状況は縄文時代より新しい状況を呈している。

10)BA16土坑

〔遺構〕 (第25図、PL-13)

BA16グリッドに位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約60cm、底部径約70cm、深さは最深部で約20cmである。平面形は円形で、断面形は壁が底面に対して約75度内傾するフラスコ形である。壁の上位は基本層序Ⅲ層、壁の下位と底部は同IV層を掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は黒色を示す砂質シルトで、基本層序Ⅱ層に類似している。少量の粗砂が混入している。締りはあまりなく、軟かい。自然埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

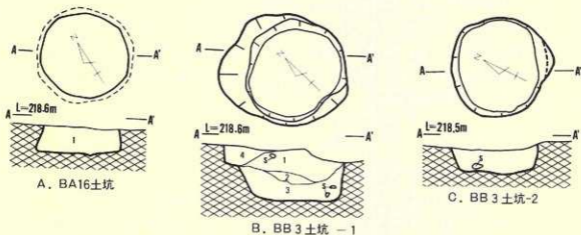
土器片が出土したのみである。

土器 (第25図⑨・⑩、PL-23)

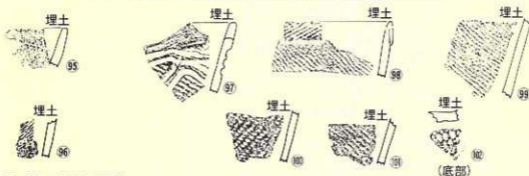
埋土内から2点出土している。⑨は無文の口縁部破片で、⑩は体部に原体LR横回転による単節斜行縄文の付された体部下位の破片である。2点とも小型土器の破片である。

〔遺構の時期〕

出土した土器に時期を決定し得るような文様がないので定かでないが、縄文時代に属することは確実であろう。



- A, BA16 土坑
 1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質。BB16土坑の1層と同じ。
- B, BB3 土坑-1
 1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質。中砂を含み砂質で軟かい。
 2. 7.5YR2/1 黒色 シルト質。粘化物を含み粘性がありきめ細かい。
 3. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質。粘性がある。
 4. 7.5YR1.7/1 黒色 シルト質。草根細片を含む砂質土。
- C, BB3 土坑-2
 1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト質。きめ細かい砂質で褐色土がまだらに入っている。



D. BA16土坑出土遺物

E. BB3土坑-1 出土遺物
 第25図 土坑-4

III BB3 土坑-1

〔遺構〕 (第25図、PL-13)

BB3 グリッドを中心にして、南が若干BC3 に跨がって位置する。BB3 住居跡の南西壁と重

複しており、新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約105cm×84cm、底部径約75cm×65cm、深さは最深部で約45cmである。平面形はやや歪んだ楕円形で、断面形はピーカー形に近い形状を示す。壁の上位は基本層序Ⅲ・Ⅳ層、壁下位と底部はⅤ層を掘り込んでいる。壁はほとんど平滑であるが、底面は礫層であるため凹凸が著しい。西から南側の壁は弯曲気味に立ち上がり、約120度外傾している。北西壁は底面から約25cm上位に段差をもって外方に広がり、段差の上位の壁はほぼ直立している。他の壁はほぼ直立状態に近い。

埋土は黒色や黒褐色を示すシルト質の土で構成され、混入物によって4層に細分される。1層には径2～3cmの小礫を若干含み、2層には少量の炭化物が混入している。2層と3層はやや粘性があり、1層はサラサラした軟かい土である。4層は草根の細片を含み、基本層序Ⅰ層に近似している。自然堆積の状況を示している。

〔遺物〕

土器片のみが出土している。

土器 (第25区⑨～⑫、PL-23)

埋土内から破片が6点出土しており、その全てを掲載した。⑨は小突起のつく波状口縁の破片で、口縁端部を肥厚させて無文にし、その下位には縄文を付した器面に断面丸形の並行沈線によって施文される。⑩は口縁端部を肥厚させ、全面に縄文が付された粗製土器である。⑪～⑫は縄文のみが付された体部破片である。⑬は底面にA型の網代直をもつ底部破片である。体部の縄文は0段多条による原体LR(⑭)、RL(⑮)縦回転による単節斜行縄文、原体L縦回転による無節斜行縄文(⑯・⑰・⑱)がある。

以上の特徴から、⑨は第Ⅲ群7類、⑩～⑫は第Ⅴ群に属する。

〔遺構の時期〕

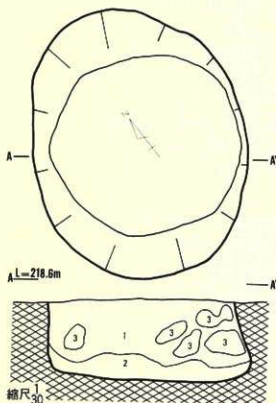
埋土内の出土ではあるが、⑨は縄文時代後期前葉に属する。重複関係では縄文時代後期中葉の住居跡より新しいことは明らかである。したがって、後者の状況から縄文時代後期中葉頃に位置づけられるであろう。

02BB3土坑-2

〔遺構〕 (第25区、PL-13)

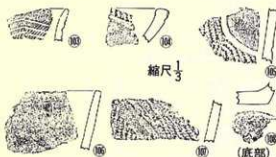
BA3・BB3に跨って位置し、BB3住居跡の北東壁と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約80cm×77cm、底部径約73cm×62cm、深さは最深部で約20cmである。平面形は円形に近い楕円形を示し、断面形は壁が底面に対して約110度外傾し、皿形に近い。壁は基



BB16 土坑

1. 7.5YR2/1 黒色 砂状シルト質。2層より粗く、しまりが強い、軟かい砂質土。
2. 7.5YR2/1 黒色 砂状シルト質。硬くしまって粘りもある。
3. 7.5YR2/1 黒色 砂状シルト質。1層よりきめ細かくもろい。



BB16土坑 (遺構・出土遺物)

第26図 土坑-5

本層序第IV層、底部は同第VII層を掘り込み、壁に凹凸はほとんどないが、底面は礫層のため凹凸が著しい。

埋土は黒褐色シルト質単層で、少量の粗砂や小礫が混入している。また、褐色のシルト粒を斑状に含む。自然堆積の状況を示している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を明確にする資料はないが、重複関係からみると、縄文時代後期中葉かそれ以降に属することは確実で、埋土の状況は縄文時代の遺構であることを示している。

BB16土坑

〔遺構〕 (第26図、PL-14)

BB16グリッドに位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約220cm×170cm、底部径約150cm×140cm、深さは最深部で約65cmである。平面形は、開口部がほぼ南北に長軸をもつ楕円形で、底部は円形を示す。断面形は一部の壁が内傾しているが、本来はピーカー形であった可能性をもつ。壁上位は基本層序III層、壁下位と底部はIV層を掘り込み、壁・底部ともに凹凸がなく、平坦である。壁は底面に対して東壁が75度内傾し、他の壁面は多少の差はあるが外傾している。平面図と断面図で形状に差があるのは、断

面図を作成後、完掘段階に壁が崩落したためである。しかし、東壁以外の壁は当初から平面図のような形状である。

埋土は黒色の砂質シルトで構成されるが、混入物や粘性によって3層に細分されている。1層は2層より若干粒子が粗く、軟かい。2層は1層より締りがあって硬く、粘性もある。3層は1層に塊状で混在し、1層より細粒でやや軟かい。この土坑の埋土は、1層と2層の層序が不自然であることや、1層中の3層の混在等から、人為的に埋め戻された可能性を示している。

〔遺物〕

土器片が6点出土している。

土器 (第26図㉑～㉒、PL-23)

いずれも埋土内から出土した。㉑は原体LR横回転による単節斜行縄文に多条並行沈線の付された口縁部破片である。㉒は端部に刻目帯をもち、その下位を無文とした口縁端部の破片である。㉓は沈線区画による磨消縄文をもつ。㉔は無文の口縁部破片である。㉕は原体LR縦回転による単節斜行縄文の付された体部の破片である。㉖は底部の小破片である。

以上のことから、㉑は第IV群7類、㉒は第IV群4類、㉓は第IV群3類、㉔は第VI群、㉕は第V群に属する。

〔遺構の時期〕

㉑～㉒はともに縄文時代後期中葉に属する土器であり、この土坑もほぼそれに併行するであろう。

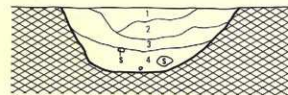
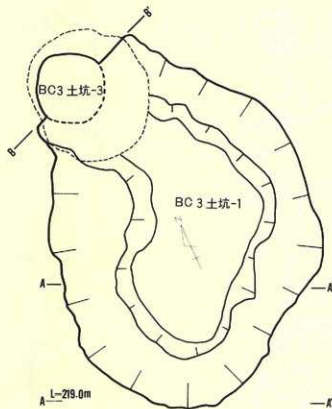
04BC 3 土坑-1

〔遺構〕 (第27図、PL-14)

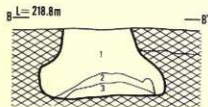
BC 3 グリッドに位置し、北端部がBC 3 土坑-3 と重複している。新旧関係は本土坑の方が古い。

規模は、開口部径約275cm×210cm、底部径約190cm×115cm、深さは最深部で約60cmである。平面形はほぼ南-北に長軸をもつ歪んだ不整の楕円形で、断面形は楕球形である。形状が不整であるため、果して遺構と認定していいか疑問もあったが、取りあえず遺構とした。壁上位は基本層序Ⅲ・Ⅳ層、壁下位と底部は同Ⅳ層を掘り込んでいる。壁は大きな起伏があり、やや内弯気味に立ち上がって、底面に対して約140度外傾する。

埋土は黒色や黒褐色のシルトで構成され、混入物や土性によって4層に細分される。全体的に黄褐色のシルト粒を含み、2層と3層には少量の炭化物を混入している。4層には礫の混入が比較的多い。全体的に良く締るが、粘性はない。堆積の状況は自然埋没の様相を示している。



A, BC 3 土坑-1



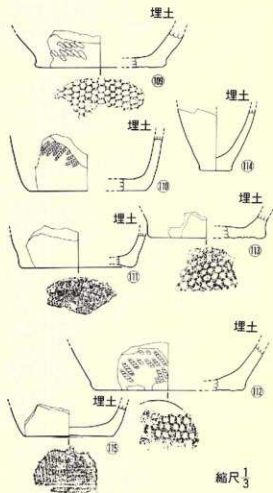
B, BC 3 土坑-3

BC 3 土坑-1

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト質、細砂、黄褐色の粒子、草木根の細片を含み高粘土の様に見え軟かい。
2. 10YR2/3 黒褐色 シルト質、小礫、炭、黄褐色の粒子を含み軟かい。1層よりしまっているが4層より厚い。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト質、細砂、黄褐色の粒子、炭を含み軟かい。
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト質、黄褐色の粒子を2層より多く含む。2～5mmの礫を少し含む砂質で2層よりやや粗く他の3層よりしまっている。

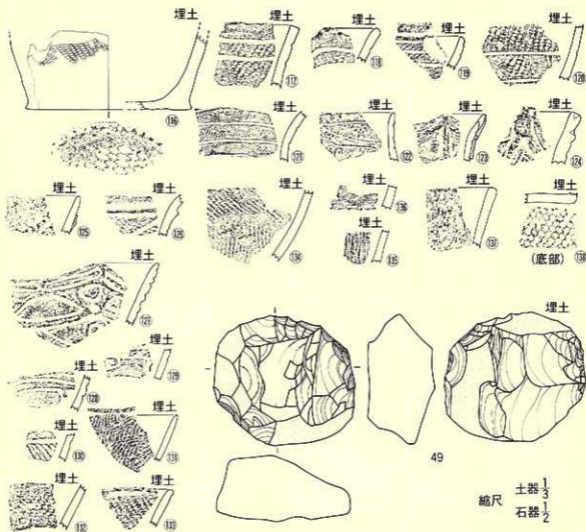
BC 3 土坑-3

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト、粘性なく軟かい。炭化物、小礫、砂粒、草木根が混る。
2. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト、砂質で軟かい。
3. 7.5YR2/3 暗暗褐色 シルト、砂質混りで硬い。微量の炭化物混入。



C, BC 3 土坑-1 出土遺物(1)

第27図 BC 3 土坑-1 出土遺物(1)



第28図 土坑-7 BC 3土坑-1 出土遺物(2)

〔遺物〕

埋土内から土器片と石核が出土している。

土器 (第27・28図⑩～⑳、PL-24)

92点の破片が出土しているが、27点を掲載した。⑩～⑱は体部下位から底部を残存するものである。⑩・⑪・⑫・⑬の底面にはA型の網代痕がある。⑪と⑬は笹の葉の木葉痕をもつ。⑩～⑫は縄文を付した後並行沈線で施文するものである。⑭・⑮は無文の器面に並行沈線で区画し、区画帯が隆起している。⑯・⑰は沈線区画と磨消縄文を特徴とする。⑱～⑳は縄文だけが付された粗製土器である。㉑は器面に櫛掻き文をもつ。㉒は無文土器である。⑩～⑱・㉒～

⑫・⑬・⑭・⑮・⑯は口縁部の破片で、他は体部片である。縄文は原体LRやRLの縦や横回転による単節斜行縄文、単軸絡条体縦回転による縦位撚糸文がある。

以上の特徴は、⑭～⑯は第IV群7類、⑫～⑬は第III群4類、⑮・⑯は第III群9類、⑬・⑭は第IV群1類か3類、⑭～⑯はV群1・2類、⑮は第V群4類、⑯は第VI群に相当する。

石器 (第28図、PL-24)

埋土内から石核が1点出土している。石材は北上山地古生界産のチャートである。大きさは、全長6.81cm・幅7.43cm・厚み3.58cm・重さ226gである。

〔遺構の時期〕

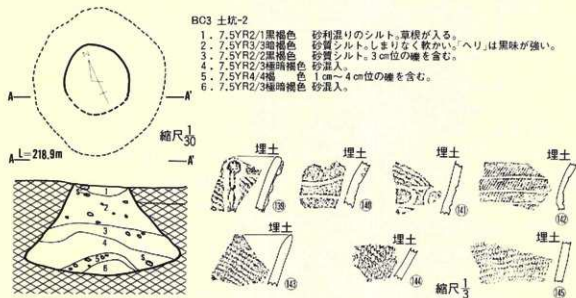
⑭～⑯は縄文時代後期前葉に属する土器であるし、⑮・⑯は同後期中葉の土器である。しかし、後者は埋土最上位からの出土であることから、本土坑に伴する土器は前者であろう。以上のことから、本土坑は縄文時代後期前葉に位置づけられるであろう。

⑮BC3土坑-2

〔遺構〕 (第29図、PL-14)

BC3グリッドに位置し、重複遺構はない。

規模は開口部径約55cm×52cm、底部径約118cm×105cm、深さは最深部で約72cmである。平面形は円形で、断面形は底面に対して壁が約50度内傾するフラスコ形である。壁は基本層序Ⅵ層、底部は同Ⅵ層を掘り込み、壁に凹凸はないが、底面は凹凸が著しい。底面は中央部ほど低く、壁際とは10cmの比高がある。



第29図 土坑-8 BC3土坑-2 (遺構・出土遺物)

埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色等を示す砂質シルトで構成され、混入物や土性によって6層に細分されている。全体的に砂粒の混入が多く、1層と5層には小礫も含む。2層は中心ほど明色で、壁際ほど黒味が強い。いずれも絡りがなく軟かい。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

埋土内から土器の破片が出土している。

土器 (第29図⑨～⑭、PL-24)

土器片が7点出土している。⑨と⑭は口縁部であるが他は体部の破片である。⑨は粘土紐貼付による隆帯と沈線によって施文された波状を示す口縁部破片である。⑩は無文の器面に沈線と刺突痕による文様を付す。⑪は縄文をもつ器面に沈線をもつ。⑬も⑭に近いが、沈線が多条並行沈線である。⑫～⑬は縄文のみが付された粗製土器である。体部の縄文には原体LR縦回転(⑬・⑭)や横回転(⑫・⑬・⑭)、原体RL横回転(⑫)による単節斜行縄文である。

以上の特徴から、⑨は第Ⅲ群4類、⑩・⑪は第Ⅲ群7類、⑬は第Ⅳ群7類、⑫～⑭は第Ⅴ群に相当する。

〔遺構の時期〕

埋土内から出土した⑨～⑭はいずれも縄文時代後期前葉に属する。以上のことから、本土坑も縄文時代後期前葉に位置づけられるであろう。

06BC3土坑-3

〔遺構〕 (第28図、PL-15)

BC3グリッドに位置し、BC3土坑-1の北端部分と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。本土坑はBC3土坑-1の精査中に偶然検出された。したがって、南側約1/2はBC3土坑-1の精査で掘りすぎたため、この部分の壁は不明である。

規模は開口部径約54cm、底部径約100cm、深さは最深部で約60cmである。平面形は、既述の理由で断定できないが円形と推定され、断面形は変則的ではあるが、壁が底面に対して内傾するフラスコ形である。壁は基本層序Ⅵ層、底面は同Ⅵ層を掘り込み、壁にあまり凹凸はないが、底面は礫のため凹凸が著しい。本土坑の壁は、底面から直立気味に立ち上がった後、大きく内傾し、さらに次第に外弯しながら開口部に続くという変則的な状況を示している。

埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色のシルトで構成され、3層に細分される。全体的に砂粒の混入が多く、2層には明褐色のシルト粒、3層には炭化物粒が含まれている。自然堆積で埋没した状況を示している。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

決定資料を欠くので明確でないが、重複関係でみると、縄文時代後期前葉に属するとしたBC 3土坑-1より新しいことは明らかである。このことは本土坑が縄文時代後期前葉以降に属することを示している。

07BC 3 土坑-4

〔遺構〕 (第30図、PL-15)

BC 3 グリッドに位置し、重複する遺構はない。なお、本土坑は第二次検出で確認された。

規模は開口部径約64cm×58cm、底部径約46cm×45cm、深さは最深部で約55cmである。平面形は円形で、断面形は壁が底面に対して約80度内傾するフラスコ形である。底面が基本層序Ⅶ層の礫層に達しているため凹凸が著しいが、壁は基本層序Ⅵ層の砂質シルトであるため、平滑である。本土坑の底面は二段構造となっており、最も低い底面は径約30cmの円形で、その上位約15cmには径45cm位になる底面の一部が残存する。土層断面図では同時性を示している。

埋土は黒褐色と褐色の砂質シルトから成り、4層に細分される。4層には砂粒、1層には径0.5cm～5cmの礫が混入し、2・3層は粒子が細かくシルト質である。1層の礫は流れ込みによるもので、他の土坑でも観察される。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

決定資料を欠くので不明である。しかし、このような形状や埋土堆積状況は縄文時代の土坑であることを示すものであろう。

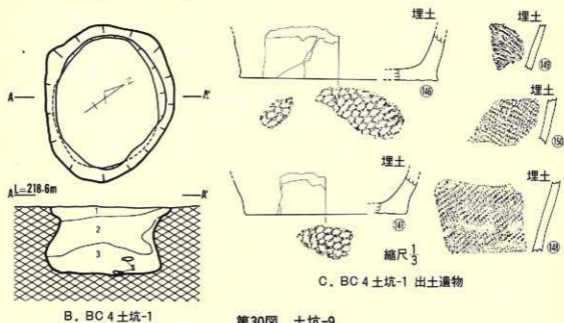
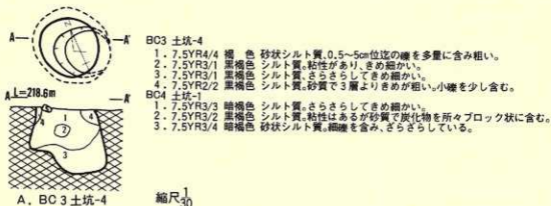
08BC 4 土坑-1

〔遺構〕 (第30図、PL-15)

BC 4 グリッドに位置し、重複する遺構はない。

規模は開口部径約125cm×103cm、底部径約104cm×85cm、深さは最深部で約55cmである。平面形は楕円形で、断面形は壁が底面に対して70度～80度内傾するフラスコ形である。壁は基本層序Ⅵ層、底面は同Ⅵ層を掘り込み、壁に凸凹はないが、底面には多少の凹凸がみられる。内傾して立ち上がった壁は約40cm上位に頸部をもち、その上位は開口部まで外弯している。

埋土は黒褐色と暗褐色のシルトで構成され、3層に細分される。2・3層は砂質で、特に2



第30図 土坑-9

層でその傾向が強い。また、2層には炭化物粒の混入もみられる。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

埋土内から土器片が出土している。

土器 (第30図⑬~⑳, PL-24)

全部で7点の土器片が出土しているが、5点のみ掲載した。⑬・⑭は体部下位と底部の一部を残し、底面にはA型の網代痕をもつ。⑮~⑱は体部破片で、原体LR (⑮) やRL (⑱) 横回転による単筋斜行縄文や、原体R横回転による無筋斜行縄文である。

以上のことから、⑮~⑱は第V群に相当する。

〔遺構の時期〕

出土した土器片からは時期を明確にし得ないが、形状や埋土の堆積状況は縄文時代の土坑であることを示している。

09BC 4 土坑-2

〔遺 構〕 (第31図、PL-16)

BC 4 グリッドに位置し、西側の約1/2が調査区域外に延びているため未調査である。検出された範囲での重複遺構はない。

検出された部分から推定される規模は開口部径約78cm、底部径約71cm、深さは最深部で約50cmである。平面形はほぼ円形と推定され、断面形は壁が底面に対して約55度で内傾するフラスコ形であるが、底面の上位約30cmに頸部をもち、その上位は約100度で外傾している。壁・底面とも基本層序Ⅱ層から成り、壁には凹凸もなく平坦である。底面は若干凹凸があり、壁に近づく程次第に高くなり、約10cmの比高がある。

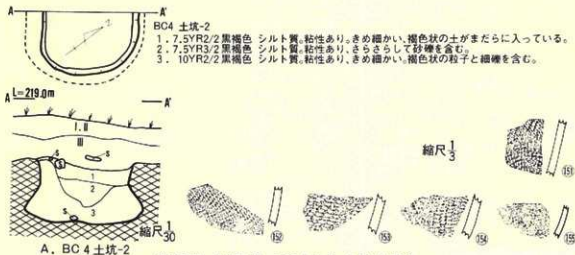
埋土は黒褐色のシルトであるが、混入物によって3層に細分される。3層とも粘性があり、1層と3層のシルト粒が斑状に混入し、さらに2層と3層には砂粒が含まれている。本土坑は基本層序Ⅱ層に覆われていることから、同Ⅲ層から掘り込まれたことが窺われる。自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺 物〕

埋土内から土器片が出土している。

土 器 (第35図④～⑩)

14点の破片が出土し、そのうち5点を掲載したが、全体部のみで口縁部の破片はない。い



第31図 土坑-10 BC 4 土坑-4 出土遺物

ずれも体部に縄文の施された粗製土器である。㊶・㊷は原体LR横回転、㊸・㊹は原体RL縦回転による単筋斜行縄文で、㊺は無文土器である。

以上のことから、㊶～㊹は第V群、㊺は第VI群に相当する。

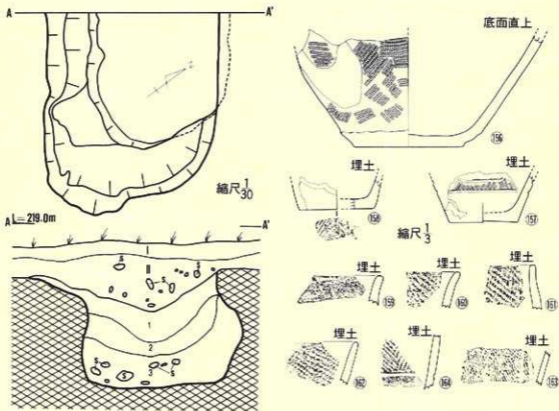
〔遺構の時期〕

粗製土器のみであるため明確にし得ないが、出土した土器や形状、埋土堆積状況等は縄文時代の土坑であることを示している。

㊶BD4土坑

〔遺構〕 (第32図、PL-16)

BC4・BD4グリッドに跨って位置し、西側約1/2が調査区域外に延びている。検出された範囲での重複遺構はない。



BD4土坑

1. 10YR3/2 黒褐色 シルト質。小礫を含み2層に比べ粗い。ややしまっている。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト質。しまっているが粒子は3層に比べ細かい。細砂を含む。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト質。硬くしまっているが、粒子は粗く大小の礫を含む。

第32図 土坑-11 BD4土坑 (遺構・遺物)

検出された部分から推定される規模は、開口部径約140cm、底部径約108cm、深さは最深部で約100cmである。平面形は北西—南東に長軸をもつ楕円形と推定され、断面形は底面の上位に頸部をもつフラスコ形で、壁は頸部の下位は内傾、上位は外傾している。壁上位は基本層序VI層、下位と底部は同VII層であるため、VII層の部分は凹凸が著しい。なお、検出面での開口部は不規則な状況を示し、検出面の下位約15cmに段をもつ2段構造に近い形状である。

埋土はシルト質の黒褐色土で構成され、混入物によって3層に細分される。全体的に砂粒や礫の混入が多く、特に3層には径10cm前後のものも含まれ、さらに炭化物粒も多く観察される。上位から下位に向けて次第に硬さを増し、下位ほど粒子が粗くなる傾向もみられる。なお、この部分の基本層序III層には礫の混入が観察され、確認はできなかったが、本土坑のように埋土内に礫を含む例は他にもあり、洪水による流入で埋没した可能性が考えられる。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

底面直上や埋土内から土器が出土している。

土器 (第32図⑬～⑳、PL-25)

底面直上、埋土内合わせて53点の土器片が出土しているが、本報告書には9点掲載した。底面直上から出土した⑬は体部下位～底部を残存し、器面に原体RL縦回転による単節斜行縄文を付す。⑭～⑯は埋土内からの出土で、⑭・⑮は⑬と同じ残存状態を示す。⑰は沈線区画と磨消縄文を特徴とし、⑱も同様である。⑲の底面に笹の葉状の木葉痕をもつ。⑳は無文の口縁部破片である。㉑・㉒は原体L縦回転による無節斜行縄文、㉓は原体LR縦回転による単節斜行縄文の付された粗製土器の口縁部破片である。㉔は原体R横回転による無節斜行縄文を付した後、縦位の隆帯を貼付している。

以上の特徴から、㉑・㉒は第IV群4類、㉓～㉔は第V群、㉕は第VI群、㉖は第III群2類に相当する。

〔遺構の時期〕

底面直上から出土した㉔では明確に示得ないが、㉕・㉖の出土から縄文時代後期中葉に位置づけられるであろう。

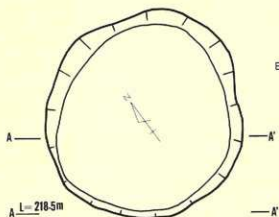
21BF 4 土坑

〔遺構〕 (第33図、PL-16)

BF 3・BF 4 グリッドに跨がって位置し、重複する遺構はない。

規模は開口部径約165cm×160cm、底部径約150cm×138cm、深さは最深部で約95cmである。

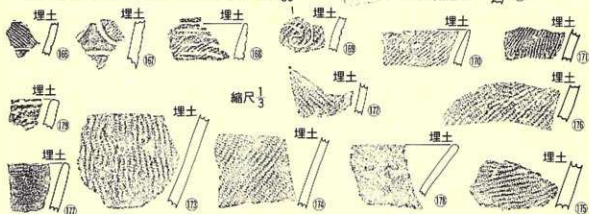
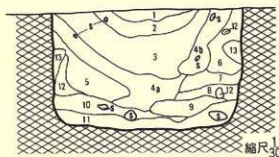
平面形は楕円形、断面形は壁が底面に対して外傾気味を示すピーカー形である。壁下位から底



BF4 土坑

- | | | | |
|----|----------|-----|-----------------------------------|
| 1 | J.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、粘性あり、褐色状の粒子と小礫を含む。 |
| 2 | J.5YR4/4 | 黒褐色 | シルト質、粘性あり、小礫を含む。 |
| 3 | J.5YR2/1 | 黒褐色 | シルト質、砂質で炭化物を含みよくしまっている。 |
| 4a | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト質、砂質だが4より粗い、小礫多い。 |
| 4b | 10YR2/1 | 黒褐色 | シルト質、砂質で炭化物を含み小礫多い。 |
| 5 | J.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、砂質だがやや粗い、小礫多い。 |
| 6 | J.5YR2/1 | 黒褐色 | シルト質、砂質で単層細片を含む。 |
| 7 | J.5YR1/7 | 黒褐色 | シルト質、砂質で炭化物、小礫、単層細片を含む。 |
| 8 | J.5YR1/7 | 黒褐色 | シルト質、粘性を含むが砂質で1層〜7層より粗い。 |
| 9 | J.5YR1/7 | 黒褐色 | シルト質、粘性がやや粗い、小礫多い。 |
| 10 | J.5YR2/1 | 黒褐色 | シルト質、粘性がありよくしまっている。 |
| 11 | J.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト質、粘性がありよくしまっている。 |
| 12 | J.5YR3/4 | 黒褐色 | シルト質、7.5YR2/2褐色土とまだらに混合、粘性があるが粗い。 |
| 13 | J.5YR3/4 | 黒褐色 | シルト質、粘性あり。 |

A— A' L=218.5m



第33図 土坑-12 BF4土坑 (遺構・遺物)

部は基本層序VII層であるため凹凸が著しいが、壁上位は同VI層であり凹凸はない。

埋土は黒色・黒褐色・褐色を示すシルトで構成され、混入物や色調によって14層に細分される。10・11層には径10〜15cm位、2・4・5・7層には径5cm以下の礫や砂の混入が多い。また、3・4・7層には炭化物が混入する。9〜13層には多少の粘性がある。このような礫の混入は洪水等による流入を推定させ、おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。

[遺物]

土器片のみが出土している。

土器 (第33図⑮～⑳、PL-25)

全部で86点の破片が出土しているが、本報告書には14点掲載した。底面直上から出土した⑮は沈線区画と磨消縄文を特徴とし、埋土内から出土した⑯・⑰も同じ様相を示す。⑱・⑲は縄文の付された器面に沈線のみによって施文されている。⑳～㉑は縄文のみが付された粗製土器である。㉒～㉓は無文土器である。体部の縄文には原体LR横回転(㉒・㉓・㉔・㉕・㉖)、斜回転(㉗)、縦回転(㉘)や原体RL横回転による単筋斜行縄文がある。

以上の特徴から、⑮～⑰は第IV群4類、⑱・⑲は第III群、㉒～㉓は第V群、㉔～㉕は第VI群に相当する。

〔遺構の時期〕

⑮～⑰は出土した土器の中では最も新しいものである。したがって、縄文時代後期中葉に属する土坑であろう。

㉒B13土坑

〔遺構〕 (第34図、PL-16)

BI3・BI4・BJ3・BJ4の各グリッドに跨がって位置し、重複する遺構はない。

規模は開口部径約180cm×140cm、底部径約120cm×106cm、深さは最深部で約120cmである。平面形は楕円形で、断面形はフラスコ形に近い。壁の状態は不規則で、底面に対して若干内傾し、床面の上位約65cmを頸部にし、その上位は外傾している。壁の上位は基本層序VI層であるが、壁下位と底部は同VII層で、後者は凹凸が著しい。

埋土は黒色・暗褐色・褐色を示すシルトを主体にして構成され、混入物や土性によって11層に細分される。1～3・6・8・10層には砂粒や礫の混入が非常に多く、その他の層と対照的な状況を示している。4・6・9層には多少の粘性があり、10・11層は良く締まっている。礫の混入状態から考えると、洪水等による流入が推定されることから、この土坑は自然堆積で埋没したものであろう。

〔遺物〕

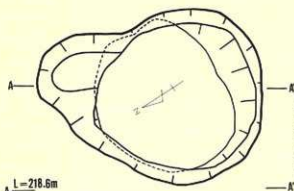
使用痕のある剥片が1点出土したのみである。

石器 (第34図、PL-25)

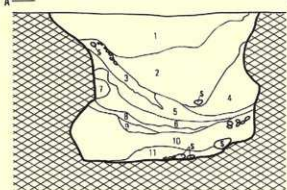
31は埋土内から出土した。明らかな加工痕はないが、側縁部に使用痕と思われる刃毀れがみられる。

〔遺構の時期〕

決定資料がないので明確でないが、形状や埋土の状況は縄文時代の土坑であることを示す。



1. 7.5VR2-2 赤褐色 シルト質、3cm位の礫を多く含む粘質土。
2. 7.5VR2-1 黄褐色 シルト質、礫を多く含む粘質土。
3. 7.5VR4-3 褐色 シルト質、粘質で礫は入り、5cm前後の礫も混入。
4. 7.5VR4-6 褐色 シルト質、粘質があり、礫は入っていない。
5. 7.5VR1-7 黄褐色 シルト質、粘質で礫は入っていない。
6. 7.5VR2-1 赤褐色 シルト質、7.5VR4-3(褐色土)と混合土、粘質がある粘質で小礫多い。
7. 7.5VR4-6 褐色 団粒と混し。
8. 7.5VR2-1 赤褐色 シルト質、中による小礫の多い粘質土。
9. 7.5VR4-4 褐色 シルト質、7.5VR2-1(赤色土)の20%位混入、粘質のある粘質土。
10. 7.5VR2-1 赤褐色 シルト質、粘質のある粘質土で小礫が混入され、よくしまっている。
11. 7.5VR3-3 暗褐色 粘質シルト、よくしまった粘質土で小礫が多く、底には大礫もある。



B, B13 土坑 出土遺物

第34図 土坑-13 B13 土坑 (遺構・遺物)

3. 溝状遺構

〔遺 構〕 (第39図、PL-17)

溝状遺構と命名した遺構は、耕作道路として利用されていた地境部分で検出された。水路として利用されたものではなく、踏み締めによる鎮圧で溝状に沈んだ部分と推定される。

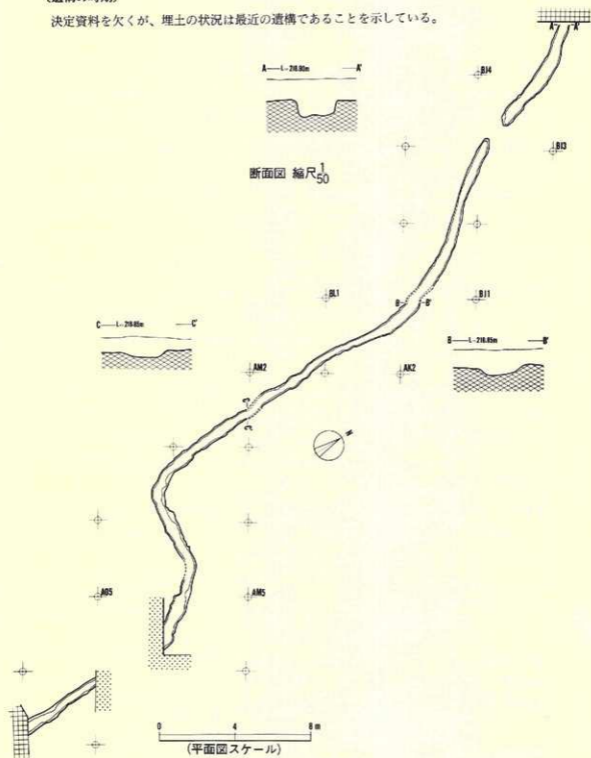
検出された総長は直線で約47mであるが、北端・南端とも調査区域外に伸びているので、実際の長さは不明である。幅は位置によって若干差があるものの、ほぼ50cm位、深さも不同で10cm～15cmの範囲である。方向は全体で見るとほぼ南北であるが、実際には曲折があって大きく蛇行している。法面や底面ともに不規則で、特に底面は凹凸が著しい。

〔遺 物〕

埋土内から縄文土器の破片が出土しているが、埋土が既述した状況であることから、本遺構に直接相伴する遺物とは認め難く、遺構外の遺物に一括した。したがって、相伴遺物は全くない。

[遺構の時期]

決定資料を欠くが、埋土の状況は最近の遺構であることを示している。



第35図 溝状遺構

VI 遺構外の出土遺物

本項では、遺構に直接伴しないで、粗掘りや遺構検出時に出土した遺物について記すことにする。出土層位をみると、I層とII層での出土が量的に多く、この状況は遺構の検出層位(基本層序第III層上面)ともほぼ一致するものである。第III層から出土した土器は、第I層と第II層や遺構内から出土したそれに比較して、時期が若干古い様相を示しており、層位的な矛盾はない。

遺物の中には、土器・土製品・石器・石製品が含まれていることから、それらを個別的に説明を加える。

1. 土 器

遺構外から出土した遺物の中では土器が最も多い。出土層位は先に記したとおり、下位層ほど時期の古いものが出土する傾向がみられたが、第II層とした黒色土が部分的に堆積しているのみで、場所によっては表土を除去すると、直接第III層(遺構検出面)の上面が露出し、遺跡全体でみると、第II層が薄いために第I層(表土)での出土が主体である。

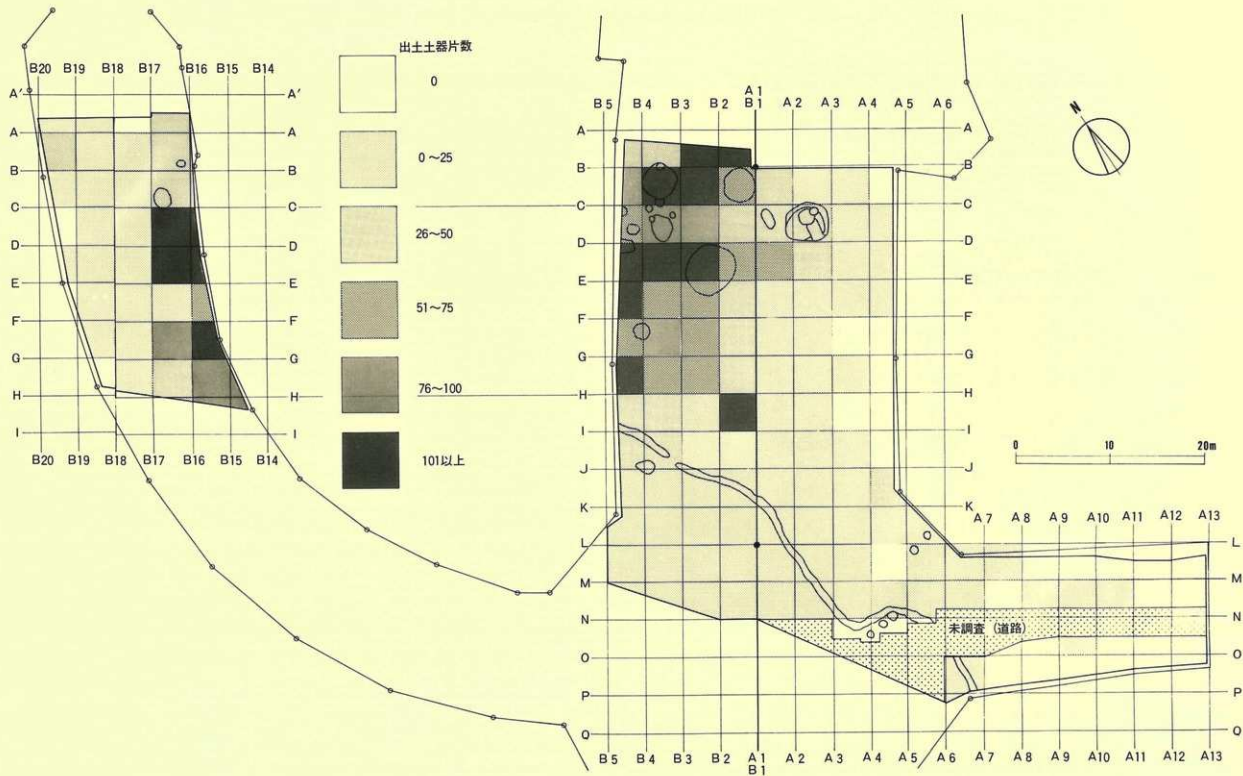
出土地点をみると、遺跡全体に散在する在り方を示すが、その中でもBI4とAB3を直線で結んだ線から西方と、BH14からBA16を結んだ線の東の範囲での出土が多く、この状況はそのまま遺構の分布域と一致する在り方を示しており、今後の分布調査に示唆するものが大である。

以上のことから、遺構外から出土した土器は層位的な分類ではなく、型式学的な分類によって記述する。

遺構外から出土した総土器片数は4,500点弱で、中には口縁部760点弱、底部260点弱、体部3,500点弱が含まれており、本報告書ではその中から、実測図34点、拓影図173点、底部実測図53点の合計260点を選択し、全体が網羅できるように掲載した。

出土した土器全体をみると、縄文時代早期・中期・後期に属するものが混在している。このような状況から、分類ではそれらの時期が反映されるように留意し、以下のような群構成とした。

- 第I群土器——縄文時代早期に属する土器で、本遺跡から出土した土器の中では最も少ない部類である。相違点もみられるが、量が少ないので細分しない。
- 第II群土器——縄文時代中期に入る土器であるが、量が少なく、全て同じ特徴を示していることから、一括し細分しない。
- 第III群土器——縄文時代後期前葉に位置づけられる土器群であるが、それぞれの特徴によっ



第36図 粗掘り時出土土器片数 (グリッド別)

て11類に細分される。

- 第Ⅳ群土器——縄文時代後期中葉に属する土器群で、本遺跡から出土した土器の主体を占めており、検出遺構とも共伴するものである。本群もまた施文方法とその文様によって7類に細分される。
- 第Ⅴ群土器——器面に縄文以外の文様をもたない、所謂粗製土器である。縄文の種類によって4類に細分される。
- 第Ⅵ群土器——器面に全く文様をもたない無文土器を入れた。

以上のⅥ群に大別してその概要を以下に記すが、これら以外に底部～体部最下部を残存する個体が58点ある。この中には木葉痕や網代痕をもつ例が多く含まれることから、その内容についても詳述することにする。しかし、本来は第Ⅱ群～第Ⅴ群に包括されるべきものと考えている。

〔第Ⅰ群土器〕 (第37図1・2、PL26)

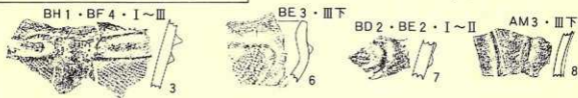
本群は縄文時代早期に属する土器で、出土点数は2個体3点その全てである。これらの出土地点は20mほど離れているが、いずれもⅢ層下位からの出土である。1と2では差があるので、個別に説明する。

1は破片2点が接合した口縁部破片である。文様は断面三角形で幅1mm前後の横走る並行沈線を付した後、同じ工具による縦走の並行沈線とによって施文され、端部から口唇は寛先斜位押圧によって平面三角形に表出された刻目があり、このような文様がほぼ全周するであろう。小破片であるため全体的な器形は不明であるが、口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部は内外面とも軽く削られ、口唇部は丸味をもつ。器表は、良く撫でられているが、内面は寛での撫でや削りで粗い擦痕をもつ。胎土には砂粒や石英粒と微量の繊維が混入しているが、全体的にみると比較的緻密である。焼成は良好で硬く、色調は明褐色を示す。

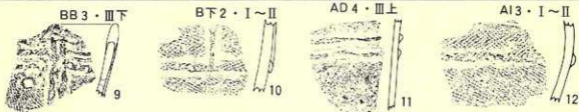
この文様は、口縁端部と斜交する断面丸形の並行沈線(明確でないが押型文の可能性が高い)が付された後、断面丸形の横走る5条の並行沈線が付されているが、間隔は不定である。体部上位にも端部に斜行する断面丸形の並行沈線(押型文か?)が施されている。全体的な器形は不明であるが、口縁部はほぼ直線的に外傾し、器壁は口唇に寄るほど薄くなり、口唇部は外削ぎされるが丸味をもつ。胎土には砂粒・石英粒・少量の繊維を混入し、前の1より全体的に粗い。焼成は非常に良好で硬い。色調は褐色である。

〔第Ⅱ群土器〕 (第37図3～8、PL26)

本群は縄文時代中期末葉に属する土器で、文様の明らかな破片6点を掲載した。出土地点は



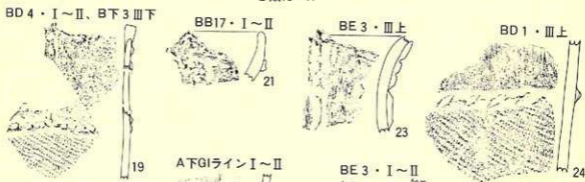
第II群土器



1類 9~12



2類 13~17



18は欠番
1~25 縮尺 $\frac{1}{3}$

3類 19~25

第III群土器

第37図 遺構外の遺物 (土器-1)

BブロックD～Hの1～4が多く、層的にはI・II層とIII層上・下位があり、本来はIII層の遺物であろう。復元された個体はなく、全て破片である。

施文方法をみると、隆帯(4・5・7・8)や隆帯と沈線の組み合わせ(3・6)によって区画され、その部分の縄文を磨消することを特徴としている。しかし、細部について観察すると、必ずしも全てが同じ様相を示してはいない。たとえば、3と6は隆帯と沈線によって施文されているが、3の隆帯は断面が三角形で高く、6のそれは丸形で低い。同じことは隆帯のみで施文される土器にも見られ、4・5と7・8に分けられる。器種はいずれも深鉢であろう。器形を判断できる破片は少ないが、4・5は内湾気味に外傾し、6は頸部で強く窄んだ後、口縁部はほぼ直立する。4・6は波状口縁である。体部の縄文は原体RL横回転(4・5・6)、LR横回転(3・7)があり、8は全て磨消されているため不明である。胎土には比較的少量の砂粒・石英粒が混入し全体的に粗い。3・6は、胎土の中心が灰黒色を示し、焼成は良くない。それ以外の焼成は良好で、色調は3・7が明褐色、その他は褐色で、8には一部に黒斑をもつ。なお、4・5・8の器表には煤の付着がある。

〔第III群土器〕

本群には縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器を一括した。型的には東北々半の十腰内I式、東南北半の戸戸I式や南境式、関東地方の堀の内I・II式等に相当する。該当する土器には、隆帯の貼付による文様と沈線による文様があり、さらに、沈線の太さや隆帯と他の組み合わせに種々の類型がみられることから、それらの特徴によって11類に細分される。

1 類 (第37図9～12、PL-26)

器面に隆帯の貼付による文様を施した土器である。出土地点はBB3～BF2付近に多く、層位的にはI・II層からの出土とIII層からの出土があり、本来はIII層の遺物であろう。出土点数は掲載分のみで他にはない。

隆帯は全て断面丸形で、口縁部と直交や並行するように貼付しており、その上面にはいずれも縄文を付し、さらに、先端が扁平な棒状工具による刺突痕をもつ例(9)もある。また、隆帯は2条並列の場合(9・11)と単列(10・12)の場合がある。器種は鉢か深鉢と考えられ、内湾気味に外傾する器形と推定される。口縁部は波状を示す個体(9)もある。器壁は厚いもの(10・12)と薄いもの(9・11)があり、並列する隆帯が後者で、単列が前者である。体部の縄文は単軸絡糸体斜位回転による燃糸文(9・11)と原体LR横回転や縦回転による不整の羽状縄文(10・12)の2種類がある。胎土には多量の砂粒と若干の石英粒が混入し、9以外は焼成不良である。色調は14が赤褐色で他は褐色である。なお、10～12の器表には煤の付着がある。

2 類 (第37図13~17, PL-27)

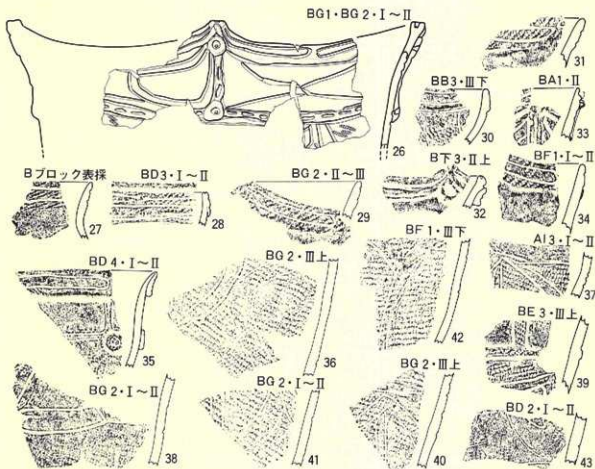
頸部に1条の縄文原体の側面圧痕を付して口縁部と体部を限り、口縁部は全て無文帯にし、その部分に横向き「U」字状の隆帯をもつことを特徴としている。出土地点はBE3とBF3に限定され、層位もⅢ層下位を主としている。出土点数も少なく、掲載した破片が全てである。頸部の縄文原体側面圧痕はLRを使用し、口縁部の「U」字状隆帯には右向きと左向きがあり、隆帯の上面には縄文が付されている。器種は鉢か深鉢で、器形は口縁部が外反するらしい。器壁は比較的薄く、口唇は丸味をもつ。胎土はやや粗く、砂粒や石英粒が混入する。焼成は良好で、色調は明黄褐色(13)、褐色(14・17)、黒褐色(15・16)があり、16・17の器表には煤が付着している。なお、13は二次的な焼成を受けている。

3 類 (第37図19~25, PL-27)

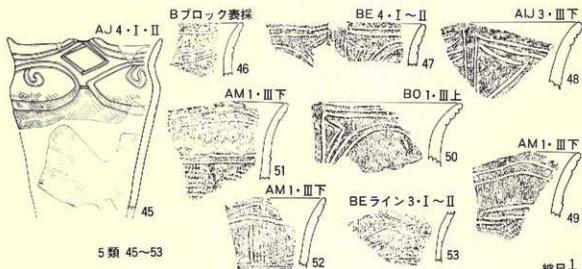
口縁部や頸部に隆帯を貼付した後、隆帯に棒状工具の先端や側面圧痕による刻目を付すことを特徴としている。19~22はほぼ同じ様相を示し、口縁部から頸部に垂下し、棒状工具の先端による刺突痕をもつ断面丸形の1条の隆帯が、直線(19)または蛇行(21)して付されている。頸部には口縁部のそれと同じ一条の隆帯が全周し、口縁部は無文帯となっている。口縁には平縁に小突起のつく波状(19)と山形の大波状(21)の2種がある。23~25もほぼ同じであるが、隆帯の断面が三角形であることと、隆帯の上面が丸棒状工具側面の斜位圧痕による不整間隔の刻目をもつという違いがある。器種は鉢か深鉢と推定され、底部から外傾した体部が、頸部から上位が直立または内傾した後、口縁部上位で外弯(19・20・22~25)や内弯(21)する器形を示すらしい。体部の縄文は全て原体RL横回転による単節斜行縄文である。器壁は前者が薄く、後者が厚い。前者の胎土には多量の細礫・砂粒や微量の石英粒や金雲母が混入している。後者のそれには、砂粒の混入はあるものの前者ほどではなく、全体として細かい。色調は前者が暗褐色で、後者は明褐色を示しており、焼成は前者が非常に良く、後者は不良である。なお、19と24の器表には煤の付着がある。

4 類 (第38図26~43, PL-27)

口縁端部が肥厚する複合口縁を示し、口縁部から中位まで沈線による文様が施される土器である。出土地点はBブロックが中心で、特にBD~BHの1~4で多く出土し、層位的にはI・II層での出土もあるが、Ⅲ層出土が多い。口縁部破片(26~35)をみるといずれも複合口縁ではあるが、26・32・33のように口縁部に縄文をもたない部類と、その他のように縄文を付すものがある。前者の中でも26・33は頸部に垂下する隆帯が付され、26はさらに刺突痕をもつ。この様相は前の3類にも近い特徴である。また、26・32は口縁突起部の口縁端部にボタン状の円形



4類 26~43



5類 45~53

縮尺 $\frac{1}{3}$

第Ⅲ群土器
第38図 遺構外の遺物 (土器-2)

浮文の貼付がある。後者は複合口縁を示し、その部分に縄文をもつ例(27・29・31・34)ともたない例(30)があるものの、いずれも端部に並行する長楕円形か長方形気味の沈線文を付し、この様相は前者の特徴とも共通する。頸部は、30以外は全て縄文をもたず、中には隆帯(26・33)や沈線(35)による区画文をもつ例がある。さらに、頸部にも隆帯(26)か沈線(35)を付して体部と区画する。体部(36~43)はいずれも沈線文で区画され、中には縄文を不規則に消去(37~39・42・43)する例がある。器種は鉢か深鉢と推定されるが、器形は体部が外傾して頸部に最大径をもち、口縁部で軽く窄んだ後、端部で若干外弯する。口縁部は平縁(28・35)と波状縁(26・27・29~34)があり、口唇は丸いもの(27・29・31・34)、角張るもの(28・30)、端部が薄くなりやや尖り気味のもの(26・32・33・35)がある。体部の縄文は原体LRの横回転や縦回転による単節斜行縄文である。胎土には全体的に砂粒の混入が多く、粗い。色調は一部(31・35・40)に黒斑をもつが、暗褐色か褐色を示し、焼成は良好である。

5 類 (第38図45~53、PL-27・28)

体部上位から口縁端部にかけて沈線による文様を付し、頸部から上位には縄文をもたない土器を入れた。これらの土器はA・B両ブロックで出土しているが、AブロックではAJ以南・BブロックではBD・BEに出土の中心がある。出土層位はIII層が多い。文様は体部上位に及ぶ例(45)もあるが、他は頸部まで(49・51・52)である。口縁部はいずれも縄文が消去され、端部にはそれに並行する沈線、頸部には水平に近い2条の並行沈線、その間は2条を単位とする斜行の並行沈線等によって施文される。また、口縁突起部には頸部に垂下する2条の並行沈線が付される例があり(47・48・50・52・53)、この中には、この沈線を挟んで左右対称とする文様を施す例(47・48)もみられることから、46・48・50・53等もほぼ同じ様相を示すものと推定される。器種はいずれも鉢か深鉢と推定され、器形は外傾する体部が頸部で窄まり、口縁部は直線的に外傾したり外弯する。口縁はいずれも波状を示し、45のように山形の場合もある。体部の縄文は原体L縦回転による無節斜行縄文や原体LR斜回転による単節斜行縄文である。胎土には砂粒が多く混入し、比較的粗い、色調は明褐色や褐色を示し、焼成は良好である。

6 類 (第39図54~58、PL-28)

口縁端部から体部まで全面に縄文を付し、頸部~端部まで沈線によって施文される土器である。中には56のように沈線による文様をもたないものもある。出土地点はAI・AJとBE・BFで層位はII層からの出土が多い。文様は54・57・58はほぼ同じ様相を示し、口縁突起部から垂下し、頸部に全周する沈線に接する沈線で大きく区画され、さらに、その中に蛇行する沈線入れている。これらの沈線はいずれも2条を単位とした並行沈線である。沈線は簷先と考えられ

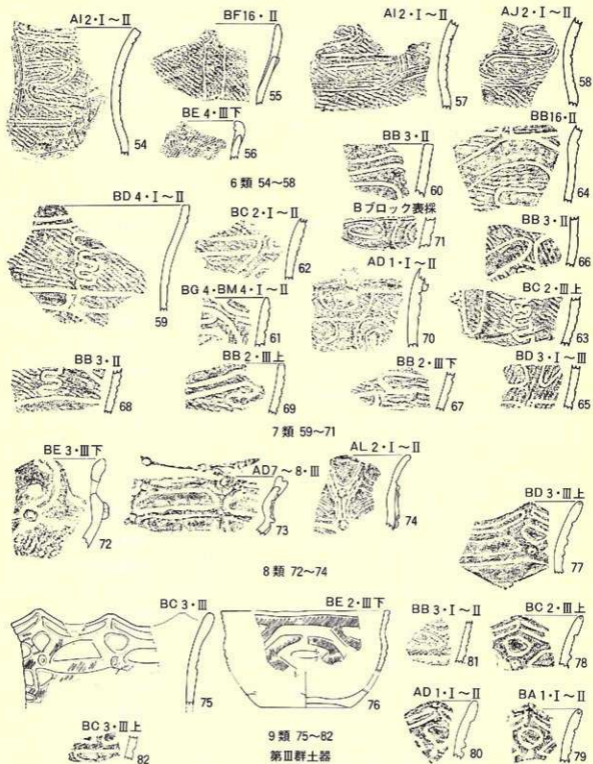
るが、断面丸形でやや粗雑である。器種は鉢か深鉢と推定されるが、器形は体部中位で脹らみ、その上位は頸部まで窄み、口縁部は端部に向かって外弯するもの(54・57・58)と内弯するもの(55・56)等がある。口縁は波状縁で、口唇は平らに撫でられ角張る。縄文は原体R横回転による無節斜行縄文(54・57・58)と、原体LR・RL横回転による単節斜行縄文(55・56)がある。胎土には砂粒の混入が比較的多く、全体として粗い。色調は暗褐色や褐色で、54には黒斑がある。焼成は良好である。

7 類 (第39図59～71, PL-28)

器面に沈線による文様を施し、一部は縄文を消去する土器である。出土地点はBB～BDにかけてが中心で、層的にはⅡ層での出土が多い。器表全面に縄文を付した後、直線や曲線・蛇行線によって施文し、60・61・63・64・66・68・69では区画された部分の縄文を消去している。本類の最も特徴とすることは59・63・68・69のように蛇行する沈線にある。器種は鉢や深鉢と考えられるが、体部中位に脹らみをもち、その上位で窄んだ後口縁端部に向かって軽く外弯する。口縁には平縁(59・60)と波状縁(61・69)があり、突起部は山形を示す例(69)がある。口唇は平らで角張るもの(59・60・69)と丸味をもつもの(61)がある。体部の縄文は原体Rの無節斜行縄文(59・64・66～69)と原体LR縦回転による単節斜行縄文(61・65)がある。胎土には比較的砂粒の混入が多く、全体的に粗い。色調は暗褐色～褐色まであり、64・67には黒斑をもつ。焼成は良好である。

8 類 (第39図72～74, PL-28)

沈線と隆帯によって施文され、隆帯の分岐点や屈曲点に刺突痕をもつ土器を入れた。出土量も少なく、地点もまとまりがない。層位にはⅡ・Ⅲ層があるものの、本来はⅢ層の遺物であろう。文様の特徴は既述のとおりであるが、73・74ともに隆帯と沈線が組合う所謂隆沈線で文様が付され、さらに、74では沈線のみ施文もある。72は必ずしも隆沈線ではないが、取り合えずここに入れた。73・74の口縁部は、端部から「Y」字状に垂下し、頸部の隆帯に接する隆帯によって区画され、その内部は73が無文、74は直線や曲線の沈線によって施文される。72の文様は隆帯のみで付されている。頸部から口縁部はいずれも縄文を付していない。器種は鉢(73?)か深鉢(72・74)と推定される。器形は三者三様であるが、72・74は肩部が脹らみ、頸部で窄んだ後口縁部に向かって外弯する。73も基本的には他の2点と同様であるが、屈曲の程度が大きい。口縁は波状縁を示すもの(72・74)と平縁に小突起のつくもの(73)があり、前者では窓をもつもの(72)もある。体部の縄文は原体RL縦回転による単節斜行縄文である。胎土には砂粒の混入がやや多く、粗い。色調は暗褐色で、焼成は良好である。



第39図 遺構外の遺物 (土器-3)

54~82 縮尺 $\frac{1}{3}$

9 類 (第39図75～82、PL-28)

器面を沈線で区画した後、その区画内の縄文を消去する土器群である。出土地点はBA～BEの1～3の範囲で多く出土し、Aブロックからは1点の出土である。出土層位はI層からIII層までであるが、III層からの出土が多い。中には無文部分を低くし、縄文施文部を隆起帯とする個体がある(75・77～82)。沈線での区画には円形・楕円形・長楕円形等各種あり、常に2条が並行するように付されている。器種は鉢(76)と深鉢(75・77～80)がある。器形は、底部から外傾した体部が、頸部から口縁部にかけて外弯するもの(75)と、肩部で脹らみ、頸部で窄んだ後口縁部が軽く外傾するもの(76)がある。胎土にはいずれも砂粒の混合が多く粗いが、焼成は良好である。77は暗褐色を呈するが他は明褐色である。なお、78～80は二次的焼成を受けているし、77の器面には煤の付着がある。体部の縄文は、原体LR横回転による単節斜行縄文である。

10 類 (第40図83・84、PL-29)

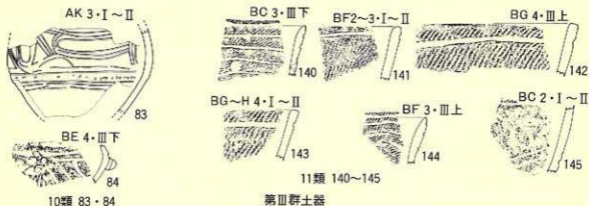
無文の器面に多条の並行沈線によって文様を施す土器を入れた。出土地点はAK3・BF4で、出土層位はII層とIII層である。83の場合は最大径の位置に刺突痕が全周し、84では最大径の部分に横長の小突起が貼付され、上下に貫通する円孔が穿たれている。器種はいずれも壺と考えられる。胎土には砂粒の混入が多く粗い。色調は明褐色を示し、焼成は良好である。

11 類 (第40図140～144、PL-31)

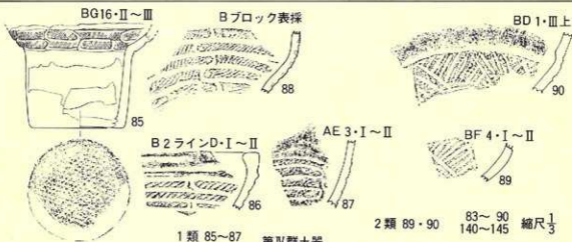
縄文施文部に並行沈線や単沈線のみによって文様を付す土器であるが、141・145は一部に縄文の磨消による無文部がある。出土地点はBC～BHの2～4に限定され、層位的にはII層とIII層上位からの出土が主である。器形が定かでないので器種は不明であるが、鉢か深鉢と推定される。口縁部は外傾(141～143)か外弯(140・144)し、口唇は先細りとなり尖り気味のもの(140・144)と平らに撫られやや角張るもの(141～143)がある。体部の縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文であるが、141・142・144の原体は0段多条である。胎土には砂粒の混入が比較的多く、全体として粗い。焼成は良好で、色調は明褐色や暗褐色を示し、142の器面に煤の付着がある。

〔第IV群土器〕

本群には縄文時代後期中葉に属する土器を入れた。土器型式では十腰内II式・宮戸II式・宝ヶ峰式・加曾利B式等に相当し、本遺跡から出土した土器の主体を成しており、検出遺構の所属時期と同時期の土器である。特徴は沈線による区画と磨消縄文にある。しかし、全てを概観す



第Ⅲ群土器



第Ⅳ群土器
第40図 遺構外の遺物(土器-4)

ると沈線の入れ方、区画帯の形、刻目帯等に種々の型態があり、それぞれの特徴によって7類に細分される。

1 類 (第40図85~88、PL-29)

縄文施文部に並行沈線を付し、さらに、縦位に蛇行する沈線で区画したり(88)、沈線をほぼ同じ位置で折り返すことによって並行沈線を付すもの(87)や、沈線で楕円形の区画をして並行沈線を表出する(85)等の文様を付す土器で、いわば、大きく蛇行する並行沈線にその特徴がある。出土地点は調査区域ほぼ全面といえるが、量的には少ない。層位は表採からⅢ層までであるが、本来はⅡ層の遺物であろう。沈線はいずれも丸棒の先端で引かれ、88では蛇行線の凹部1ヶの円形刺突痕を付している。全体的な器形が定かでないが、器種には深鉢(85・88)と鉢(86・87)があるらしい。なお、85の底部には網代痕がある。86・87では縄文施文部の上位に無文部がある。86の口縁は平縁で、端部が肥厚し口唇は平らに撫でられる。体部の縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文であるが、いずれも0段が多条の原体である。胎土には砂粒や

石英粒・黒色火山ガラス等の混入がやや多く、全体的に粗い。色調は褐色（85・86）と暗褐色（87・88）があり、焼成は良好である。

2 類 （第40図89・90、PL-29）

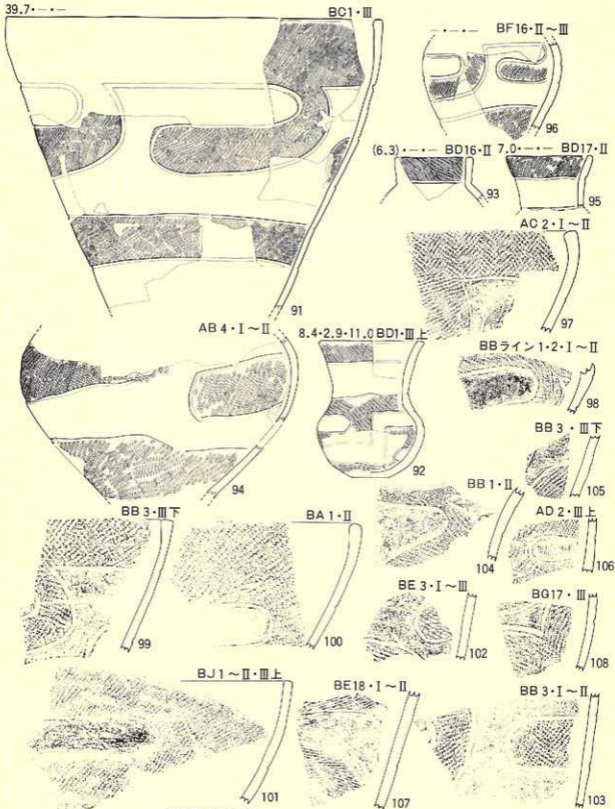
縄文施文部に、ある位置で方向を替える多条並行沈線を付し、全体が綾杉状沈線に近似した沈線をもつ土器である。BD 1 と BF 4 から出土しているが、量は少なく掲載した 2 点が全てである。沈線を付した工具は篋先と考えられ、縄文施文部の上位には無文部をもつ。器種は定かでないが、1 類の 88 に近似する。体部の縄文は原体 L の無節斜行縄文である。胎土には砂粒・石英粒・黒色火山ガラス・金雲母等が混入するものの、比較的緻密である。色調は褐色で、焼成は良好である。なお、内面に煤の付着がある。

3 類 （第41図91～108、PL-29・30・31）

縄文施文部を直線や曲線で区画し、区画部分の縄文を磨消する土器で、本遺跡から出土した土器の中で量が最も多い。調査区域全体で出土しているが、遺構密集地での出土が多い。層位は表採～III層までであるが、II層とIII層上位からの出土が最も多く、本来はこの層に含まれる土器であろう。沈線による器面の区画は、93・95以外の個体はいずれも 2 条の並行沈線による「L」字状で、区画内の縄文は磨消される。93・95の場合は横走する 2 条の並行沈線が単に全周する無文帯を表出している。量的には前者が多い。器種は深鉢（91・97・99～108）と壺（92～96）があり、さらに、壺には大小がある。体部の縄文は原体 LR や RL 横回転による単節斜行縄文と、原体 LR や RL の縦横交互回転による縦位羽状縄文（97・99・103・108）があり、そのいずれにも 0 段多条の原体が多用される。また、107 は原体 L の無節斜行縄文である。胎土には全て砂粒の混入が比較的多く、全体的に粗い。色調には明褐色（93・99・106・108）、褐色（101）、暗褐色（98・100・102～105）があり、焼成は良好である。なお、103 は二次的な焼成を受けている。

4 類 （第42図109～133、PL-30・31）

口縁端部や頸部に、沈線区画された刻目帯をもつことを基本としているが、刻目帯がなくとも同じ形状を示すものや体部に羽状縄文を付すものはとりあえず一括した。Bブロックでの出土が圧倒的に多く、特に飛び地調査区での出土が多く、住居跡から出土した土器にも本類がある。出土層位は I 層から III 層までであるが、本来は II 層から III 層上位に含まれる土器であろう。体部の文様には L 字形の無文帯が付されるもの（109・110・112・116～118）と木葉文的な縄文施文部をもつ（115）ものがある。頸部には刻目帯をもち、口縁部下半に無文帯を表出し上半は

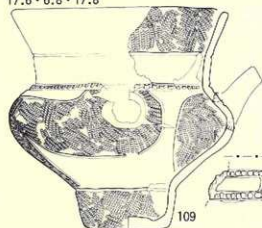


第IV群土器3類

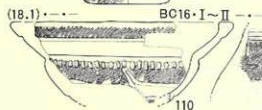
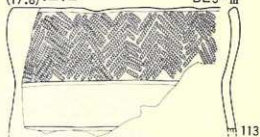
第41図 遺構外の遺物 (土器-5)

91~108 縮尺 $\frac{1}{3}$

17.6・6.8・17.8



(17.8)・---



B2ラインOH・I~II



BD16・II



BG 3・III下



--- BG15・III



BD4・---3.4---BA16・I~II



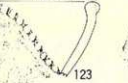
---3.6---BC17・II



BD15・II



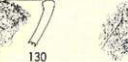
BD4・I~II



BA2・II



BF15・II



13.0・--- BF15・BE16・II~III



---(16.0)--- BF15・II



BB1・III上



BD16・II



BB3・III下



BF15・III



AG2・I~II



Bブロック表採



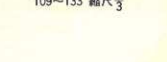
BG17・III



BG17・III



BF15・III



第IV群土器4類
第42図 遺構外の遺物 (土器-6)

109~133 縮尺 $\frac{1}{3}$

縄文施文帯とするもの(109・110・113・119・120)と、口縁部全体を無文にするもの(130～133)、さらに、無文帯の端部を刻目帯とするもの(122～127)、口縁部下半に縄文を付し上半を無文帯とするもの(128・129)等がある。器種には注口土器(109)・鉢(110・122)・壺(114～117)があり、明確ではないものもこのいずれかに該当するであろう。器形はそれぞれによって差が大きいため一概に言い切れないが、口縁が平縁のもの(109・110・112・113・125・128・129)と波状縁を示すもの(122～124・126・127・130～133)があり、口縁端部が肥厚し口唇が平らになるもの(110・112・123・124・126・129～133)と肥厚せず丸味をもつもの(109・113・122・128)等がある。体部の縄文は原体LR縦横交互回転による羽状縄文(109・112～117・128・129)、原体LR・RL縦回転による縦位羽状縄文(113)、原体LR・RL横回転による単節斜行縄文(110・118)、原体L横回転による無節斜行縄文等があり、0段多条による羽状縄文が多用される。なお、無文部はいずれも磨消縄文である。胎土は砂粒の混入が比較的多く、全体的に粗い。色調は多様であるが、明褐色・褐色・暗褐色等があり、一部に黒斑を残す例がある。焼成はいずれも良好である。なお、123・125・128の器表には煤の付着がある。

5 類 (第43図134～136, PL-31)

口唇に突起のつく波状口縁を示し、口縁端部に2条の刻目帯を付すとともに、縄文施文部に区画による無文帯をもつ土器である。しかし、器形が定かでないため、器種等の詳細は不明である。体部の縄文はいずれも0段多条による原体RL縦横交互回転の羽状縄文である。口縁端部は肥厚し、口唇は若干丸味をもっている。胎土・色調・焼成は前類と同じである。



6 類 (第43図137～139, PL-31)

器表全体に縄文が付された後、沈線で区画してその部分の縄文を磨消し、縄文施文部に区画
27 沈線と並行する丸棒先端斜位刺突による列点文を付す土器である。出土量は少なく、掲載した

3点が全てである。器種・器形とも定かでないが、口縁端部が軽く肥厚し、口唇は若干丸味をもつもの(139)と平らで中央に沈線をもつもの(138)がある。体部の縄文は細い原体LR横回転による単節斜行縄文である。胎土には多量の砂粒が混入し粗い。色調には明褐色と暗褐色があり、焼成は良好である。

7 類 (第43図146~148, PL-31)

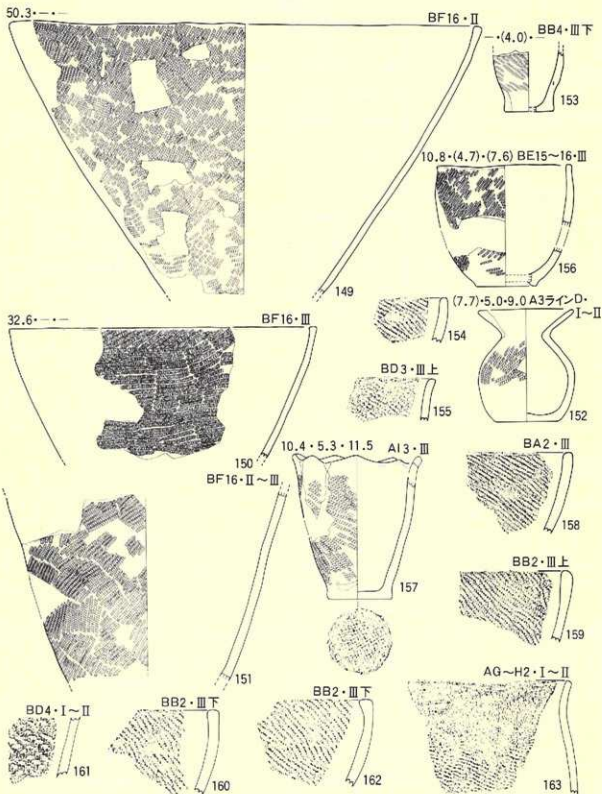
体部に入細文風の無文区画帯をもつ土器であるが、出土量は少なく掲載した破片が全てである。出土地点はAD7・8、BEF3・4で、層位はII層とIII層である。器形が定かでないので器種は不明であるが、鉢か深鉢(146・147)や壺(148)と推定される。体部の縄文は原体LR・RL横回転による単節斜行縄文である。胎土には比較的少量の砂粒が混入し、粗く、特に148が顕著である。色調は黒褐色(146)、暗褐色(148)、明褐色(147)で、焼成は良好である。146の器表には煤の付着がある。

(第V群土器)

器面に縄文や櫛椀文のみが付された土器で、一般的に粗製土器と呼ばれる類である。出土地点や出土層位は、調査区域全体にほぼ散在する在り方を示している。該当する土器の縄文に種々の種類があることからそれによって細分されている。

1 類 (第44・45図149~179, PL-32)

器表に斜行縄文を付す土器であるが、この中には無節(153・167)と単節斜行縄文(149・151・152・154~166・168~179)、摺り戻し縄文(150)、複節斜行縄文(166)等があり、さらに、縦回転(153・155・161・166・169・170・179)と横回転(前記以外の破片)による施文がある。特に179は口縁部(横回転)と体部(縦回転)で回転方向を変えている。また、157・173・174では口唇にも縄文が施文されているし、174・175は頸部の縄文が磨消されているが、沈線による区画はない。なお、151・158・162~164・168・173・174の原体は0段が多条である。176~179の口縁部は折り返しか粘土紐貼り付けによる複合口縁である。器種は深鉢(149~151・153・156・161)と壺(152)があり、他の破片もそのいずれかであろう。器形には大小があるばかりでなく、口縁部が内湾するもの(149・151・156・162~165)と外湾するもの(161・167・169・173)や頸部が窄んだ後外湾するもの(167)等があり、口唇は平らなもの、丸味をもつもの、口縁端部が肥厚や薄くなるもの等の種類がある。胎土の調整には種々あっても一概に平均化できないが、全体的に砂粒の混入が多く粗い傾向がある。焼成は比較的良いが、色調は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色等があり、163・167・179の器表には煤の付着がある。

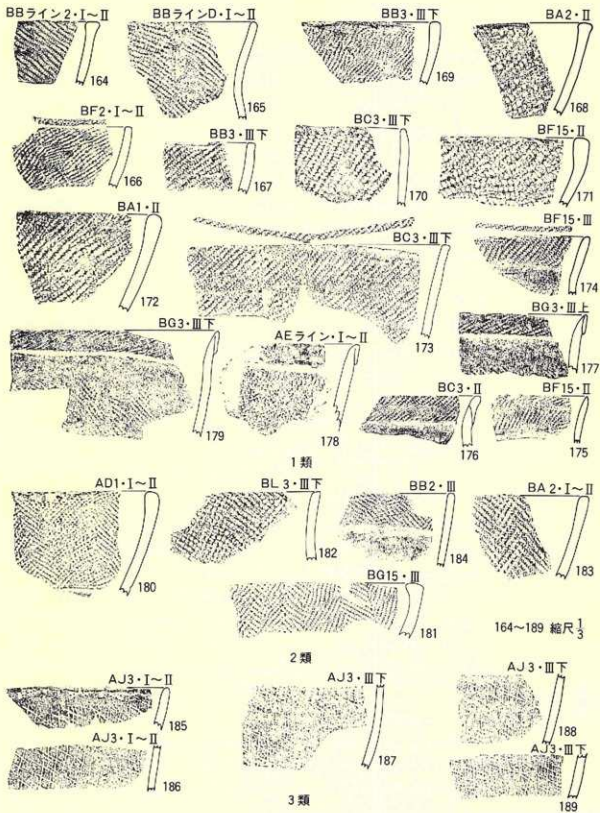


第V群土器1類

第44図 遺構外の遺物 (土器-8)

151~163 縮尺 $\frac{1}{3}$

149~150 縮尺 $\frac{1}{4}$



第45図 遺構外の遺物 (土器-9)

2 類 (第45図180~184, PL-32)

羽状縄文の付された土器であるが、量は少ない。使用されている原体にはLR (180・181) と RL (182~184) があり、いずれも縦横交互回転による羽状縄文の表出である。184は頸部に浅い沈線をつけて区画し、縄文を磨消している。180も184と同じ様相を示しているらしい。器形が、内弯する口縁 (180・181・183) と外弯する口縁 (182) や直線的に外傾する口縁 (184) があることからすると、器種は深鉢か鉢になるものと推定される。口唇には口縁端部が肥厚して若干丸味をもつもの (180・181・183) と単に丸味をもつもの (182・184) がある。胎土には比較的多量の砂粒が混入し粗く、色調は明褐色や暗褐色・褐色等があり、180と183の器表には煤の付着がある。焼成は良好である。

3 類 (第45図185~189, PL-33)

単軸絡糸体横回転による網目状撚り糸文の付された土器であるが、出土量は少ない。本書に5点掲載したが、直接接合しないものの同一個体の破片である可能性が大きい。使用され原体は撚りの弱いLで、芯棒に時計回り方向で端から端まで巻きつけ、さらに、時計逆回り方向に巻き戻したものである。器種は深鉢であり、器形は体部に若干の脹らみをもち、口縁部が軽く外傾する。胎土には砂粒が混入しているが、比較的緻密な粘土を使用し、一部に黒斑をもつ (186・188) が、色調はほぼ明褐色で、焼成は良好である。

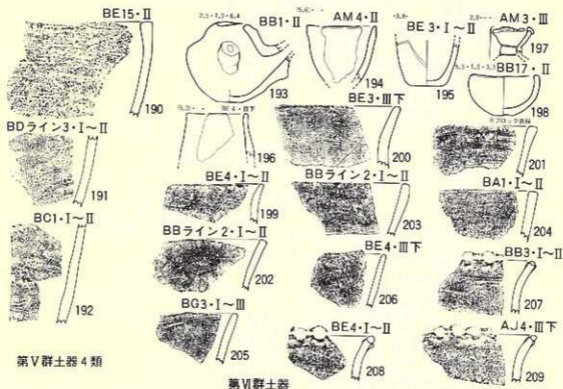
4 類 (第46図190~192, PL-33)

器表に条線による地文をもつ土器を一括した。掲載した3点が全てである。190は器面を粗く・強く剝削した後、細い棒状工具の先端と考えられる単沈線による並行条線が付されている。191・192は器面が良く撫でられた後、櫛歯状工具による平行条線が付されている。後者の2点は同一個体の破片である可能性が大きい。器形は内弯する口縁部 (190) と、直線的に外傾 (192) か内弯気味に外傾する体部であることから、器種は深鉢であろう。190の胎土に多量の粗砂や砂粒が混入した非常に粗い粘土である。焼成もあまり良くなく脆い。191・192は砂粒の混入があるもののやや緻密な胎土で、焼成も良好である。色調は、190は暗褐色で他は褐色である。

【第VI群土器】 (第46図193~209, PL-33)

器面に縄文や条線等による地文や装飾を全く持たない無文土器を一括した。器種は注口土器 (193)、壺 (196・197)、小型鉢 (198)、小型深鉢 (194・195) があり、その他の破片は明確にしがたい。実測された193~198以外は器形も定かでないが、199・200・207~209のように外弯する口縁部と、201・202・204~206のように直線的に外傾するもの、203の内弯気味に外傾等種

々みられる。また、207～209の口縁端部は、口唇が丸棒側面圧痕による小起伏をもつ小波状縁となっている。器面調整も種々あり、研磨されるもの（200・201・203・205）や横撫で状の擦痕をもつもの（207～209）等まちまちである。胎土の調整や焼成、色調ともに第V群土器のそれと同様である。

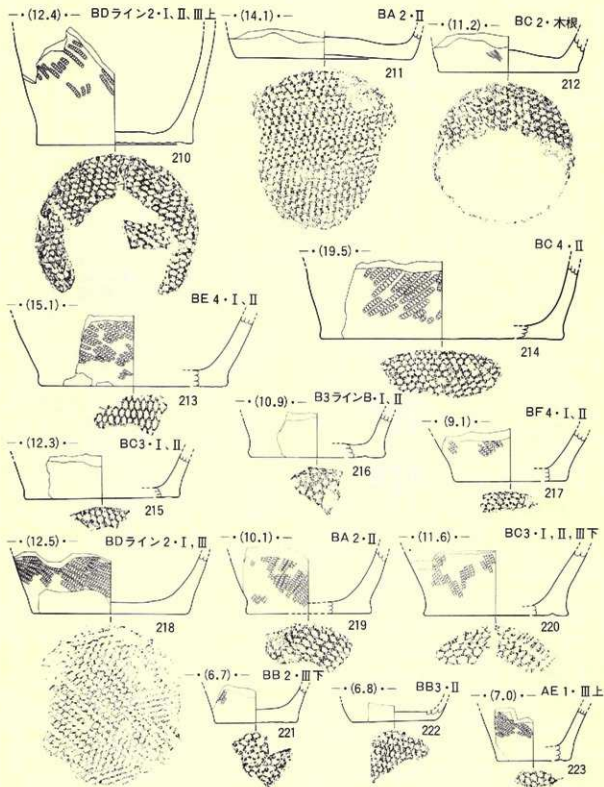


第46図 遺構外の遺物（土器-10）

〔底部〕 (第47～50図210～262、PL-33～35)

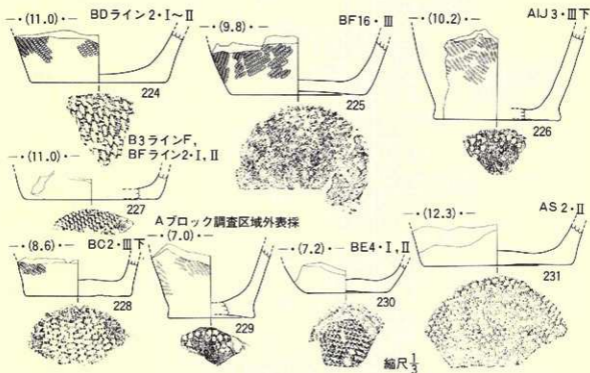
遺構外から出土した土器の底部破片は260点弱であることは既述のとおりであるが、本報告書には53点掲載した。その中には網代痕（210～231）22点、木葉痕のもの（232～244）13点、無文のもの（245～262）18点が含まれており、網代痕や木葉痕をもつ底部は可能な限り図化して掲載したが、無文のものは残存程度の良好な個体を選択した。

底部全体を残存する個体が3点（212・218・238）のみであるため、正確な底径を示し得ないが、残存部から推定される底径には4cm台1点、5cm台1点、6cm台2点、7cm台3点、8cm台1点、9cm台6点、10cm台3点、11cm台3点、12cm台7点、13cm台3点、14cm台2点、15cm台1点、16cm台1点、19cm台1点があり、9cm台と12cm台に集中する傾向が観察される。器種も定かでないが、253は皿形か浅鉢形と推定される以外は、全て鉢形か深鉢形もしくは壺形であろう。体部の縄文が底面付近まで付される例は245・246・250の3点のみで、他は体部下端



縮尺 $\frac{1}{3}$

第47図 遺構外の遺物 (土器-11)



第48図 遺構外の遺物（土器-12）

に無文部を残している。縄文は原体LRやRLの縦横回転による単節斜行縄文が主体で、1点のみ(226) L縦回転による無節斜行縄文がある。縄文が残っていない個体も多い(211・212・215・216・222・230・231・234・235・238・239・242)が、欠損部分も無文であったかは不明である。

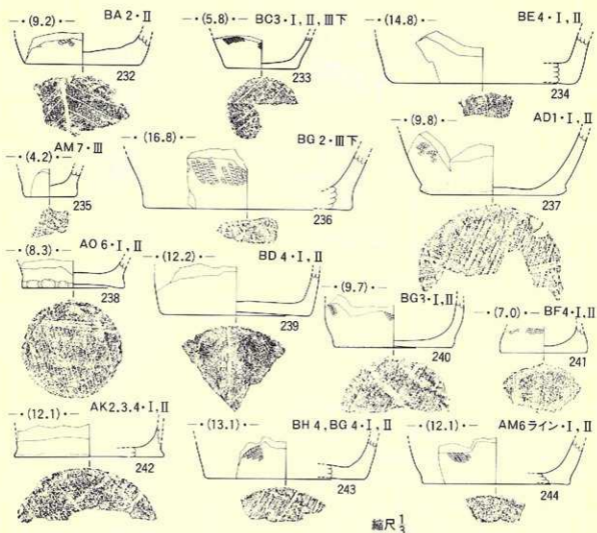
網代痕はA型・B型・C型(まとめて詳述する)の3種類に大別され、その中ではA型が最も多い。また、A型は1類と2類に細分され、A1型が主体である。C型は1点のみで最も少なく、B型は4点、A1型28点、A2型3点の出土である。木葉痕には広葉樹の中でも朴とか柏の葉のように葉脈が隆起して明瞭な樹種の葉を使用したもの(232~235)4点と笹の葉とおもわれるもの(236~242)9点に細分されるが、正確な樹種は不明である。

2. 土製品

遺構外から出土した遺物の中で土製品と分類されたものが27点ある。器種と出土点数は、土器片円盤24点、土製円盤1点、土偶1点、異形小型片口土器1点で、以下にその概要を記す。

〔土器片円盤〕 (第51図ル~エ、PL-35・36)

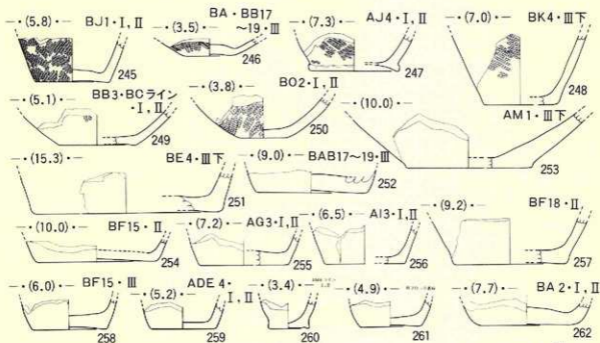
24点の出土であるが、製作技法をみると、土器片の周囲を打ち欠いて円形~楕円形に整形す



第49図 遺構外の土器 (土器-13)

ることを基本としているらしいが、全体をみると略方形のもの(カ)や長楕円形のもの(ノ・ワ・イ・オ・ヤ)・略円形のもの等があり、規則性がないという表現が実態に相応しい。また、周縁を打ち欠いただけのもの(ル・カ・ヨ・レ・ソ・キ・オ・ヤ・ケ・ゴ・エ)と磨ってさらに調整するもの(ヲ・ワ・タ・ナ・ラ・ム・ウ・ノ・ク・マ・ツ・ネ)に細分される。

大きさには縦・横ともに径2cm台から5cm台までみられ、中でも3cm台と4cm台が全体の80%弱を占めている。厚さは使用した土器片の厚さに制約を受けるわけであるが、計測値では0.5cm~1.3cmの範囲に入り、0.6cm~0.8cmが最も多く85%弱の20点が該当する。重さをみると、最小4g台から最大36gまでであるが、ある重さに集中する様相はない。強いて言えば9g台の5点がまとまりを示すのみで、他はいずれも1点か2点該当するだけである。



縮尺 $\frac{1}{3}$

第50図 遺構外の遺物（土器-14）

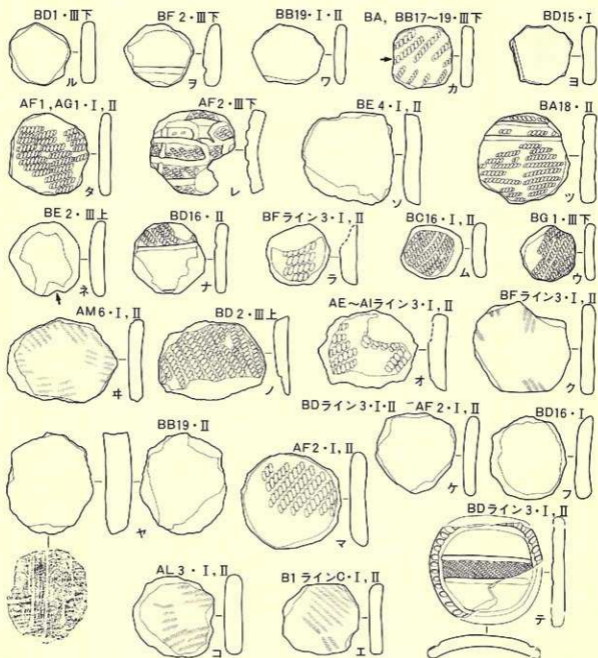
使用された土器片の部位をみると、ヤの底部以外は全て体部破片で、無文のもの、縄文を付すもの、縄文と沈線をもつもの、無文と沈線のもの等の種類があることを考えると、元の土器が粗製土器だけではなく、文様を付した精製土器の破片も使用されたことを示している。特にレの器種は浅鉢形の頸部破片と推定されることから、それを窺える。

使用方法を示す状況は観察されていないが、カ・ネは紐がかりと思われる凹み部（実測図の矢印の部分）を持つことから、錘的な使用形態が想像されるが、他の個体では観察されないことからすると、全てを同様に理解することはできない。

〔土製円盤〕 (第51図テ、PL-36)

土製円盤としたのは、製作当初から円盤を意識して作られたものに限定したが、該当するのは1点だけである。全体の約1/3を欠失しているが、図上で推定される大きさは縦約4.4cm、横5.9cm、厚さ0.5cmで重さは19gである。全体が略円形を示すと推定され、実測図の左右が内面に向って弯曲している。外面は、周縁に沿う沈線によって縁取りされ、その縁は丸棒側面圧痕による刻目が充填される。縁の内側は横位で並行する2条の沈線で3分割され、中位の区画帯には原体RL横回転による単節斜行縄文が付されている。上位と下位の区画帯は横方向の撫でによって研磨される。内面の調整は外面のそれより粗雑で、簡単に撫でられているのみである。

使用方法を示す状況は観察されない。



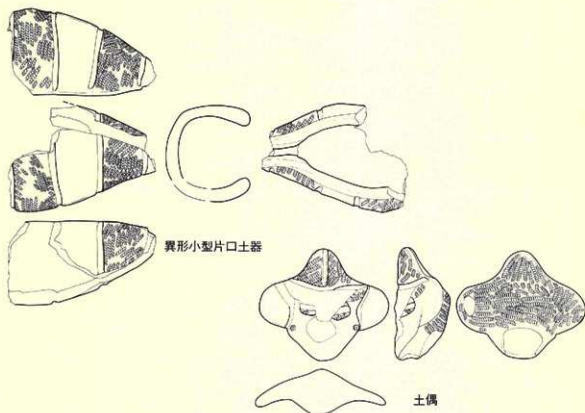
→ 印は紐掛り状の凹部を表す

テ 土製円盤, ル~エ 土器片円盤 縮尺 $\frac{1}{2}$

第51図 遺構外の遺物 (土製品-1)

〔異形小型片口土器〕 (第52図ア、PL-36)

異形の小型片口土器である。残存部分から形態を推定すると、口縁部の平面形が扁平な長楕円形を示し、一端に片口状の突起が付く。底部は残存状況があまり良くないので定かでないが、



第52図 遺構外の遺物（土製品-2）

丸底を示すらしい。また、体部下端に最大径をもち、体部から口縁端部へは軽く内湾しながら移行しており、片口状の突起部には注ぎ口状の溝が付されている。大きさは、残存最大長約8.3cm、口縁端部径約4.5cm、残存最大高約5.5cm、片口残存部幅約2cm、片口残存部高約2.0cm、片口部溝上幅約1.0cm、片口部溝深1.0cm、体部残存最大径約4cmである。器表には片口部の境と体部3ヶ所に並行沈線を付して区画し、一部の区画帯の縄文を磨消している。付されている縄文は原体LR縦・横交互回転による羽状縄文である。器面調整は内外面とも良く撫でられ良好である。器表の色調は暗褐色であるが、胎土そのものは明褐色を示し、焼成は良好である。

〔土 偶〕 （第52図サ、PL-36）

頭部のみを残存する土偶が1点出土している。大きさは、最大幅約7.2cm、残存高約6cm、厚み約3.3cmで、額・目の一部・鼻・口が剥落している。形状は、頭そのものは丸く仕上げ、左右の側頭部と頭頂部（額の上）に半円状の翼形を示す扁平な突起をつけている。これは、おそらく毛髪を鬚状に結った形を示しているのであろう。顔面と鬚状の突起部とは浅い沈線で限られ、頭頂部の突起には0段多条の原体RL縦回転による単節斜行縄文を付した後、中央に縦位の

沈線を入れている。側頭部の突起部は左右とも良く研磨され、無文である。顎は若干尖るような丸味をもち、軽く前に突き出ている。眉や目・鼻・口が剥落していることは、平滑な顔面に粘土を貼付して表現したことを表している。一部残存する眉は隆起帯で表現され、縄文を付している。目も眉とほぼ同じ状況を示すが、中央に横位の単沈線を付して表現している。耳は写実的な表現はないが、耳の位置に相当する部分に左右各1個の円文が付され、耳飾りを着装した状況を示しているであろう。裏面の後頭部は丸く隆起させることによって表出し、全面に0段多糸の原体RLによる不整方向の単節斜行縄文が付されている。頸は比較的太く作られた模様で、径2.5cm×2.0cmの楕円形である。

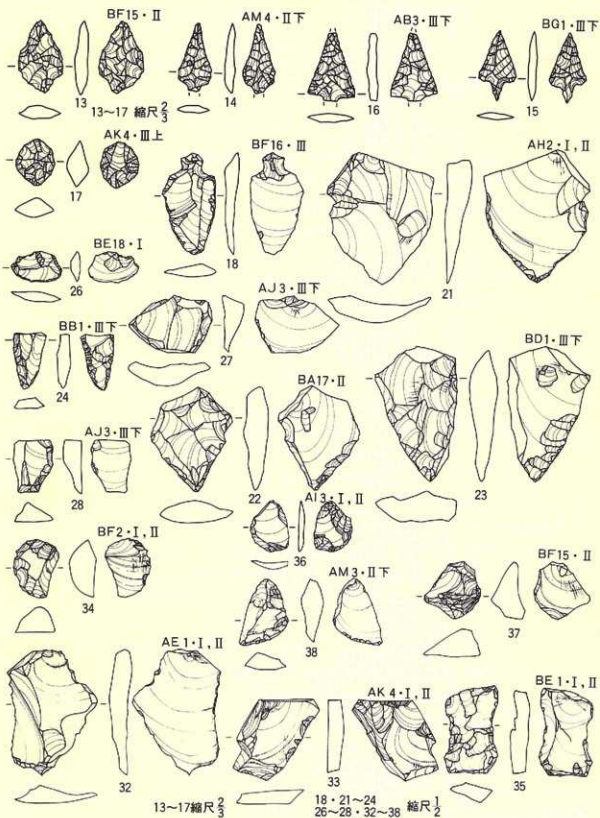
胎土は土器のそれと大差がなく、大同小異であるが、火山ガラスや石英粒の混入が比較的多い。色調は褐色を示し、焼成は良好である。

3. 石 器

本遺跡から出土した石器は全体で79点であるが、その中に遺構に共伴しない石器が39点ある。器種としては石鏃・石匙・切削器・削器・磨製石斧・凹み石・磨り石・石錘があり、量的に少ないことから、剥片の周縁部に刃割れをもつものは使用による欠損と認定し、使用痕のある剥片として掲載した。以下に器種ごとに記すが、計測値や石質等の個別的な記録は第5表に一括して示した。一覧表の遺物番号と図版や写真中の遺物番号は共通している。

〔石 鏃〕 (第53図13~17、PL-37)

5点の出土である。17は石鏃として定形的な形態を示していないが、とりあえず本種に包括しておく。調査範囲ほぼ全域に散在する出土状態であるが、層位的にはII層とIII層に限定される。5点の中で完形は13・15・17の3点で、14・16は茎部と先端部を欠失している。型としては無茎型(13・17)と有茎型(14~16)があり、さらに、無茎型には凸基のもの(13)と円基のもの(17)がある。大きさは、全体形の比較では欠損部も加味すると16が最大で、次いで13・14・15・17の順になる。しかし、茎部を除いた身の部分だけで見ると、13~15はほぼ2cm前後と大差がない。成形や調整をみると、14~16は茎部・側縁部とも両面に入念な剥離がなされ、ほぼ左右対称となる形に仕上げ、特に15・16の場合は先端部を頂点とする二等辺三角形状を示している。14・16の茎部も15に近い形状に作り出されたであろう。13の形状はあまり良好とは言えないが、周縁全体が両面剥離で調整されている。17の場合も剥離調整は他の個体と同じであるが、他に比して中央部が厚く仕上げられている。既述のとおり、石鏃とするには形状に問題があるが、他の器種とも異なる要素を具備しているため、本種に一括した。なお、13~16の



第53図 遺構外の遺物 (石器-1)

表裏両面にはアスファルト状の固形物が付着しており、矢柄との装着方法を示唆している。石質は全て北上山地古生界より産出したチャートである。

〔石 匙〕 (第53図18、PL-37)

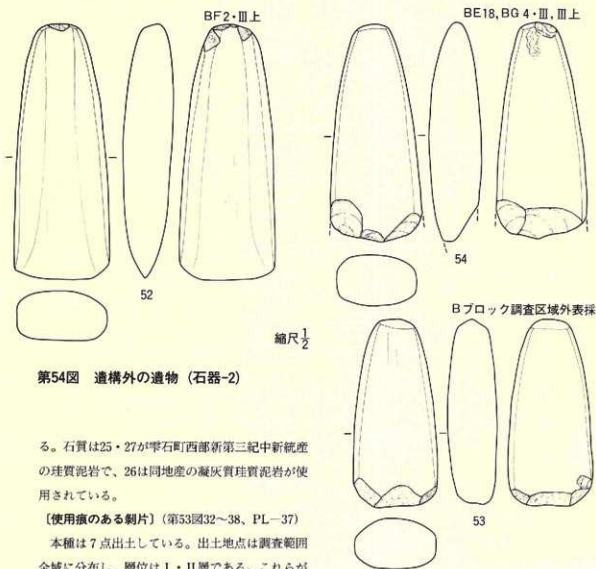
BF16の第Ⅲ層から1点出土している。大きさは全長5.3cm・最大幅2.7cm・厚み6.9cm・重さ7.8gで、形態的には縦形左刃型を示す完形である。形状は、先端に向かって次第に幅が狭くなり、断面が扁平な不等辺三角形の縦長剥片を使用し、抓み部は打瘤部を両側縁からの両面剥離による挟り込みによって作り出し、刃部は両側縁に表面への微細な剥離によって調整され、刃部角は比較的鋭角である。裏面への剥離は全く行われず、一次剥離面を残している。なお、抓み部には両面にアスファルト状固形物の付着がある。石質は平石西部第三系中新統の産といわれる珪質泥岩である。

〔切削器〕 (第53図21～24、PL-37)

調査範囲全体に散在する出土状態で4点出土しており、層的にはⅠ層からⅢ層までである。形態的にみた場合には所謂不定形石器の部類に入るが、22・23は大小の差はあるが、形・剥片の利用方法・刃部調整が非常に良く近似し、21もほぼ同じような状態を示している。24の形状は前三者と異なり、細い縦形石匙の先端部に近いが、石匙とする積極的な状況でもないので、とりあえずここに入れておく。21～23は打点と打瘤を残し、ほぼ左右対称になる剥片を使用し、22・23では左側縁部を使用刃部とし、21の場合は両側縁を使用している。22・23は右側縁にも剥離調整があるが、これは厚味を落す形態調整のための剥離とおもわれ、刃部を作り出したものではない。刃部の剥離をみると、21・22は裏面への片面調整のみで、23もほぼ同じであるが、表面へも若干入っている。なお、23の原石の表面(実測図での自然面)には剥片を剥ぎとったような痕跡が観察されるが、自然面は厚さ約2mmの風化膜が覆っており、相当の年月を経ていることを表わしている。少なくとも、本石器を作るための加工痕とは全く異なる剥離痕であることは明白である。24は断面が偏台形を示し、先端に向かって先細りとなる剥片を使用しているが、頭部を折損している。刃部は左側縁を両面、右側縁を裏面のみに剥離することによって作り出しているが、左側縁の剥離はやや粗雑であるし、右側のそれは押圧によるとおもわれる微細な剥離である。先端部は左から右側縁に二度の剥離痕があり、彫刻刀的要素ももっている。大きさは24を除外すると長さ5.5cm～7.1cm、最大幅4.05cm～5.7cm、厚さ1.3cm～1.15cm、重さ23.9g～43.21gと比較的大型である。石質は、北上山地古生界産のチャートや奥羽山地新第三系中新統の玻璃質流紋岩・凝灰質珪質泥岩である。

〔削器〕 (第53図25~27、PL-37)

3点の出土と量は少ないが、調査範囲全体に散在する出土状況を示し、層位は第I層と第III層下位である。形態的には不定形で、裏面から表面への片面剝離によって刃部を作り出している。25・26は剝片の打縮部分を除去して側縁部(26)や周縁部(25)に刃部を作るという共通点がある。27は自然面を残す断面不等辺三角形の縦長剝片の右側縁から先端部にかけて刃部を付し、裏面からの加圧によって折断されている。刃部角は25・27が比較的鈍角で、26は前者より若干鋭角である。特に25の刃部は鈍角であるとともに裏面からの加圧による磨滅痕を示し、表裏両面に手擦れによる光沢面をもっている。大きさには大小があり、形状とともに不定であ



第54図 遺構外の遺物 (石器-2)

る。石質は25・27が堺市町西部新第三紀中新統産の珪質泥岩で、26は同地産の凝灰質珪質泥岩が使用されている。

〔使用痕のある剝片〕(第53図32~38、PL-37)

本種は7点出土している。出土地点は調査範囲全域に分布し、層位はI・II層である。これらが

全て使用中の刃毀れであるかは定かでないが、34～38の周縁部には加工痕とも考えられる剥離痕をもっている。32・33にも微細な剥離痕があるものの、人為的な加工痕とは考えられない。34・35・37は表面にのみ剥離痕があり、36・38は両面に剥離されており、使用方法は切削器や削器と同じであろうと推定される。剥片の形状や大きさは不定である。石質には粘板岩やチャートの北上山地古生界産のものと、凝灰質珪質泥岩・白色細粒凝灰岩の奥羽山系新第三系中新統産のものである。

〔磨製石斧〕 (第54図52～54、PL-38)

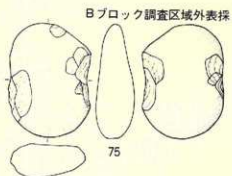
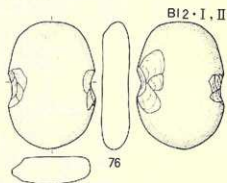
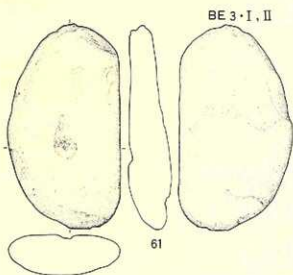
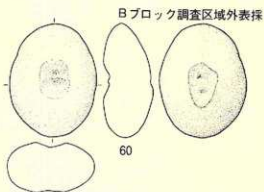
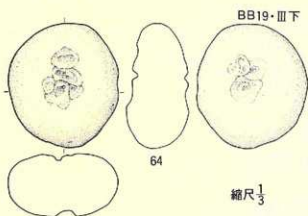
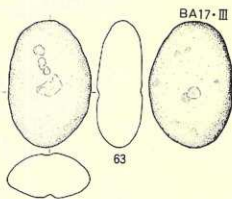
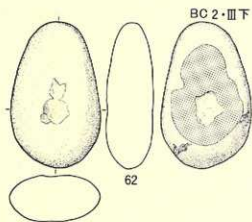
3点出土している。全てBブロックからの出土であり、53は表採であるが他はIII層からの出土である。54は約60m離れたBE18III層とBG4 III層から出土した破片が接合した。52は頭部が若干剥落しているがほぼ完形である。その他、53は刃部を欠損し、叩き石に転用され、54も刃部を欠失している。成形方法を52でみると、先ず全面を叩き潰しによって粗成形をした後、全面を研磨して仕上げている。この方法は3点ともほぼ同様と推定され、いずれも全面に研磨する際の僅かな擦痕を残している。大きさは、52が全長13.34cm・最大幅5.05cmで、他の2点は欠損によって計測不能ではあるが、53は52より小さく、54は欠損部を勘案すると長くやや大き目になるものと推定される。石材は北上山地古生界産の輝石玢岩と花崗玢岩が使用されている。

〔凹み石〕 (第55図60～64、PL-38)

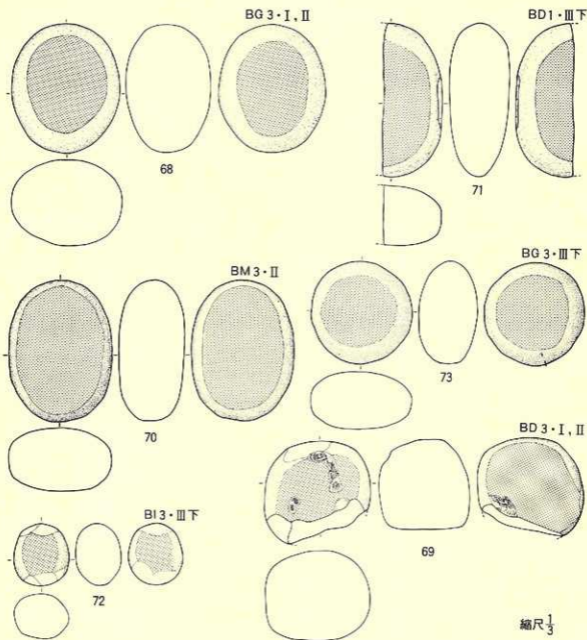
5点の出土である。いずれもBブロックからの出土で、層位にはI層からIII層までであるが、III層からの出土が最も多い。60は調査区域外からの表採である。61以外は両面に凹みをもち、中には片面に複数もつ場合もある(63・64)。また、62では片面に磨面をもっている。形はほぼ円形のもの(64)や楕円形のもの(60～63)があるが、全て若干扁平な河原石を使用している。大きさは、長径が最小9.13cmから最大16.46cmと差があり、幅や厚みも長径と同じ様相を示しているが、厚さは長径や幅に比較するとややまとまっている。重量も最小294gから最大680gと差が大きい、これは大小関係とともに石質にも依ると推定される。石材は凝灰質硬砂岩・硬砂岩・粘板岩等の北上山地古生界産や、七時雨山周辺第四系産の両輝石安山岩が使用されている。

〔磨り石〕 (第56図68～73、PL-38)

6点出土しているが、69・71は欠損品である。Bブロック本線分からのみ出土し、層位的にはI層からIII層までである。形状は、69・73はほぼ円形であるが、他は楕円形を示し、70・71・73の断面は扁平で他は厚みを増す。磨り面はいずれも両面にもつが、68・70はほぼ全面におよび



第55図 遺構外の遺物 (石器-3)



第56図 遺構外の遺物 (石器-4)

(実測図のスクリーントーンは特に著しい部分に貼ってある)、他は平らな面にもち、70・71では長軸側面、72の長軸両端に叩き面をもっている。大きさは、長径が4.97cm~12.24cm、幅4.44cm~8.67cm、厚み3.57cm~7.05cmの範囲にあり、重さもそれぞれによって差がある。石材は北上山地古生界産の花崗玢岩や角閃玢岩・輝石玢岩・凝灰質硬砂岩等と、七時雨山周辺第四系産の肉輝石安山岩が使用され、北上山地産の前四種類が後者より重い傾向がある。

〔石 鐘〕 (第55図75・76、PL-38)

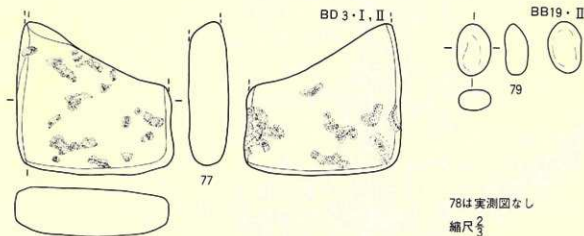
2点出土している。出土地点は、75がBブロックの表採で76はB I 2のI・II層である。形状は、平面形が楕円形で断面は扁平を示し、長軸の両側縁に敲打斜離による凹みを付し、紐掛かりとしている。大きさは、2点ともほぼ長さ10cm、幅6.5cmで、厚みは75が約3cm、76が約2.5cmである。重さは前者245g、後者273gである。石質は硬砂岩と輝石玢岩で、ともに北上山地古生界産である。

4. 石製品 (第57図77・79、PL-38)

本遺跡から出土した石器類の中で、石製品としたのは3点のみである。77・78(実測図の掲載はないが、写真を掲載した)は軽石製品である。77は断面が長方形で平面形も方形に成形されているが、一部を欠失しているため全体形は不明である。全面が良く擦られ、入念に成形・調整されている。大きさは、現存長さ5.84cm・幅6.32cm・厚み2.07cm・重さ14.85gである。78は明確な加工痕は不明瞭であるが、一部に面取りをしたらしい部分もあるため、一応石製品とした。平面形は不整形長方形で断面形は不整な台形状である。大きさは、全長10.96cm・最大幅6.24cm・厚み4.27cmで、重さは100gである。

79は蚕豆状をした小石で、全面に光沢を放つ研磨をもつ。自然石かとも考えられたが、とりあえずここに入れておく。大きさは、全長2.04cm・幅1.37cm・厚み0.86cm・重さ3.92gである。

77・78の石材は岩手火山群第四系産の軽石で、79は北上山地古生界産の輝緑凝灰岩である。



第57図 遺構外の遺物(石製品)

VII ま と め

以上、前項までは本遺跡に対する発掘調査の経過と、その結果について詳述してきたが、本項では、結果に対して若干の分析を加え、まとめとしたい。なお、遺構と遺物は分けて記述することにする。

1. 遺 構

(1)住 居 跡

本遺跡の発掘調査では5棟の住居跡が検出され、いずれも縄文時代後期中葉の土器が出土し、同時期の集落構成を暗示している。以下に、各項目ごとに若干の検討を加えることにする。

〔検 出〕

5棟は、①基本層序III層上面で検出——2棟、②基本層序III層中位面で検出——2棟、③重複により不明——1棟の検出状況に分けられる。

①にはAC2住居跡-1とBD2住居跡が入り、この2棟はいずれも壁高が35cm以上と掘り込みが深く、埋土として基本層序II層に類似した土が堆積し、いずれも床面で炭化物(材)が検出され、焼失した状況を示すという共通点がある。

②はBB1住居跡とBB3住居跡が該当し、前者に比較して掘り込みが浅く、床面が前者のそれより15cm弱高い。埋土は基本層序III層上部類似のシルト単層である。

③はAC2住居跡-1によって削平されたAC2住居跡-2が該当する。全体が完全に重複しているため掘り込み面が全く不明である。しかし、床面がAC2住居跡-1より低く掘り込みが深いことから考えると、①に入るべき住居跡であろう。平面形・炉跡の位置・柱穴の位置と数等が、AC2住居跡-1と同じ様相を示すことから、この2棟は直接的な改築拡張による重複関係と考えることができよう。

〔規模と形状〕

規模は、BD2住居跡が5.6m×4.8mと最も大型で、次いでAC2住居跡-1の4.5m×4.0m、AC2住居跡-2が4.0m×3.5m、BB1住居跡が3.6m×3.2m、BB3住居跡が3.2m×3.2mの順になり、BD2住居跡が他の4棟に比して特に大型で、本住居跡群の中では中核と成る様相を示している。

平面形には、①ほぼ円形——BB1住居跡、②楕円形——BD2住居跡、③隅丸方形～隅丸長

方形—AC2住居跡—1・AC2住居跡—2・BB3住居跡があり、必ずしも一様ではない。

〔柱 穴〕

主柱穴が検出されているのはAC2住居跡—1とAC2住居跡—2の2棟のみである。この例では、床面から柱穴状土坑が2基検出され、炉跡を挟んで対峙する配置関係を示し、この状況は2棟とも同様である。BB3住居跡の床面でも柱穴状の小土坑が検出されているものの、主柱穴と断定するに至っていない。BD2住居跡の場合は、4基の柱穴状小土坑が検出されているが、いずれも位置が不整のため、主柱穴とすることに問題を残している。規模からみると、P5が最もそれらしいが、位置がずれている。P6は出入口施設と考えている（後述）P2とP3の中間延長線上に位置してはいるが、炉跡の直ぐ脇に在り、主柱穴とすることに疑問を感じている。

また、BD2住居跡には、P2とP3の間を除く壁際の床面に、杭穴状の壁柱穴をもっている。機能や性格を明確にする資料は得られていないが、これらの小土坑が全て直立であることや、間隔が20cm～30cmとほぼ一定していることは、機能を示唆している可能性が強い。一般的には壁が崩れるのを防ぐ土留施設と考えられているが、地上部まで続く壁体に関わる施設と考えることもできよう。

〔炉 跡〕

検出された5棟の住居跡には全て炉が付設されている。炉の種類は、①石囲い炉—1棟、②地床炉—4棟である。

石囲い炉はAC2住居跡—1で、床面を掘り込んでそれを埋め戻しながら礫を配置する構築方法を取り、礫の上面がほぼ水平になるよう、埋め込む深さを加減している。形は北側に開口部をもつ「C」型である。

地床炉は、AC2住居跡—2、BB1住居跡、BB3住居跡、BD2住居跡の4棟であるが、強い焼成を受けているのはAC2住居跡—2のみで、他の3棟は僅かにその痕跡を止めるに過ぎない。構築の際の掘り込みをもつ炉はないが、BD2住居跡では炉の部分が若干窪んでおり、焼土面が床面より低くなっている。それ以外は、焼土面と床面がほぼ同位面にある。

〔出入口施設〕

本遺跡で検出した5棟の内2棟で出入口施設が検出されている。しかし、検出された状況を見ると同一ではない。

BB1住居跡の場合には、南壁際の床面に約70cmの距離で、円形を示す2基の柱穴状土坑が在り、他には柱穴状土坑が検出されていない。BD2住居跡も、南壁際の床面で長軸が壁に直交す

る楕円形の柱穴状土坑が約80cmの間隔で検出されている。

この両者は、柱穴の平面形が円と楕円形で違いはあるものの、位置が南壁際と共通すること、間隔が70cmと80cmで近いといった共通点があり、出入口施設として大過ないであろう。

このような出入口施設は他の遺跡でも例がある。たとえば、後期としては、八天遺跡^㉑・卯邊坂遺跡^㉒・上斗内III遺跡^㉓・扇畑II遺跡^㉔・馬場野II遺跡^㉕、晩期としては桜沼遺跡^㉖・吠屋敷I a遺跡^㉗等の検出例を挙げることができる。

〔時期〕

床面直上から出土した土器から、住居跡の所属時期を考えてみる。

出土した土器の多いのはBB1住居跡で、実測可能なものが5点(第13図^㉘～^㉚)ある。^㉘・^㉙はともに浅鉢で、縄文施文部に並行沈線を付し、口縁部は無文とするが、^㉘は頸部に刻目帯をもっている。^㉚～^㉛は沈線区画と磨消縄文を特徴としている。体部の縄文は単筋斜行縄文(^㉛～^㉜)と羽状縄文である。BD2住居跡では3点出土しているが、BB1住居跡例と大同小異であり、特に時期差は認められない。残るAC2住居跡とBB3住居跡の例もほぼ同じ状況を示している。

このような土器を本遺跡での分類基準に合わせれば、第IV群に相当し、その中でも1類～3類に相当するものである。土器型式では関東地方の加曾利B式や東南北半の宝ヶ峰式に最も近い特徴を示している。

以上のことから、本遺跡で検出された5棟の住居跡は縄文時代後期中葉に属し、土器型式では加曾利B式や宝ヶ峰式期に位置づけられるであろう。

〔小 結〕

本遺跡で検出された5棟の住居跡は、検出面に若干の相違はあるものの、出土した土器に大差がなく、同時存在した可能性を示している。この考え方が妥当であれば、最も規模の大きいBD2住居跡を中核とする集落と考えることができよう。しかし、遺構の分布状況を見ると、調査範囲(本線分)が遺跡全体の東端に位置し、未調査区域での遺物分布状況をも加味して考えると、集落の大部分が未調査区域に広がる可能性を示している。また、かつての北側段兵崖はグラグラした緩斜面であり、削平の際に大量の遺物が出土したとのことであるから、本来はもっと北方にも広がる集落であったものと推定される。

形状は円形・楕円形・隅丸長方形気味等があり、明確な柱穴をもつのは2棟のみである。炉跡は石囲い炉と地床炉であるが、主体は地床炉である。また、2棟で出入口施設が検出され、貴重な類例を提供したのと考えられる。

出土した土器からみた5棟の住居跡は、いずれも岩手県で類例の少ない縄文時代後期中葉に属し、北上川上流域のみならず、岩手県内での基本資料となろう。

(2) 土 坑

22基検出されているが、それらは規模・形状・検出面等に相違がみられるので、以下に若干の分析を加える。

(検 出)

本遺跡で検出された土坑の検出面には、①基本層序Ⅱ層上面、②基本層序Ⅲ層上面、③基本層序Ⅲ層中位面の3面があり、それぞれの面で検出された土坑は以下のとおりである。

- ①基本層序Ⅱ層上面——この面で検出されたのはAK5土坑・AL5土坑・AM4土坑・AN3土坑・AN4土坑の5基で、後述するAⅢ型に属する土坑のみである。
- ②基本層序Ⅲ層上面——AC1土坑・AC2土坑-1・AC2土坑-2・AC2土坑-3・BB3土坑-1・BB3土坑-2・BC3土坑-1・BC3土坑-2・BD4土坑の9基で、これらはAⅠ型-2基・AⅡ型-4基・B型-3基に分類される。
- ③基本層序Ⅲ層中位面——この面ではBA16土坑・BB16土坑・BC3土坑-3・BC3土坑-4・BC4土坑-1・BC4土坑-2・BF4土坑・BI3土坑の8基が検出され、これらはAⅠ型-3基・AⅡ型-5基に分類される。

検出面に差があるということは、本来、そこに時間差を伴うことを表わしていることになる。

- ①は埋土の土性が他と明らかに違い、時間差に起因することは明白であるが、②と③の関係については遺物の検討を経た上で考えることにする。

(形状と規模)

平面形には円形や楕円形を示す19基(A型)と、略長方形を示す3基(B型)があり、断面形ではピーカー形6基・フラスコ形9基・浅皿形6基・楕鉢形1基がある。

規模はA型とB型で差がある。A型では開口部径1m以上で深さ70cm以上——5基と、開口部径1.2m未満・深さ75cm未満——14基に大別され、後者は深さによってさらに細分される。B型はAC1土坑とAC2土坑-3は開口部径・深さともほぼ等しいが、BC3土坑-1は平面形も不規則で、若干大型である。

全体的にみるならば、平面形が円形で、断面形がピーカー形やフラスコ形を示し、規模の比較的小さい土坑が主体である。平面形が略長方形のB型は数も少なく、位置も限定されているこ

とから、A型とは機能が違う可能性がある。

〔埋土〕

22基の埋土を観察すると、土性や混入物に特徴的な状況を示す例があるので、記しておく。

調査区南端に位置するAK5土坑・AL5土坑・AM4土坑・AN4土坑・AN3土坑の埋土は、礫や雑物の全く混入しない基本層序I層類似の、フカフカして締りのないシルトの単層である。これらの土坑は基本層序II層上面で検出されたことや、他の土坑の埋土とは全く異なった状況を示しており、おそらく、時期的な差が介在するものであろう。

BC3土坑-2・BD4土坑・BF4土坑・BI3土坑の4基には、ある層に多量の礫が混入している。層序の状況が一般に自然堆積といわれる状況と同一であることから、自然堆積で埋没した土坑と考えることができよう。自然堆積でこのような礫が混入することは、何に起因するものであろうか。最も可能性の高いのは、北上川の氾濫によって遺跡地内に冠水し、土砂が流入したことである。このことは、遺跡地内に旧河道と推定される細長い窪地と自然堤防の微高地が存在することも傍証となり得よう。

その他の土坑では、BB16土坑の埋土や他と違う様相を示している。埋土全体が3層に細分されているが、3層が1層に塊状に混在する状況を示し、必ずしも自然堆積による埋没とは言いつけられない。むしろ、人為的に埋め戻された状況と理解するのが妥当であろう。またAC2土坑-1も平面的な堆積状況を示しており、この土坑も自然埋没とは言いつけられない面がある。

既述した以外の土坑は、自然堆積で埋没した土坑として大過ないものと考えられる。

〔類型分類〕

以上の分析をもとにして類型分類すると次のとおりである。

A型、平面形が円形や楕円形を示し、開口部径と深さによる規模によって、さらに細分される。

- I、開口部径が1.1m～1.7mで深さが0.7m以上の土坑で、AC2土坑-2・BB16土坑・BD4土坑・BF4土坑・BI3土坑の5基が該当する。断面形にはフラスコ形(BD4土坑・BI3土坑)とピーカー形(AC2土坑-2・BB16土坑・BF4土坑)がある。
- II、開口部径が0.5m～1.1mで深さが0.2m～0.75mの土坑で、AC2土坑-1・BA16土坑・BB3土坑-1・BB3土坑-2・BC3土坑-2・BC3土坑-3・BC3土坑-4・BC4土坑-1・BC4土坑-2の9基が該当する。断面形はBB3土坑-1がピーカー形、BB3土坑-2が浅皿以外はフラスコ形である。
- III、開口部径が0.7m～1.2mで深さが0.05m～0.35mの土坑で、断面形はいずれも浅皿形である。AK5土坑・AL5土坑・AM4土坑・AN4土坑・AN3土坑の5基が該当し、いずれ

も基本層序第Ⅰ層類似のシルトが埋土である。

B型、平面形が隅丸長方形気味の土坑で、AC1土坑とAC2土坑-3が該当する。BC3土坑-1もほぼこの型と考えられるが、若干不整形である。断面形は前二者がピーカー型で、後者は溜鉢形である。

〔時期〕——小結にかえて

検出された22基の内、遺物を出土したのは13基のみである。その中で、11基からは土器、2基からは石器が出土している。

11基から出土した土器には第Ⅲ群と第Ⅳ群に属する土器がある。しかし、土坑個々でみると、第Ⅲ群土器のみを出土したのは3基(BB3土坑-1・BC3土坑-1・BC3土坑-2)で、第Ⅳ群土器を出土したのは2基(BD4土坑・BF4土坑)のみであり、他の2基(AC2土坑-1・BB16土坑)では両者が出土し、残りの4基(AC1土坑・BA16土坑・BC4土坑-1・BC4土坑-2)は属性を明確にできない。

本遺跡で第Ⅲ群土器としたのは縄文時代後期前葉に属し、第Ⅳ群土器は同後期中葉に位置づけられる土器であり、いずれも本遺跡から出土した土器の主体を成す土器群である。

検出された住居跡群(集落)からは第Ⅳ群土器を出土し、これらの土坑も集落到付属し、それを構成する遺構群であることは確実であろう。しかし、他遺構との重複をみると、AC2住居跡-1・同住居跡-2より古いAC2土坑-2・同土坑-3と同住居跡より新しいAC2土坑-1の関係や、BB3住居跡より新しいBB3土坑-1・同土坑-2との関係等があり、土坑は少なくとも3期～4期に細分される可能性を示している。

遺物を出土しない9基については、時期を決定する資料を欠くが、AC2土坑-2・同土坑-3・BB3土坑-2・BC3土坑-3・同土坑-4の規模や形状・埋土の堆積状況は、先の土器を出土した土坑のそれと全く同じ様相を示している。このことは、これらの5基は先の10基と同時期に位置づけられることを示すものであろう。石器を出土したAC2土坑-2とBI3土坑もほぼ同様であろう。残りのAⅢ型とした5基は、他の土坑と埋土が全く異なることは既述のとおりであり、縄文時代の土坑とするには問題がある。遺構検出面を加味すると、極く最近の土坑である可能性が強い。

以上のことから、AⅢ型以外の17基は縄文時代後期前葉～中葉に位置づけられ、3期～4期に細分される可能性が強い。

性格や機能を示す資料は何もないが、AⅠ型・AⅡ型は一般的にフラスコ形土坑やピーカー形土坑と呼ばれる土坑であることから、貯蔵穴としての性格が強いであろう。AⅢ型は耕作に関連する可能性がある。B型は略長方形であることから貯蔵穴としての機能はないものと考えられ

る。墓墳的ではあるが、埋土が自然堆積の状況を示していることに疑問がある。これらから総合的に判断すると、陥し穴状遺構に最も近似した状況を示している。

(3)溝状遺構

本遺跡で溝状遺構としたのは、畑地の地境を利用した現用の作場道の下部から検出された。埋土も基本層序第Ⅰ層類似のシルトの単層であり、土坑のAⅢ型と近似した状況を示している。以上のことから、これは現在のもので、歩行利用による沈下によって、溝状に窪んだものと推定される。

2. 遺物

(1)土器

本遺跡から出土した土器の内容は、前項で分類し詳述したが、本項では分類された土器群を他遺跡での類例等から、その型式的・編年の位置づけをしておく。

〔第Ⅰ群土器〕

縄文時代早期に属する土器である。第37図Ⅰの破片は、口縁端部から口唇部にかけて縦長の刻目を付し、その下位には沈線による格子目をもつ。このような特徴をもつ土器は、岩手県内では小堀内遺跡^⑧（同報告書図16-92・93）や蛇王洞洞穴^⑨（報告書第6図P11）で出土している。本遺跡例では体部～底部の状況が全く不明であるが、蛇王洞洞穴例では鋭角な円錐形の尖底である。本例もほぼ同じ形状を示すものであろう。このような土器に対して、林氏は蛇王洞Ⅱ式と命名している。蛇王洞Ⅱ式は東北北半の白浜式との関係が不明瞭であるが、ここでは、一応蛇王洞Ⅱ式に近い土器と理解しておく。

第37図2の破片は、回転押型文に多条の横走沈線を付すことを特徴としている。このような特徴をもつ土器は、桜松遺跡^⑩（同報告書図版30-13）や大館遺跡群第3・4次調査^⑪（同報告書第27図521～525・第28図542・561～564）等に類例がみられる。しかし、細部でみると若干の相違点もある。それは、両遺跡例とも口唇部の形・作り方の違いである。桜松遺跡例では角張る口唇の口縁端部を削り取って軽い小波状としているし、大館遺跡群では口縁端部が内削ぎされ、鋭角に尖る。本遺跡例では軽く先細りとなって小さな丸味をもっておさまる。このような相違点が土器型式の差なのか地域差なのかは定かでない。いずれにしても、本遺跡では破片1点の出土であるため、詳細は不明といわざるをえない。付されている文様だけから考えると、桜松遺跡例に近い様相を示している。先の両遺跡例では「V」型の押型文と共伴し、一般に日計型

押型文^㉔と呼ばれる型に近い。以上のことから、本遺跡のものも両遺跡例に近い土器と理解しておく。

〔第Ⅱ群土器〕

縄文時代中期末葉に属する土器である。隆帯と沈線によって区画し、縄文を磨消することを特徴としており、型式的には大木9式か10式に属するものと考えられる。岩手県内では数多くの類例がある。

〔第Ⅲ群土器〕

本群には縄文時代後期初葉～前葉の土器を入れた。土器型式では関東地方の称名寺式・堀の内I式・同II式、東南北半の南境式・宮戸I式、東北北半の十腰内I式等に相当すると考えられる。

1類と2類は断面丸形の隆帯をもつ土器であるが、1類の隆帯は直線的・2類のそれは曲線的で、両類とも隆帯の上面に縄文を付し、1類の一部(第42図9)には隆帯上に円形刺突痕をもつという特徴がある。本種と同じ特徴を具備している土器の出土例は定かでないが、該期の隆帯をもつ土器例は青森県蛭沢遺跡第V群土器^㉕、岩手県君成田IV遺跡第3群土器^㉖等があるものの、細部では相違点が多く、同一とは言いつれない。特に2類にその傾向が強い。しかし、現在知られている縄文時代後期の土器の中で、このような隆帯を付す例は初葉～前葉の特徴であることは間違いない。この種の土器に対して、蛭沢遺跡では北陸地方の三十稲場式土器との関連を示唆しているし、君成田IV遺跡では、称名寺式や南境式・十腰内I式の古い部分と並行するとしている。本遺跡例もそれに近い時期が推定される。

3類も先の1類に近い特徴をもっているが、隆帯の断面が三角形という相違点がある。本類に近い類例として、岩手県立石遺跡第III群2類^㉗、岩手県崎山弁天遺跡第IV群1類A^㉘、岩手県貝島貝塚第II群第1類^㉙がある。崎山弁天遺跡では門前式土器^㉚との類縁性を認めているし、立石遺跡では門前式より若干後出する要素と考えている。貝島貝塚では門前式とし、三遺跡とも門前式を中心とするその前後に位置づけている。本類もそれに近い時期と考えられるが、門前式よりは後行すると推定される。

4類は複合口縁で、頸部に隆帯を付すもの(第44図26)やボタン状の円形貼付文を付す(同図35)例があり、体部には沈線と磨消縄文による文様をもつ。このような土器は、立石遺跡第III群4類の一部や明遠坂遺跡IIAb類土器の一部、貝島貝塚第II群第3類等に類例がある。型式的には堀の内I式的な要素の強い土器と考えることができよう。

5類と6類は曲線や直線による沈線のみによって施文された土器である。他遺跡での類例が

定かでないものの、先の4類に近い時期に属すると推定される。

7類は沈線による懸垂蛇行文をもち、沈線区画と磨消縄文を特徴としている。このような類例は数多く知られており、成田滋彦氏の³⁶の堂沢式土器の一部や堀の内I式土器に近い土器といえよう。

8類は降帯と隆帯の分岐点に円形刺痕をもつ土器である。このような土器は立石遺跡第III群4類の一部や、崎山弁天遺跡第IV群第1類、貝島貝塚第II群第1類・第2類・第3類、八天遺跡第III群1類等に類例がある。これらは称名寺式や堀の内I式等に近い土器ということができよう。

9類は沈線で区画し、区画帯を若干隆起させることを特徴としている。十腰内遺跡第I群土器、成田滋彦氏の堂沢式、立石遺跡第III群第5類の一部等に類例があり、大湯式や十腰内I式の一部に近い土器である。

10類は無文の器面に多条沈線文のみによって施文されており、このような土器は十腰内遺跡第I群土器を代表とし、数多くの類例がある。成田滋彦氏の十腰内Ia式に近い土器といえよう。

11類は縄文施文の器面に並行沈線のみによって施文される土器で、堀の内II式に近似した土器である。

以上のことから、本遺跡で第III群とした土器は、1・2類は称名寺式や南境式、3類は門前式、4～8類は堀の内I式、9・10式は十腰内I式、11類は堀の内II式に近似した土器である。

〔第III群土器〕

本群は縄文時代後期中葉に位置づけられ、土器型式では加曾利B式、宝ヶ峰式、宮戸II式等に相当する土器群である。

1類は並行沈線と懸垂蛇行文を特徴とする。このような土器は立石遺跡第IV群1類、貝島貝塚第III群第1類、崎山弁天遺跡第V群1類等に類例があり、土器型式では加曾利BI式や宝ヶ峰式・宮戸II式の一部に相当する。

2類は綾杉状沈線を特徴とする土器で、立石遺跡第IV群2類、貝島貝塚第III群第2類、崎山弁天遺跡第V群2類等にその例をみることができ、関東地方の加曾利BII式の特徴とされている。

3類は「L」字形を主体とした沈線区画と、それに伴う磨消縄文を特徴とし、類例は貝島貝塚第III群第3類、上斗内III遺跡第IV群2類にみることができる。土器型式としては加曾利BII式に近い土器で、宝ヶ峰式や宮戸II式の一部に相当するであろう。

4類は、沈線による「L」字形区画と磨消縄文は3類と同様であるが、口縁端部や頸部に刻目

帯をもつことと、体部の縄文に羽状が多用されるという相違点がある。このような土器は、立石遺跡5類、貝島貝塚第III群第5類の一部、崎山弁天遺跡第V群6類、上斗内III遺跡第VI群3類等に類例があり、加曾利BIII式や宝ヶ峰式・宮戸II式に近い土器と考えることができる。

5類は、口縁端部に刻目帯を付す特徴は4類と同一であるが、口縁部が三角形に尖る波状を示すことと、沈線区画帯が木葉文的になるという違いがある。このような土器は上斗内III遺跡第IV群3類に類例があり、このような木葉文的な区画帯は十腰内III式や同IV式に多用される区画帯であるといわれる。このことから、本類は東北北部の影響を受けた土器で、十腰内III式か同IV式に相当する土器であろう。

6類は、沈線区画と磨消縄文は4類と同じであるが、沈線に並行する列点文を付すという違いがある。このような土器は、立石遺跡第IV群4類、崎山弁天遺跡第V群5類、貝島貝塚第III群第4類の一部等に類例をみることが出来る。本類の属性は明確でない面も多いが、加曾利BII式や宝ヶ峰式土器に共伴する土器と理解されている場合が多く、東北北半に広く分布するといわれている。形式的にはどれと並行関係をもつかは不明である。

7類は、三叉文や入組文的な文様をもつ土器である。このような特徴は一般に後期後葉～末葉の土器にみられることから、本類もまた、ほぼこの時期に相当するであろう。

以上のことから、本群は1類が加曾利B I式や宝ヶ峰式と宮戸II式の一部、2・3類は加曾利BII式、4類は加曾利BIII式、5類は十腰内III式かIV式、6類は明確でないが広義の加曾利B式、7類は後期後葉～末葉に属する土器と考えることができよう。

〔第V群土器〕

本群は体部に縄文のみが施文された所謂粗製土器である。この種の土器だけで時期や土器型式を決定することは困難である。本遺跡から出土した土器で時期を決定できるのは、第I群土器から第IV群土器までであり、その中でも縄文時代後期に属する第III群と第IV群土器が主体を占めている。本群の土器をみると、複合口縁や羽状縄文をもつ等の特徴があり、第III群や第IV群土器に近い様相を示す土器が含まれている。このことは、本群は先の両群に関連する土器であることを示しており、第III群土器や第IV群を構成する土器群であることを表している。

〔第VI群土器〕

本群は所謂無文土器である。この種もまた、本群単独で時期や土器型式を決定することができない。しかし、本遺跡から出土した土器が縄文時代後期初葉～中葉を主体とすることは既述のとおりであり、このことは、本群も先の第III群か第IV群を構成する土器群であることを推定

させる。

〔底部〕

底部だけを残存する土器が260点弱出土しているが、これだけでは時期決定資料を欠くものの、そのほとんどは縄文時代後期前葉～中葉に属することは確実であろう。ここでは底面にみられる圧痕文について若干記しておく。

網代痕 (第4表・第71図、PL39)

網代痕をもつ底部破片は、260点弱の内37点あり、全体の14%を占めている。付されている圧痕をみると大きく3種類に分類され、その中の一部はさらに細分される。個別の該当する種類は第4表に示しておいた。なお、分類に当っては桑飼下遺跡⁹⁾での分類にしたがった。

A型 「1本超え、1本潜り、1本送り」 本遺跡では最も多く83.7%に相当する31点が本型である。しかし、表出された痕を観察すると、楕円形や長楕円形を示すものと方形か長方形のものがある。これは「経糸」と「緯糸」の硬さや形(丸棒状か板状か)に関係するものと考えられる。

1：圧痕文が楕円形や長楕円形を示すものであるが、A型の87%に相当する27点が本型であ

第4表 網代痕の経糸と緯糸の本数

(10cmに入る本数である。)

遺物 番号	本数		型	備考	遺物 番号	本数		型	備考	遺物 番号	本数		型	備考
	経糸	緯糸				経糸	緯糸				経糸	緯糸		
210	9	22	A 1		223	—	—	A 1	小破片	49	—	—	B	磨治で不明瞭
211	9	18	A 2		224	7	15	C		56	13	35	A 1	
212	—	—	A 1	磨治で不明瞭	225	—	—	A 1	磨治で不明瞭	89	8	20	A 1	
213	7	20	A 1		226	—	—	A 1	磨治で不明瞭	89	8	16	A 1	
214	10	19	A 2		227	13	18	A 1		99	10	18	A 1	
215	—	—	A 1	小破片	228	8	20	C		99	9	18	A 2	
216	—	—	A 1	磨治で不明瞭	229	8	15	A 1		99	8	16	A 1	
217	7	18	A 1		230	17	36	B		99	9	16	A 1	
218	9	19	A 1		231	10	21	A 1		99	8	18	A 1	
219	7	18	A 1		85	16	22	B		99	8	15	A 1	
220	9	17	A 1		161	9	23	B		99	10	18	A 1	
221	9	16	A 2		99	8	17	A 1						
222	11	12	A 2		99	9	18	A 1						

る。全体でみても72.9%を占め、網代痕をもつ土器の中で最も多い。瓦痕文の明瞭な22点の10cmに入る経糸の数は最少7本から最多13本までであり、該当数の最も多いのは8本の8ヶ体であるが、7本～9本が17ヶ体と77%がこの本数である。緯糸も計測可能な21点の本数をみると、最少12本から最多35本までであるが、量的に最も多いのは18本の6点である。全体でみると15本から21本に19点が入り、90%を占めている。また、経糸の太さ（幅）は2mm～5mmまでみられるが、4mm位が最も多いようである。しかし、経糸は不明瞭な場合が多いので、妥当か否かは定かでない。緯糸もまた、2mm～6mmまでであるが、4mm～5mmが最も多く、経糸より幅広の場合が多い。瓦痕文を観察する限りでは、経糸は平らなものを使い、緯糸には丸棒状の筧が多いようである。緯糸が軟かいものは、上段の緯糸と交叉する際にその部分が潰れたものであろう。

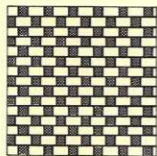
2：瓦痕文が方形か長方形になるもので、4点が該当する。A型の中では12.9%に相当し、全体では10.8%と最的には少ない。瓦痕文が方形なり長方形に表出されるのは、経糸・緯糸ともに平らな材料を使用したことによるものであろう。

B型 「2本超え、1本潜り、1本送り」 3点の出土で、僅か8.1%を占めるにすぎない。経糸が1mm～2mmの太さで、緯糸のそれはほぼ2mmと、前のA型より全体的に細い材料を使用している。10cm内にみられる本数も、経糸が9本・16本・17本で緯糸が22本・23本・36本と、A型のそれより多い。太さもほぼ一定していることは、「あげび曇」とか「萩の幹や枝」といった太さがほぼ一定の材料を使用したか、加工によって「竹ヒゴ」状のものを作って材料としたであろうことが推定される。

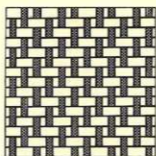
C型 A型の1本超え、1本潜り、1本送りに、別の糸が斜めに入るという2種類の組み方をしているもので、桑飼下遺跡の「XII」に相当すると考えられるものである。出土点数は2点で、網代痕の中では最も少なく、全体の5%を占めるにすぎない。各糸の太さはA型のそれとほぼ同様である。

以上、木遺跡から出土した土器底面の網代痕について、その種類と構成比率等について、若干の分析をしたが、それをまとめると以下のようになる。

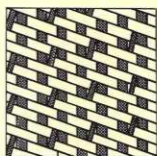
- ①網代痕をもつ底部は全体の14%で、その中の73%がA1型、13%がA2型、8.5%がB型、5.5%がC型の構成比率となる。このことは、木遺跡では「1本超え、1本潜り、1本送り」の編み方（組み方）を好んで多用したことを表わしている。
- ②経糸の太さは、A型とC型は4mm位の幅が多く、B型はほぼ2mm位である。緯糸のそれはA型とC型は5～6mm、B型は2mm位で、A型の太さに比してB型のそれは細い。それがとりも直さず10cmに入る糸の数に直接的な影響を与え、細くなるほど糸の数が多くなる傾向が



A型



B型



C型

第58図 土器底部網代痕模式図

ある。

- ③ 緯糸が楕円形や方形に表出されるのは、材料の硬さや断面形（丸か平らか）によるものと考えられる。たとえば、硬い材料を使用しても断面形が丸い蔓状のものは楕円形に表出されるし、断面形が扁平なものを使っても、上の段との交叉部分が潰れても楕円形になる。一方、方形や長方形に表出されるのは、硬くて扁平なものを緯糸に使った場合のみであろう。しかし、いずれの圧痕文をみても、経糸・緯糸とも太さに左程バラツキがなく、ほぼ一定している。これは自然界から採取された枝なり蔓をそのまま使うとすれば、極く限定された種類を使用したことが推定される。また、素材を割ったり、削いだり、削ったりして加工するとすれば、なおさら種類を選択したと考えることができよう。現在、籠編みに使用している種類として、樺の木皮・山ブドウの皮・藤蔓・あけび蔓・行李柳・山萩の幹と枝・竹や笹の幹、板屋楓の木を薄く削いだもの・ササメ・スゲ・ガマの草の葉等があり、おそらく、これらに近い材料がこの時代に使用されたものと推定することができる。
- ④ 桑阿下遺跡例では「2本超え、2本潜り、1本送り」が51.2%と最も多いと報告されており、本遺跡例とは異なる。また、同報告書の中で「東北日本、特に関東・中部地方においては、網代痕の中で多数を占めるのは「2本超え、1本潜り、1本送り」である、と述べており、本遺跡例はこれとも異なる結果となっている。この現象は地域差によるものか遺跡間の好みの違いによるものであろうか。もっと広範な比較検討が必要であろう。
- ⑤ A1型の中に、経糸を途中から分枝させて経糸の数を殖している例がある。それは、第60図218 (PL34-218) であるが、2ヶ所で各1本づつ2本殖している。

木葉痕

網代痕以外に木葉痕をもつ底部が17点あり、底部全体からみると約6%を占めている。使用された樹種をみると、朴や柏等の葉脈が明瞭で大きな葉が5点、笹の葉12点となり、笹の葉を使用している例が圧倒的に多い。

(2)土製品

〔土器片円盤・土製円盤〕

全体で35点出土しているが、これには土器片円盤34点と土製円盤1点が含まれている。ここでは土器片円盤についてのみ若干のまとめをしておく。

34点出土しているその大きさは、縦径が5cm台—4点(11.76%)、4cm台—16点(47.2%)、3cm台—12点(35.2%)、2cm台—2点(5.88%)と、5cm台と4cm台に全体の82.4%に相当する28点が入る。横径は5cm台—6点(17.64%)、4cm台—13点(38.23%)、3cm台—13点(38.23%)、2cm台—2点(5.88%)になり、3cm台と4cm台に76.46%に相当する26点が入る。このように、若干の差はあるが縦径と横径が近接した数値を示すことは、本来、この土製品は円形に仕上げることが目的であったことを示している。重さを見ると、最小4gから最大36gまでであり、非常にバラツキが大きい。9gと10g合わせて10点(29.4%)、12g～16gに9点(26.5%)入り、強いて言えばここに中心があるといえる。

このように、大小関係にあまりバラツキがないのに重量の差が大きいことは、選んだ破片の厚さに起因するものであろう。このことは、土器片円盤は「重さ」を基準にして作ったものではなく、平面的な形(円形)と大きさ(径4～5cm)に基準があったことを示すものであろう。

本遺跡の場合は使用方法を示す明確な例はないが、一部(カ・ネ)に紐掛りとおもわれる凹みをもつものがあり、錘的な使用形態を示唆している。この種の土製品は縄文時代前期初頭から出土例が知られており、同時代晩期まで作られている。中には中心部に円孔を穿つもの等もあるが、機能的な面については今後に残された課題である。

〔異形小型片口土器〕

本種に近似した土器は立石遺跡から出土(報告書第76図1～4)している。本遺跡例は約1/2の残存であるため、全体的なことは定かでないが、立石遺跡の同図2の土器に最も近似している。しかし、大きさは本遺跡の方が小さい。スプーン状土製品とも近似しているが、片口部とした部分に溝が掘られていることから片口土器とした。

時期的には、文様が第IV群4類に相当することから、縄文時代後期中葉に属し、立石遺跡とも共通している。このことは、この種の土器が盛行する時期を暗示している可能性がある。

(3)石器 (第5表)

遺構の内外含めて79点出土している。その種類と点数(比率)は次のとおりである。

- ①石 鏃—17点(21.50%) ②石 匙—1点(1.26%) ③石 錐—1点(1.26%)
④種 器—1点(1.26%) ⑤切 削 器—4点(5.06%) ⑥削 器—4点(5.06%)

- ⑦使用痕のある剥片—10点(12.65%) ⑧剥片—10点(12.65%)
 ⑨石核—1点(1.26%) ⑩磨製石斧—10点(12.65%) ⑪凹み石—5点(6.52%)
 ⑫磨り石—9点(11.39%) ⑬石錘—3点(3.79%) ⑭石製品—3点(3.79%)

上記で剥片としたのはBD2住居跡の床面から出土した、貯蔵された剥片である。剥片が住居跡内に貯蔵される例はあるものの、稀な例であることから、この部分を除外して全体の構成比率をみると、所謂剥片石器は38点で石器全体の55%を占め、その中で出土数の最も多いのは石鏃の17点(24.63%)で、この数値は剥片石器全体38点の44.7%を占めている。石鏃以外の剥片石器は少なく、使用痕をもつ剥片10点(26.3%)以外は、11点(28.9%)である。

磨製石斧は10点で全体の14.49%である。礫器は17点で全体の24.63%を占め、その中でも磨り石が最も多く、礫器の64.7%を占める11点が該当する。

以上のことをまとめると、本遺跡から出土した石器は全体の55%が剥片石器で占められ、次いで、礫器の17点24.63%、磨製石斧10点14.49%、石製品3点4.34%、石核1点1.44%の順に出土量が少なくなる。それらの中で量の多い器種は、剥片石器では石鏃17点44.7%、礫器は磨り石の11点64.7%が多い。

時期がほぼ近接し298点の石器を出土した西根町上斗内III遺跡例と比較してみよう。まず、石器全体の構成をみると、剥片石器が132点44.29%、礫石器126点44.28%、磨製石斧25点8.38%、石製品15点5.03%となり、本遺跡とは異なる様相を示している。その大きな要因は、剥片石器の10.71%、磨製石斧6.11%が本遺跡の方が多く、逆に礫石器が17.65%上斗内III遺跡の方が多いことにある。

このどちらが標準的な組成比率を示しているかは定かでないが、陸前高田市川内遺跡例^⑤では、剥片石器45.62%、礫石器36.9%、磨製石斧6.63%、石製品11.61%の構成比率を示しており、どちらかというところ、上斗内III遺跡例に近い状況を示し、このことからみる限りでは、本遺跡での比率はそのままで遺跡の特徴を表わしているのか、調査地点が出土量に影響を及ぼしたものは定かでない。

このような石器はそれ単独で時期を決定することができない。本遺跡から出土した土器で、時期を明確にし得るのは第I群土器から第IV群土器で、その中でも縄文時代後期前葉～中葉に属する第III群土器・第IV群土器が圧倒的に多く、本遺跡の集落もこの時期に営まれている。このことは、本遺跡から出土した石器も、大多数はこの時期に属することを示しているものと推定される。

使用されている石材をみると、60.75%に相当する48点が北上山地古生界産の石材(チャート、チャート質粘板岩、粘板岩、粘板岩質チャート、花崗閃岩、輝石閃岩、角閃閃岩、硬砂岩、凝灰質硬砂岩、輝綠凝灰岩、淡綠色凝灰質千枚岩)が使用され、残りの内30点37.97%が奥羽山地

新第三系中新統産の石材（珪質泥岩、硬質泥岩、凝灰質珪質泥岩、玻璃質流紋岩、白色細粒凝灰岩、輝石安山岩、両輝石安山岩、淡緑色凝灰岩、軽石）等が使用されている。その他に玉髓が1点1.26%ある。この傾向は各器種とも同じで、特に石鏃や礫器（凹み石、磨り石、石鍾）に顕著で、北上山地古生界産の石材が多用されている。

この状況を西根町上斗内III遺跡例と比較してみよう。この遺跡は当遺跡の北西方約10kmに位置し、七時雨山を水源とする涼川の支流域に立地している。石器は全部で299点出土しているが、北上山地古生界産の石材は全体の約10%29点にすぎない。このことは、石器製作に使用した原石を採集した河川に存在する石質の種類に関連するであろうことを示唆している。本遺跡の場合は、北上川沿いの右岸に立地するが、本遺跡の上流で古館川や丹藤川・江刈内川といった北上山地を水源とする河川が合流しており、それらの水流によって北上山地古生界系の礫が多量に供給されたことは事実であろう。遺跡地内も一時期北上川の河川敷であろうことから考えると、出土した石器が北上山地古生界産の石材を使用しても、何んら不思議のないことである。これはとりも直さず、石器製作の原石は、特殊なものを除いては至近距離から採取することを表わしていると考えることができよう。

引 用 文 献

- (1) 本家寿一 『八天道跡一図版編・本文編』北上市教育委員会 昭和53・54年
- (2) 石川長喜 狩野敏男 『印延坂遺跡』『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩手県教育委員会 昭和54年
- (3) 大原一則 高橋与右衛門 『上斗内III・IV・V遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター 昭和59年
- (4) 近藤宗光 佐々木清文 『東北縦貫道（稲畑II遺跡）』岩手県埋蔵文化財センター
- (5) 『馬場野II遺跡』『調査時報昭和57・58年度』岩手県埋蔵文化財センター 昭和58・59年
- (6) 本宮雄輔 上野 寛 『桜沼遺跡発掘調査概報』宇石町教育委員会
- (7) 小平忠孝 三浦謙一 『叭屋敷II遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- (8) 大原一則 菅沢長介 林 謙作 『小瀬内I遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- (9) 『岩手県蛇王洞洞穴』『石器時代第7号』石器時代文化研究会 昭和40年
- (10) 中川重紀 『桜松遺跡』『岩手県埋蔵文化財センター報告第29集』岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- (11) 『大館遺跡群第3・4次発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- (12) 『青森県八戸市日計遺跡』『史学第33巻1号』昭和45年
- (13) 『後期編』『堂沢遺跡』青森市堂沢遺跡発掘調査団 1979
- (14) 『若成田IV遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- (15) 『立石遺跡』大迫町教育委員会 昭和54年
- (16) 『崎山弁天遺跡』大槌町教育委員会 昭和49年
- (17) 草間俊一編 『貝島貝塚』岩手県文化財愛護協会、岩手県花巻町教育委員会 1971
- (18) 『門前貝塚』陸前高田市教育委員会 1974
- (19) 『青森県の土器』『縄文文化の研究—4—』雄山閣 1983
- (20) 『桑刺下遺跡発掘調査報告書』平安博物館 1975
- (21) 高橋与右衛門 『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター 1983

- 020 昭和58年に当埋蔵文化財センターが調査した。石川長喜氏からの教示による。
- 021 工藤利幸 「葦内遺跡」岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- 024 上野 猛 「下猿田Ⅰ遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』 昭和57年
- 025 中川重紀 「熊野橋遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』 昭和56年
- 029 工藤利幸 「湯舟沢遺跡」発掘調査略報昭和57・58年度 岩手県埋蔵文化財センター 昭和58・59年

参 考 文 献

上記以外に、十腰内式土器の編年は岩木山所収の「十腰内遺跡」の報告、宮戸式土器の編年は後藤勝彦氏の「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器について」等を参考にした。また、全体的なことは講談社発刊の「縄文土器大成—3—」が参考になった。

VIII さ い ご に

以上、川口II遺跡に対する発掘調査の概要を中心に、そのまとめと若干の問題点を呈示したが、以下にその要約をしておく。

1. 本遺跡に対する発掘調査は、国道4号川口バイパスの建設に伴う、記録保存を目的とした緊急発掘調査で、発掘面積は3,000㎡である。その内で、遺構や遺物が濃密な分布を示すのは、本線分北端800㎡と飛び地分東側200㎡の約1,000㎡である。
2. 出土した遺物には土器と石器があるが、その主体は土器である。土器には縄文時代早期・中期・後期に属するものを含むが、99%は後期に位置づけられる。後期の土器は、さらに、前葉と中葉に細分され、両者では中葉の方が多い。
3. 検出された遺構には①住居跡——5棟、②土坑——22基、③溝状遺構——1条がある。住居跡はいずれも縄文時代後期中葉(加曾利BII～III式期)に位置づけられ、2棟には出入口状施設を具備している。土坑は時代や時期を確定できないものもあるが、おおむね①縄文時代——17基、②それ以降——5基に細分され、縄文時代に属する17基は、総合的に判断すると、縄文時代後期前葉か中葉に位置づけられるであろう。
4. 調査範囲での遺構や遺物の分布をみると、今回の調査範囲が遺跡全体の西端(飛び地分)と東端(本線分)に相当し、本遺跡の中心は先の調査範囲に挟まれた現用畑約2,000㎡に位置する。検出された遺構や遺物から、未調査区域に相当の遺構や遺物が埋存すると推定される。

北上川流域での縄文時代後期に属する集落の調査例は、八天(北上市)、萩内²⁸・下猿田I²⁹(盛岡市)、熊野崎³⁰(平石町)、卯邊坂・湯舟沢³¹(滝沢村)、上斗内III(西根町)の各遺跡が知られ、本遺跡は最も北に位置している。時期は前葉と後葉が大半で、中葉の集落は下猿田I遺跡と本遺跡例のみであり、この傾向は県内全体に共通している。この意味では非常に稀有な例として、貴重な資料を提供したことになり、本遺跡の調査結果が岩手町のみならず、岩手県全体の基本資料になり得るものと確信している。

最後になったが、本遺跡の発掘調査では高橋昭治(岩手県文化財保護指導員)・渡辺誠(名古屋大学)両氏には多大なるご助言とご教示をいただいた。記して感謝の意を表する。

また、現地調査では浦田高氏をはじめとする地元の方々28名、室内整理では南館恭子氏以下4名の方々からご協力をいただいた。併せて謝意を表する。

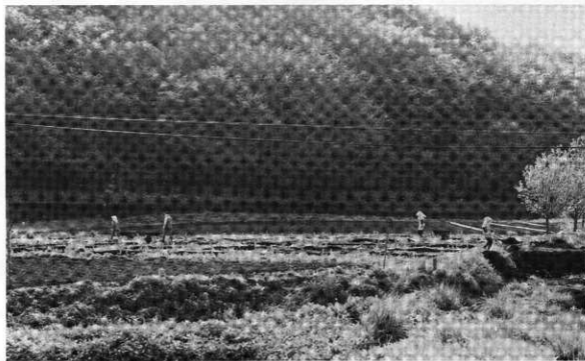


PL-1 遺跡全景 (空中写真)

北から撮影



A. 遺跡遠景



B. 遺跡近景

PL-2 遺跡 (遠景・近景)

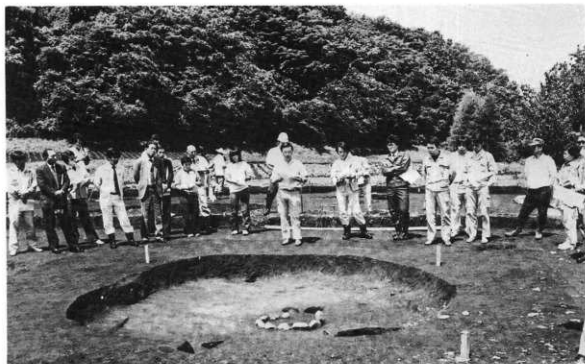


A. 雑物除去

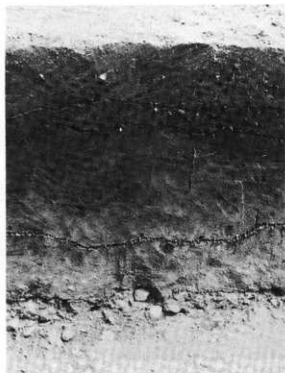


B. 粗掘り

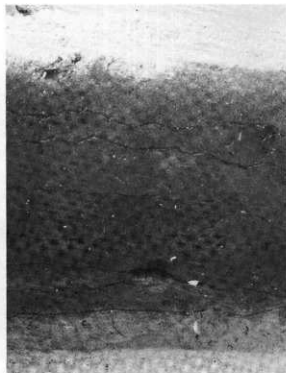
PL-3 調査風景



A. 現地説明会

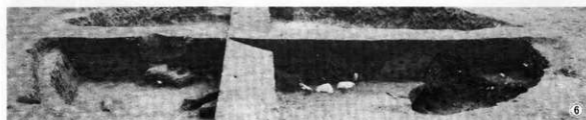
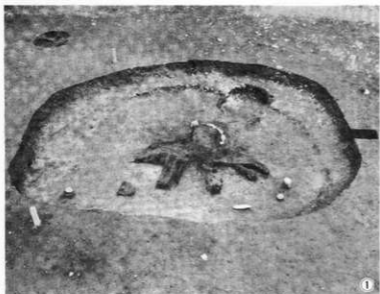


B. 基本層序 (BM軸線3)



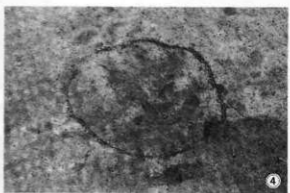
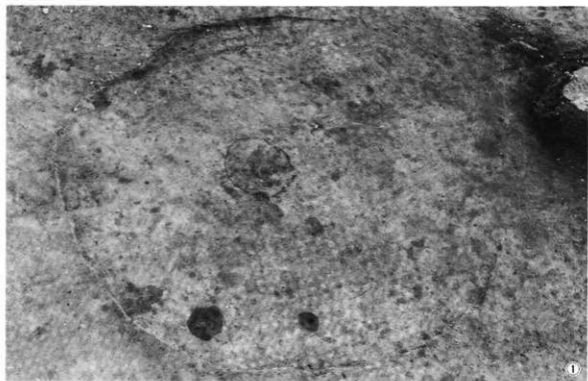
C. 基本層序 (B17軸線G)

PL-4



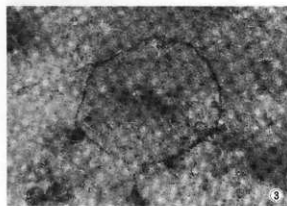
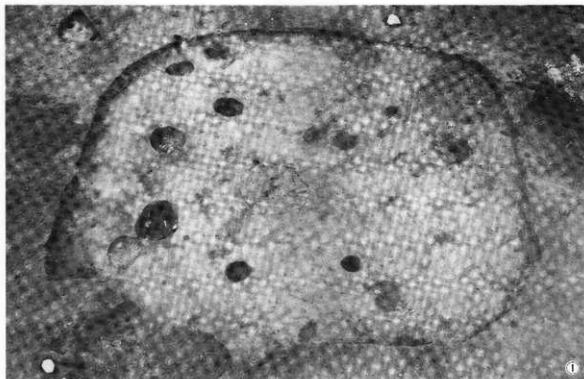
1.炭化物出土状況 3.炉跡 5.遺物出土状況
2.完掘後全景 4.炉跡断面 6.埋土土層

PL-5 AC2住居跡-1・2



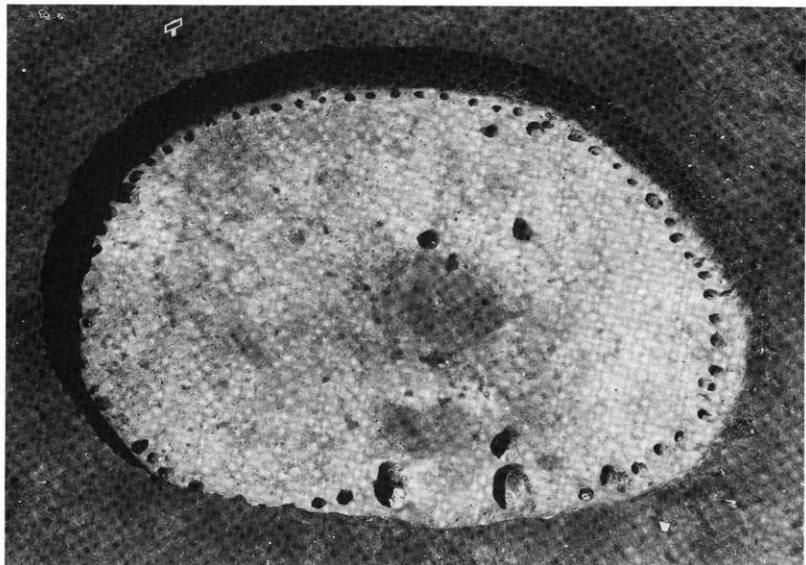
1.完掘後全景 4.炉跡
2.埋土土層
3.遺物出土狀況

PL-6 BB1住居跡



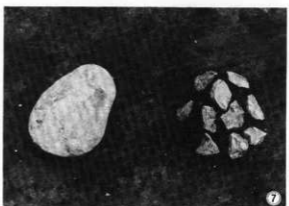
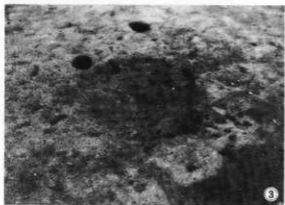
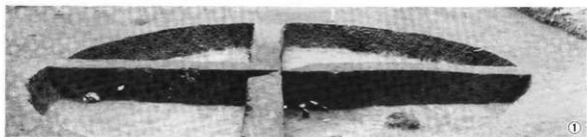
1.完掘後全景 3.炉跡
2.埋土土層 4.遺物出土狀況

PL-7 BB3住居跡



PL-8 BD2住居跡

完掘後全景

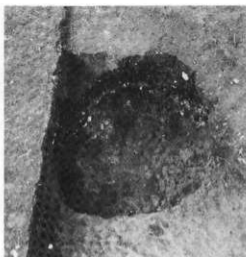


1. 埋土土層 5. 壁際柱穴列
 2. 出入口施設 6. 遺物出土狀況
 3. 炉跡 7.
 4. 炉跡断面

PL-9 BD 2 住居跡



AC 1 土坑



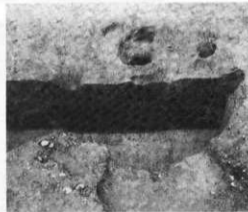
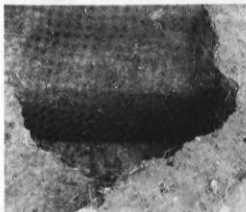
AC 2 土坑-1

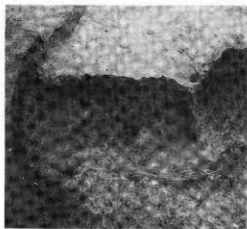


AC 2 土坑-2

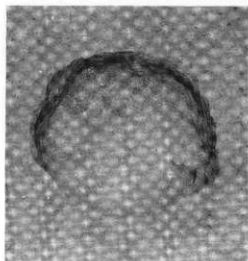


PL-10 土坑





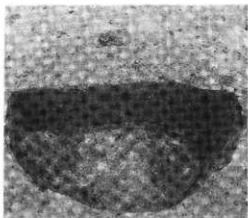
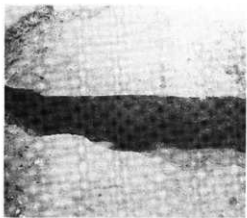
AC 2 土坑-3



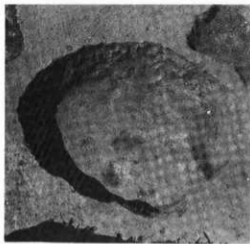
AK 5 土坑



AL 5 土坑



PL-11 土坑



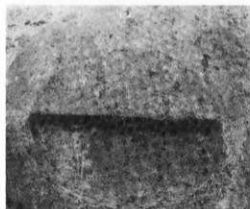
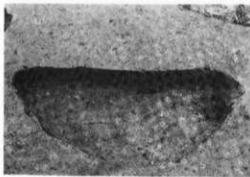
AM4 土坑



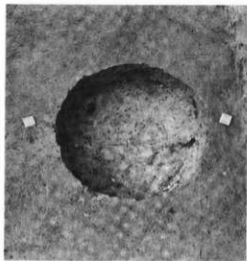
AN3 土坑



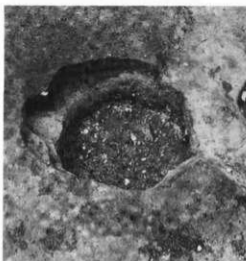
AN4 土坑



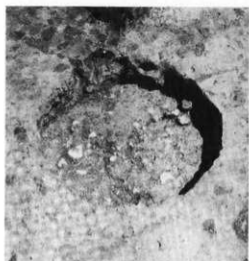
PL-12 土坑



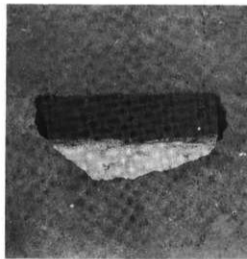
BA16土坑



BB 3 土坑-1

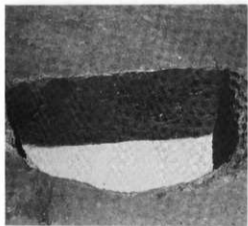
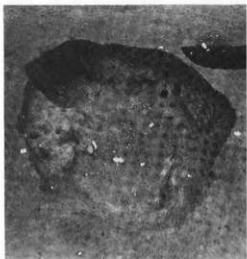


BB 3 土坑-2

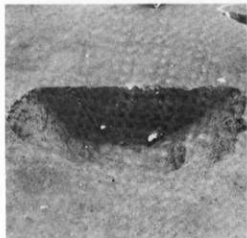


PL-13 土坑



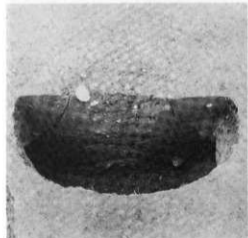


BB16土坑



BC 3 土坑-1

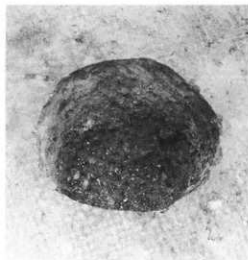
PL-14 土坑



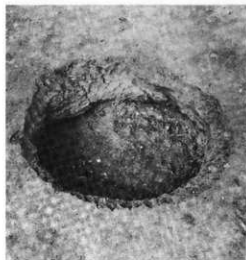
BC 3 土坑-2



BC 3 土坑-3



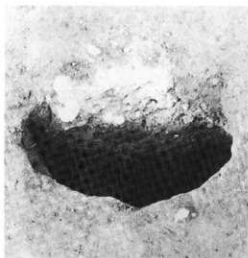
BC 3 土坑-4



BC 4 土坑-1

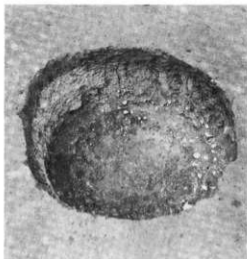


PL-15 土坑

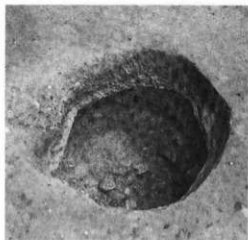




BC 4 土坑-2



BF 4 土坑



BI 3 土坑



BD 4 土坑



PL-16 土坑

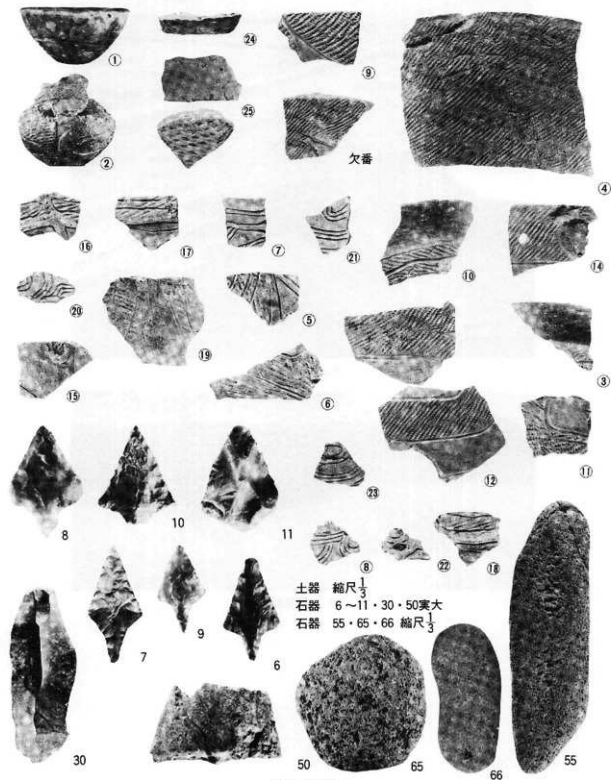


A. 調査後全景

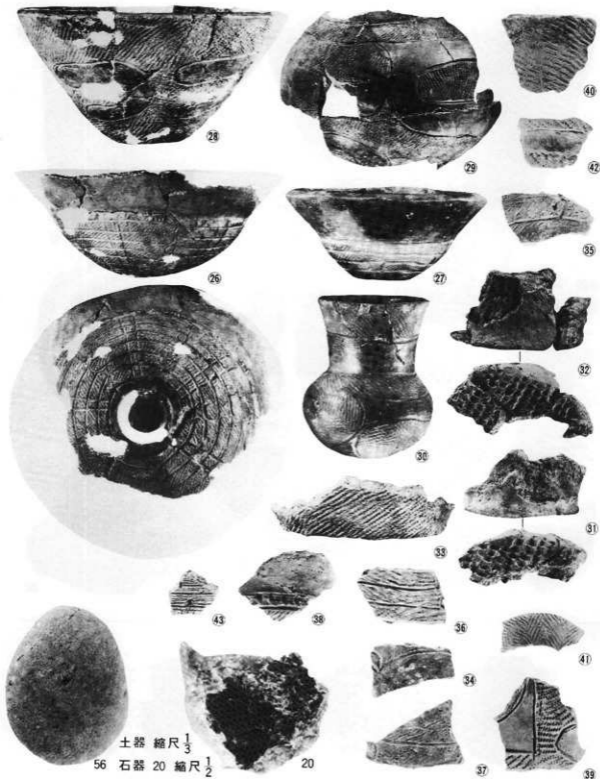


B. 土層断面

PL-17 溝状遺構



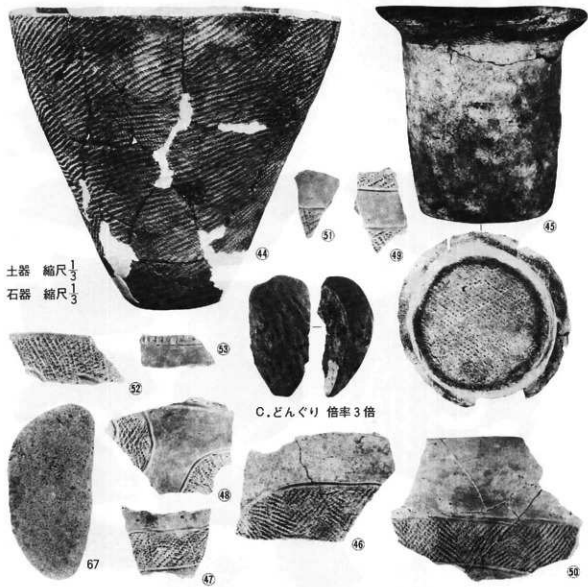
AC 2 住居跡
 PL-18 遺構内の遺物 - 1



土器 縮尺 $\frac{1}{3}$
 56 石器 20 縮尺 $\frac{1}{2}$
 石器 56 縮尺 $\frac{1}{3}$

BB 1 住居跡

PL-19 遺構内の遺物-2



土器 縮尺 $\frac{1}{3}$
 石器 縮尺 $\frac{1}{3}$

C.どんぐり 倍率3倍

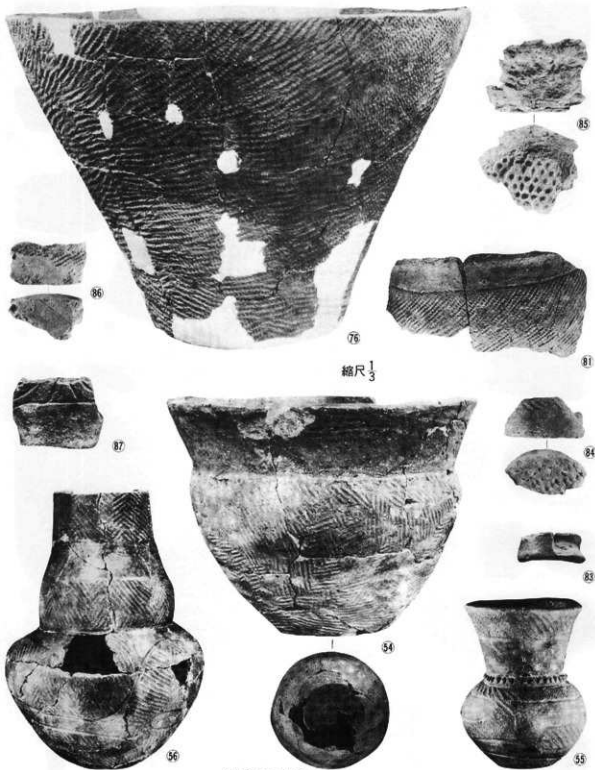
BB 3 住居跡



アスファルト状
 固形物(実物大)

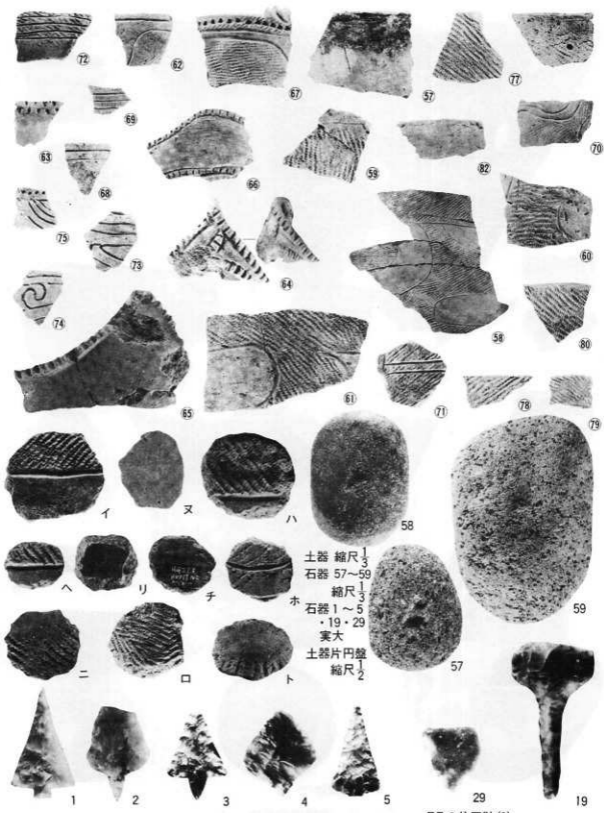
BD 2 住居跡(1)

PL-20 遺構内の遺物 - 3



BD 2 住居跡 (2)

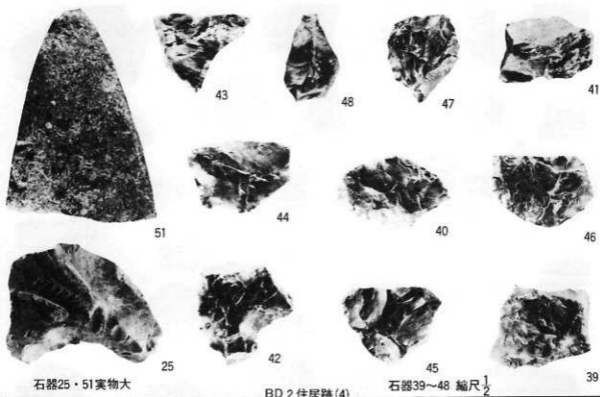
PL-21 遺構内の遺物 - 4



土器 縮尺 $\frac{1}{3}$
 石器 57~59 縮尺 $\frac{1}{3}$
 石器 1~5 縮尺 1
 ・19・29 実大
 土器片円盤 縮尺 $\frac{1}{2}$

29 BD 2 住居跡 (3) 19

PL-22 遺構内の遺物 - 5

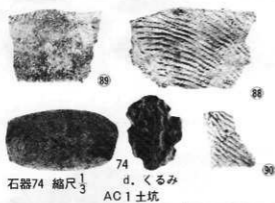


石器25・51実物大

BD 2 住居跡 (4)

石器39~48 縮尺 $\frac{1}{2}$

39



石器74 縮尺 $\frac{1}{3}$

74
d. くるみ
AC 1 土坑



BA16土坑

BB 3 土坑-1



AC 2 土坑-1



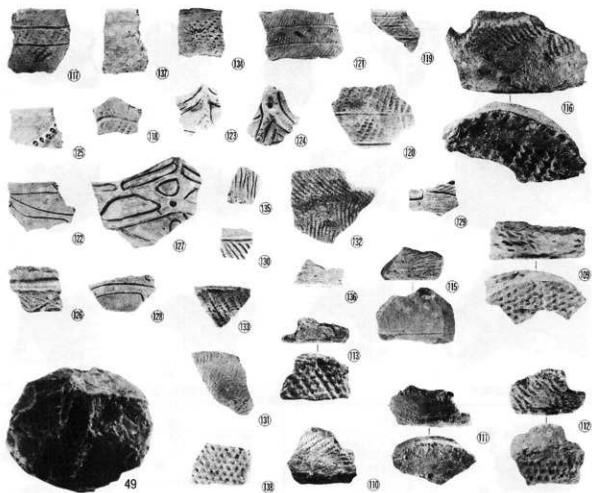
12
石器12実物大
AC 2 土坑-2



BB16土坑

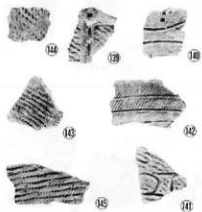
土器 縮尺 $\frac{1}{3}$

PL-23 遺構内の遺物 - 6

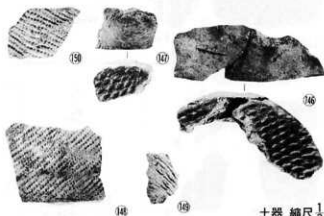


石器 49 縮尺 $\frac{1}{2}$

BC 3 土坑-1



BC 3 土坑-2



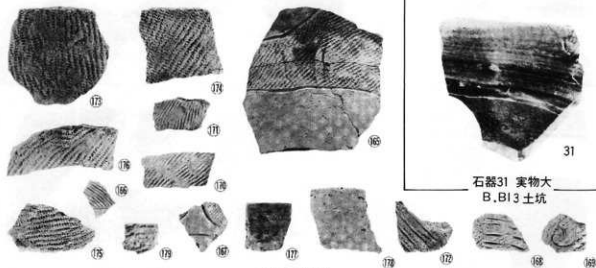
BC 4 土坑-1

土器 縮尺 $\frac{1}{3}$

PL-24 遺構内の遺物 - 7



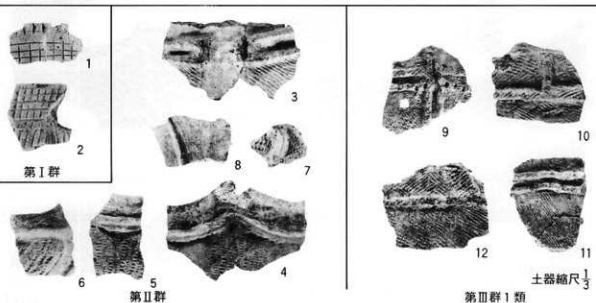
A, BD 4 土坑



石器31 実物大
B, BI 3 土坑

C, BF 4 土坑

PL-25 遺構内の遺物 - 8

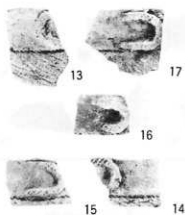


第I群

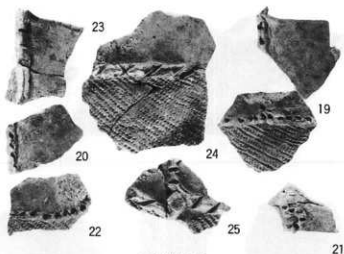
第II群

第III群 1類

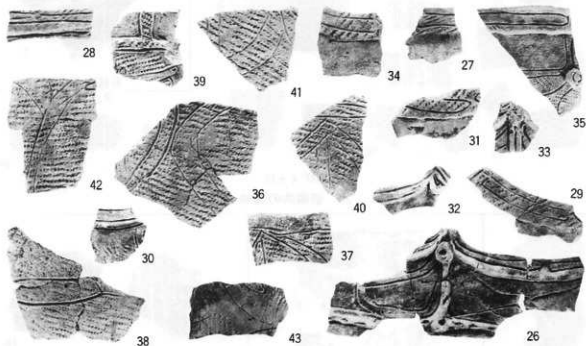
PL-26 遺構外の遺物 (土器-1)



第Ⅲ群2類



第Ⅲ群3類



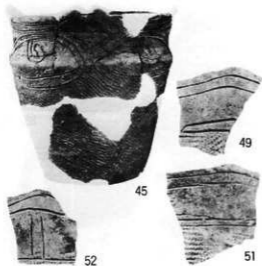
第Ⅲ群4類



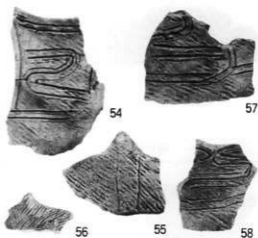
第Ⅲ群5類

縮尺 $\frac{1}{3}$

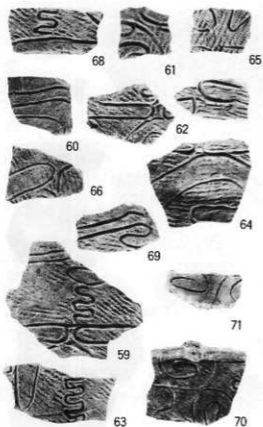
PL-27 遺構外の遺物 (土器-2)



第Ⅲ群 5類



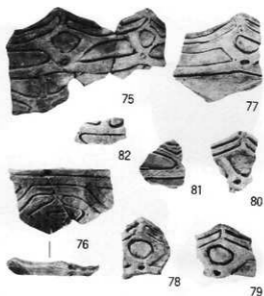
第Ⅲ群 6類



第Ⅲ群 7類



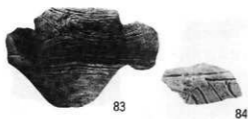
第Ⅲ群 8類



第Ⅲ群 9類

縮尺 $\frac{1}{3}$

PL-28 遺構外の遺物 (土器-3)



第Ⅲ群10類

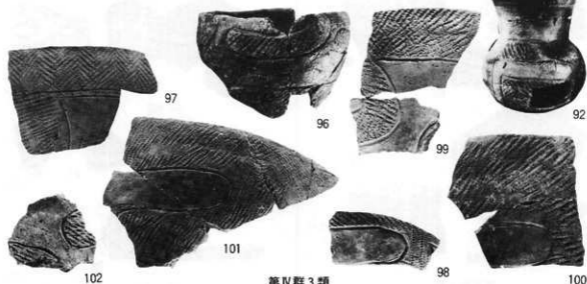
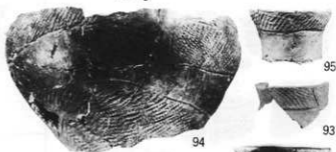
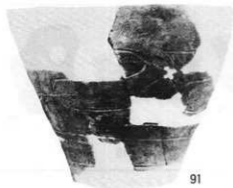


第Ⅳ群2類



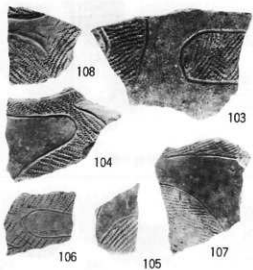
第Ⅳ群1類

83~90・92~102 縮尺 $\frac{1}{3}$
91 縮尺 $\frac{1}{6}$

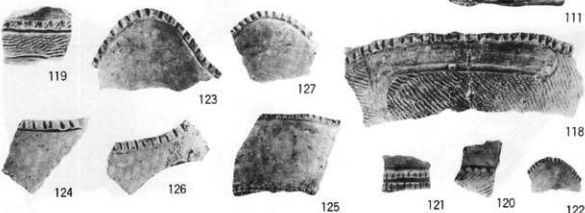
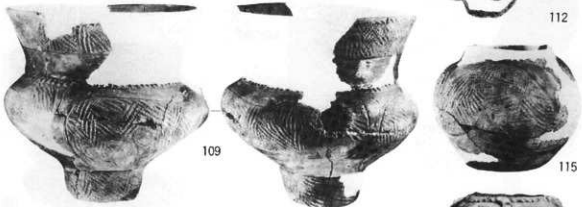


第Ⅳ群3類

PL-29 遺構外の遺物 (土器-4)



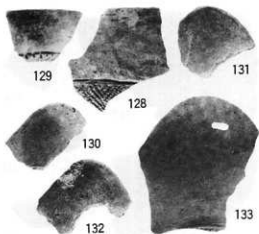
第IV群3類



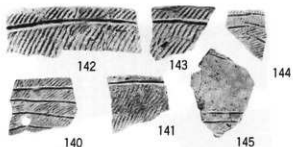
第IV群4類

縮尺 $\frac{1}{3}$

PL-30 遺構外の遺物 (土器-5)



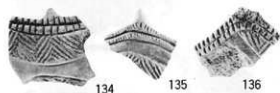
第IV群3類



第III群7類



第IV群8類



第IV群5類

128~148・150~153 縮尺 $\frac{1}{3}$

149 縮尺 $\frac{1}{6}$



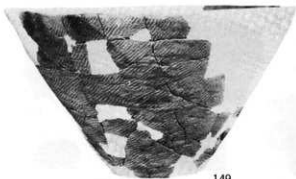
第IV群6類



150



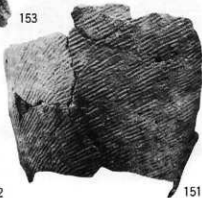
153



149



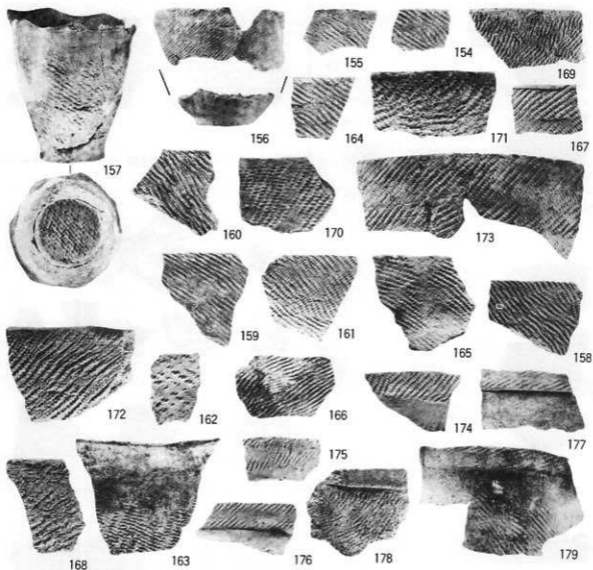
152



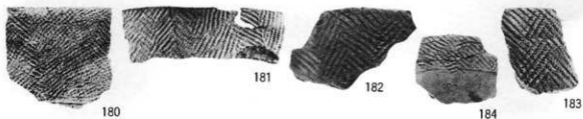
151

第IV群4類

PL-31 遺構外の遺物(土器-6)



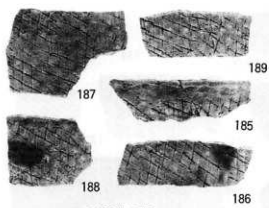
第V群1類



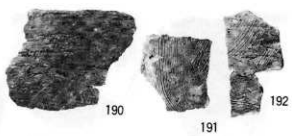
第V群2類

縮尺 $\frac{1}{3}$

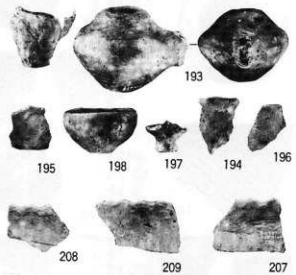
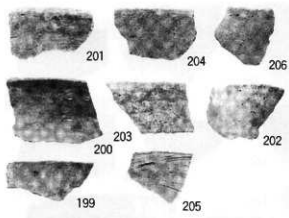
PL-32 遺構外の遺物 (土器-7)



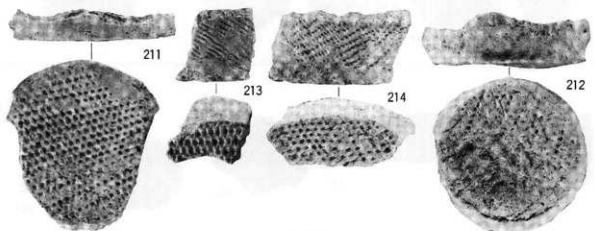
第V群3類



第V群4類



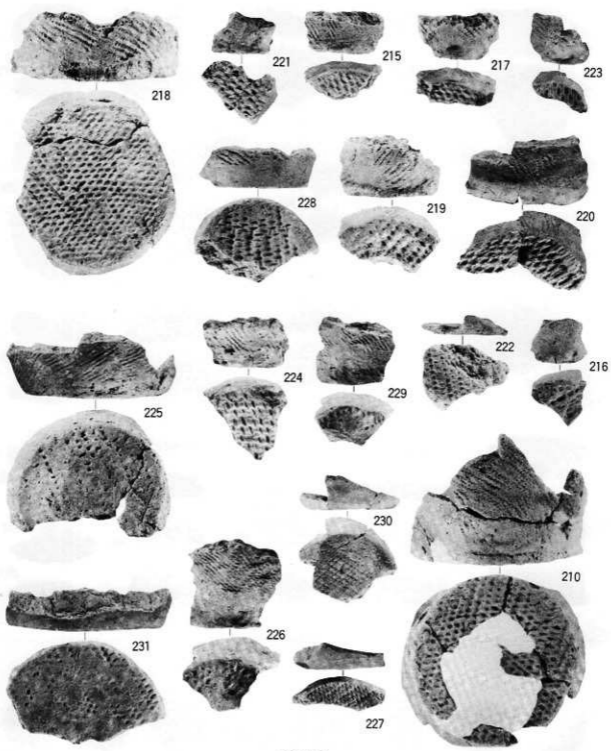
第VI群



土器底部

縮尺 $\frac{1}{3}$

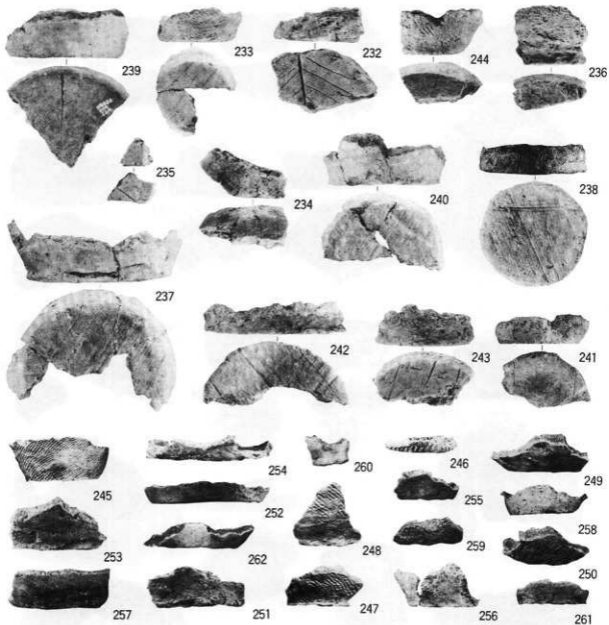
PL-33 遺構外の遺物 (土器-8)



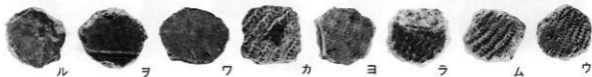
土器底部

縮尺 $\frac{1}{3}$

PL-34 遺構外の遺物 (土器-9)

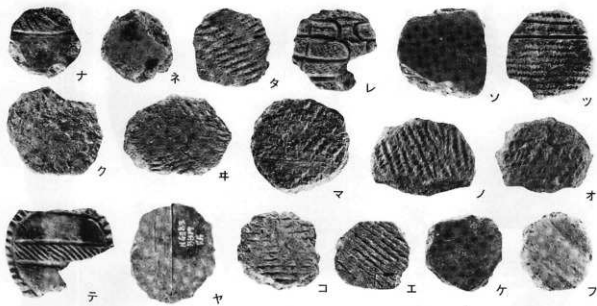


土器底部 縮尺 $\frac{1}{3}$



土器片円盤 縮尺 $\frac{1}{2}$

PL-35 遺構外の遺物 (土器-10, 土製品-1)



テ-土製円盤

タ~ナ・イ~エ 土器片円盤 縮尺 $\frac{1}{2}$



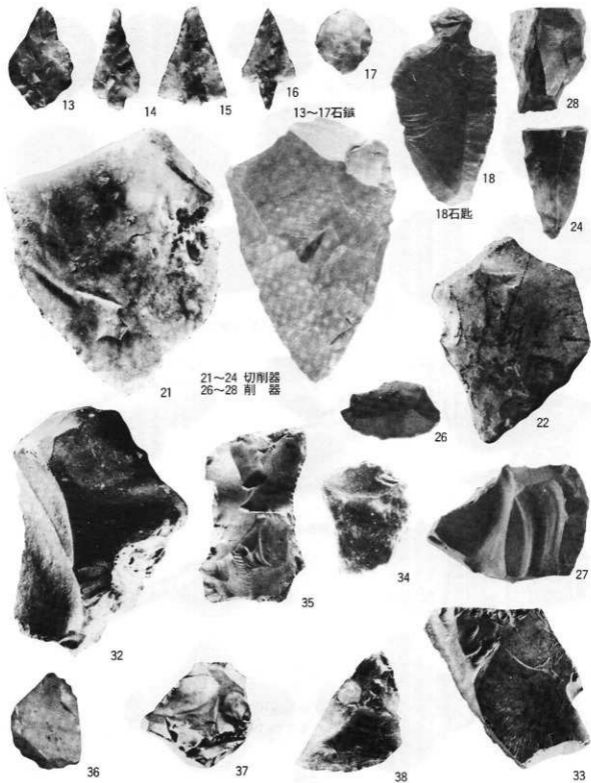
異形小型片口土器

縮尺 $\frac{2}{3}$



土偶

PL-36 遺構外の遺物 (土製品-2)



32~38使用痕のある剥片実物大

PL-37 遺構外の遺物 (石器-1)



52~54 石斧 縮尺 $\frac{1}{2}$



60~64凹石
縮尺 $\frac{1}{3}$



68~73磨石
縮尺 $\frac{1}{3}$

78縮尺 $\frac{1}{3}$

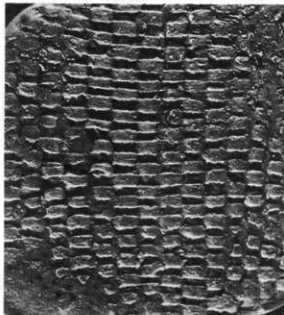


57~76石鐘 縮尺 $\frac{1}{3}$

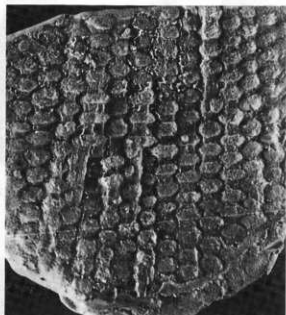
77~79石製品

77・79縮尺 $\frac{2}{3}$

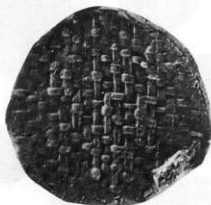
PL-38 遺構外の遺物 (石器-2・石製品)



A 2 型



A 1 型(経糸を増している例)



B 型

実物大



C 型

PL-39 土器底部網代痕のモデリング

岩手県埋文センター文化財調査報告書第84集

国道4号川口バイパス関連遺跡発掘調査

川口II遺跡発掘調査報告書

印刷 昭和60年1月25日

発行 昭和60年1月31日

発行 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県安波郡南村大字下原岡字高屋敷

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 河北印刷株式会社
